

私なら 尾道市を こう変える

～〔市立〕尾道大学経済情報学部
3・4年生からの提言～

平成22年6月

〔市立〕尾道大学 経済情報学部・安達 巧 研究室

発刊にあたって

本書は、私が〔市立〕尾道大学経済情報学部で担当する「経営分析論」の授業を受講する学生（3年生・4年生）のうち、自身のレポート（題目「私なら尾道市をこう変える」）を世間へ発信（出版）することを希望した学生達のレポートを編集した小冊子です。

首都圏の専門職大学院（ビジネススクール）教授から平成22年（2010年）4月に尾道大学経済情報学部教授へと転じた私が感じた尾道市の印象は、「典型的な地方都市で、若者が少なく活気に乏しいなあ」というものでした。また、尾道大学の学生〔気質〕については、「真面目で素直だが、おとなしい」という感想を持ちました。

尾道大学は、広島県尾道「市立」の大学です。大学教授等の研究者は日本国から研究者番号を付されていますが、彼等が勤務する大学等の種類は、①東京大学や京都大学に代表される国立大学（国立大学法人）、②早稲田大学や慶応義塾大学などの私立大学、③尾道大学に代表される（？）県立や市立の公立大学、に大別されます。その中でも公立大学の大半は、教授等に対して「地域貢献」を強く求める傾向があり、広島県尾道市の場合も、「尾道市立」である尾道大学の教授や准教授等に対して地域貢献を求めています。つまり、尾道大学教授は、学生への教育や独創的な研究と並んで、教授職を通じた尾道市への地域貢献という重要な役割をも担っているのです。

私は、尾道大学経済情報学部教授に着任した直後から、学生に対する教育活動と地域貢献とを連携させる方法を考えていました。尾道市も他の地方都市と同様に人口減少、特に若年層減少に歯止めをかけて地域の活性化を図りたいと願っているはずです。そんな尾道市に対して、若者の視点からの尾道市の姿を正直に伝えるとともに、大学生が考える尾道市の改革プランを愚直に伝えることが地域貢献の第1歩だと私は考えました。

「行政のプロ」から見れば、本書に掲載された学生レポートのほとんどが「役立たず」と判断されるでしょう。しかし、たとえ1編でも「面白いアイデアじゃないか」と評価されるレポートがあれば、常に「実際に行動すること」の重要性を私から口を酸っぱくして言われ続けている学生達にとって大きな自信となり、本書出版の意義も見出すことができるでしょう。

本書が、尾道市、尾道市民及び尾道大学学生達の全てにとって「Win-Win」の関係になる契機となり、読者の皆様が実際に前に歩き始められましたら、本書発刊に携わった者として本当に嬉しく思います。

平成22年 紫陽花の季節に…

〔市立〕尾道大学 経済情報学部 教授
博士（経済学） 安達 巧

まえがき

皆さんは、尾道市についてどんなイメージを持っていますか？

中国・四国地方に住む方々であれば「観光の街」というイメージを抱くでしょう。あるいはグルメな人、ラーメンが好きな方なら「尾道ラーメン」を想像するでしょう。

私達のほとんどが、尾道大学を受験するまで、尾道市に来たことがありませんでした。「尾道はいいところだよ」と色んな人達に言われていたこともあり、活気のある場所をイメージしていました。

ところが、実際に尾道市に住んでみると、イメージとは全く違う現実が待っていました。良く言えば、港町として栄えた頃の雰囲気を守っている落ち着いた街（市）です。こうした点は、もちろん、尾道市の見所としてもPRされています。けれども、私達の世代から見た尾道市は、余り活気がある街とは思えません。また、観光名所として強く推されているのが寺院などしかない点も、実際に尾道に来てみて驚いたことでした。

尾道市には、なぜこの市（街）に大学が必要だったのか、と実感せざるを得ない雰囲気があると感じています。しかし、残念なことに、学生が住むことを想定した街づくりが進められているようには思えません。

私達は、〔市立〕尾道大学経済情報学部の安達巧教授が「経営分析論」の授業で課されたレポート作成において、複数の選択肢（テーマ）の中から「私なら尾道市をこう変える」というテーマを選びレポートを作成しました。尾道大学に入学して3年目あるいは4年目となる学生達が、尾道を見て感じたことを正直に文章に表しました。

本書は、授業レポートを「出版」という形で世間に発信することを希望した者達の処女作です。「駄作が多い」とのご批判を頂戴することも覚悟しています。それでも私達は、敢えて公刊することで、私達の考えや、尾道市への期待内容を分かって頂けると思いました。行動することで初めて、たとえ微力であれ、尾道市の発展に貢献できる筈だと考えました。

もちろん本書出版は、公立大学教授として地域貢献を求められている安達巧教授の熱意あふれるご指導がなければ不可能でした。この場を借りて心より厚くお礼を申し上げます。

平成 22 年 6 月 著者を代表して 尾道大学経済情報学部 4 年 市場隆介
3 年 馬屋原彩
木村千尋
城めぐみ
橋本美里
福島由紀
堀田佳伽

～附記～ 本書中に表現等の誤りがある場合は、全て各著者の責任であることを明記しておきます。

各自のレポートの該当頁数

明石 成弘	1
浅田 知美	4
市場 隆介	8
猪原 遥香	1 2
岩下 真吾	1 6
岩見 真実	2 0
宇佐美 翔馬	2 4
馬屋原 彩	2 7
岡本 雄太	2 9
尾西 はるか	3 2
鬼村 茉莉	3 5
櫻山 麻由美	3 8
門田 楓	4 2
川合 亨知	4 6
木村 千尋	5 0
小松原 那奈	5 4
近藤 匡晃	6 0
城 めぐみ	6 4
高見 祐輔	6 9
告 日菜実	7 3
都築 亮平	7 6
徳山 亘	8 1
土井 強平	8 5
中本 昌宏	8 9
橋本 郁美	9 2
橋本 美里	9 5
橋本 竜	9 8
羽立 寛太	1 0 2
羽渕 章	1 0 6
肥田 友理恵	1 0 9
兵頭 佑紀	1 1 3
福島 淳	1 1 6
福島 由紀	1 2 0
益田 辰徳	1 2 4
三島 知彬	1 2 6
宗重 将俊	1 3 1
八木 喜徳	1 3 4
山口 翔太郎	1 3 9
楊 美芝	1 4 3

尾道市の活性化

明石 成弘

1

私が尾道市を活性化させようと思ったら、まず尾道市で定住や消費してくれる人を増やすのが早いと考える。そのためには何をするかが問題だが、尾道市は傾斜がキツイ場所が多いのが特徴的だ。(駅の裏などは下の写真のような場所ばかり)

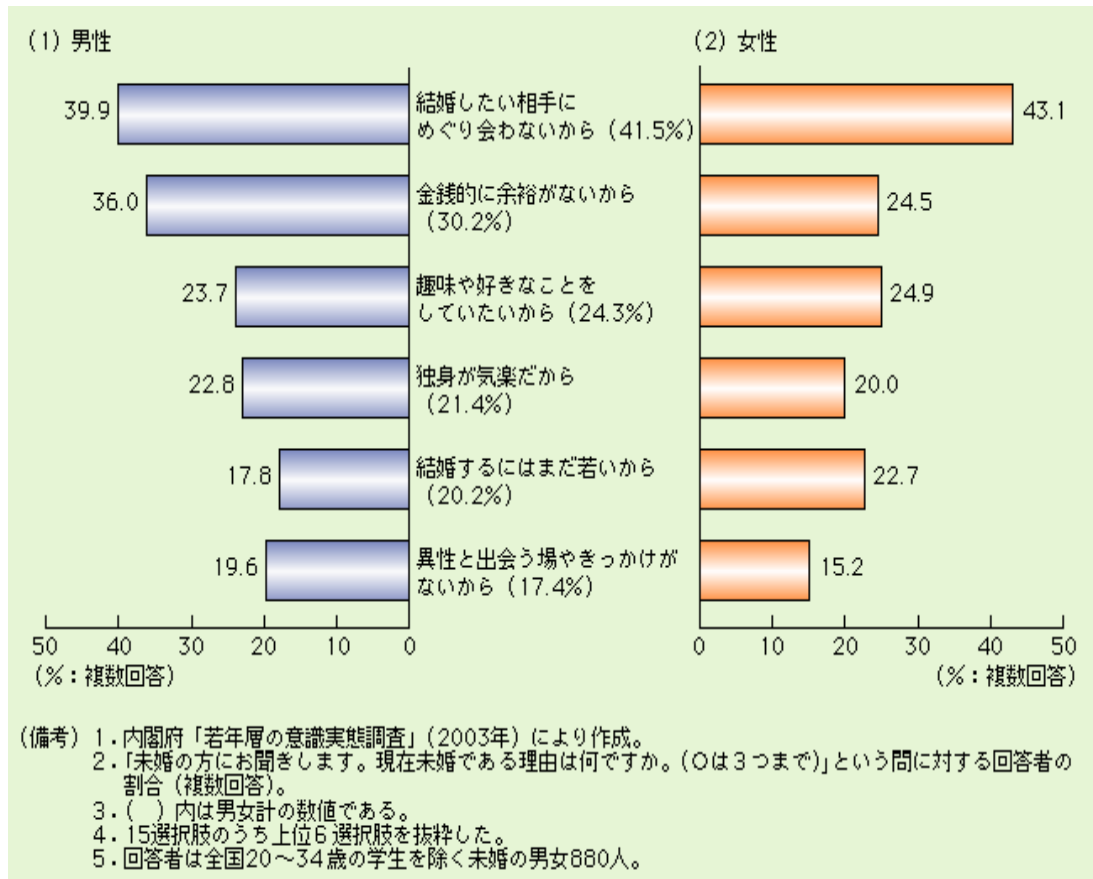


その上、町を歩いていてお年寄りとすれ違う割合が多いように感じる(少子高齢化なので全国的にいえる事だが)。あとバスなどの移動環境などは整っているが、細い道などが多い分、通行できる場所は限られてくる。小型バスなどを導入することやタクシー料金を年齢で割引するようにはどうだろうか。老人に住みやすい町=活性化という関係性は数字的にも言えるだろう。またこの高齢者に住みやすい町にするには民間事業者の協力が必要不可欠であり。その民間事業者に協力してもらい代わりに高齢者に事業のアイデアを出してもらったり、高齢者に適した仕事を行ってもらえるなどの考えはどうだろうか。これにより働く意欲があるのに働く場所や機会が与えら

れない高齢者などの雇用問題も解消できる(すべての人がとゆうのは難しいかもしれないが)。与えるばかりではなくお互いが持ちつ持たれつの相互関係を持ってこの問題に取り組んでいけばよいだろう。

2

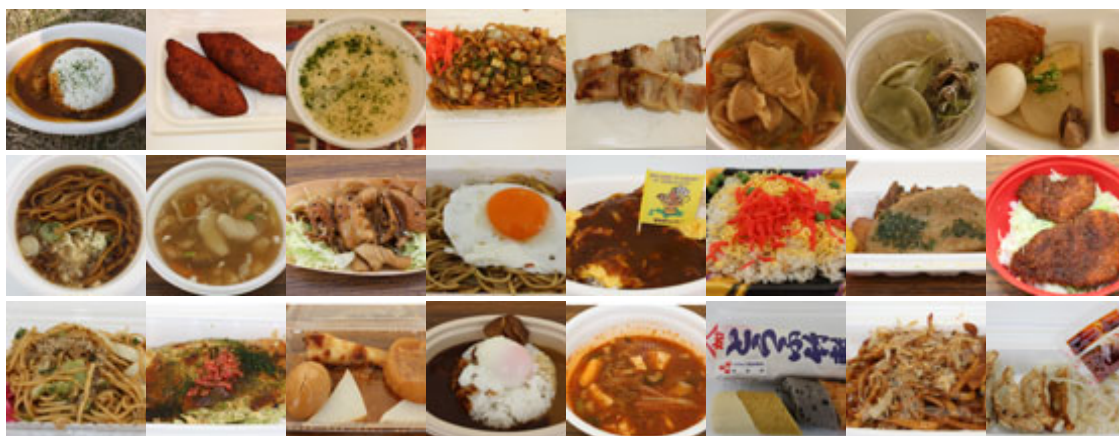
定住という事でいえば、今の世間の流れに乗って、婚活を推進するプロジェクトを考えてみてはどうだろうか。最近の若者が結婚しない理由は下の通りである。



ここで、一位と二位に金銭的な問題と出会いがランクインしている。最近、ニュースでは婚活を地域の活性化に利用していることをよく耳にする。このプロジェクトを成功させるにはこの一位と二位を解決する必要がある。たとえばその婚活パーティーで出会い結婚すると尾道のマンションの価格が半額とか子供が一人できるたびに何万円かもらえるなどが一般的なところだろう。私はそれに加えて地方から来て尾道に住む家族が祖父母を尾道に呼び一緒に住みやすいような環境を作るのも重要かつ活性化には効果的だと考える。これには1で述べたような事ができている必要があるが。ただしこのプロジェクトは今、様々な地域で考え実行されているが、少し長期的な考え(結婚したり子供が生まれたりするのは時間がかかるため)の活性化であり、まだ効果がでていないようなので十分議論する必要があるだろう。困っている時に少し美味しそうな話があるとすぐに飛びつくのは失敗する人がする行動なので。

3

次に尾道市で消費してもらい活性化するということが。尾道市は観光都市なので旅行者によるある程度の消費はあり、観光事業も飽和状態にある。ここで尾道市も最近流行のB級グルメに参戦してみてもどうだろうか。今やB級グルメの経済効果は何百億円ともいわれていてそれを地域の活性化に用いているところは多い。今はネット注文で購入することもできるので開拓しやすい事業だろう。この前のB級グランプリで出店した商品はこれだけある。



この中で个性的かつ斬新で美味しい商品を開発し、一番になるのは簡単ではないだろう。B級グルメの特徴として、価格や作り方も庶民的でどちらかといえば質より量を重視している点がある。男女比は46対54、年齢階層比は10代2%・20代12%・30代33%・40代32%・50歳以上21%。この数字を見るとどちらかといえば若者にはまだ浸透していないように思う。ここで尾道はこの若者をターゲットにしたB級グルメを開発するべきであろう。例えば尾道の名産の八朔を使い若者にも好かれるようなドルチェなどのスイーツを作ってみてもどうだろうか。この前、ニュースで広島大学が尾道の八朔を使った商品のCMをしていたので二番煎じの感じは否めないが。尾道大学の経済情報学生が若者視点の商品アイデアを考え、美術学生がパッケージを描くのも面白いかもしれない。現在、全国各地で様々な地域活性化が行われているが、有力な地域資源を抱えていても、住民、業者、行政が上手くつながっていない例が少なくない。地域活性化が上手くいかない地方は地域資源の有無や知名度が高い低いを言う前に、住民、業者、行政がしっかりと連携することが最優先事項だろう。

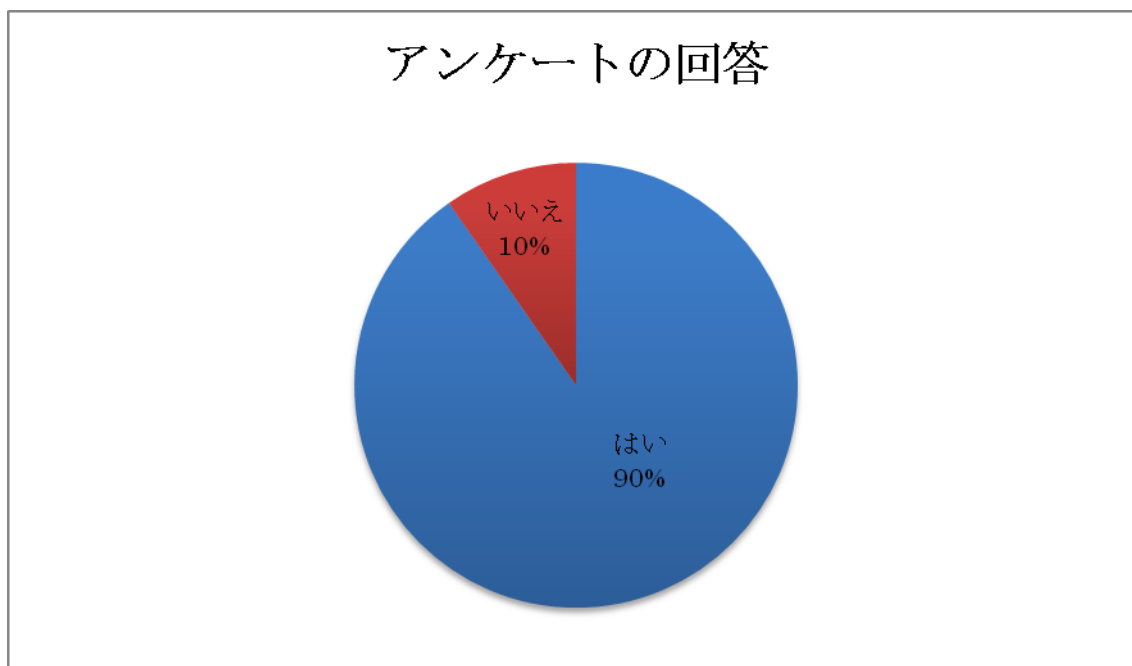
尾道市に住み始めて早3年。わたしならこの身近にある尾道市をどのように変えていくかを考える。わたしは、尾道商店街に焦点を当ててみた。

尾道商店街は全長約1.6キロメートル、6つの商店街が並び、約400店舗ある。先日、わたしは尾道商店街を散策してみた。商店街に行ったのは半年ぶりくらいである。行ってみると、日曜日なのにわたしの予想よりはるかに若者の商店街利用者が少なかった。また、開いている店舗数を数えてみると、約140店舗くらいと半分も営業していなかった。尾道駅からも近い場所にあるのに利用者数が少ないし、活気が少ないように感じた。そのため、わたしは、尾道商店街を現在よりも利用が増えるような商店街にするにはどのような事をすればよいかを考えてみた。そして、せっかく尾道大学があり若い学生もいるので、もっと若年層の人にも尾道商店街を利用してもらいたいと考えた。そのため、若者にターゲットを絞って尾道商店街の利用者を増やすにはどうすればよいかを考えてみた。

したがってまず、わたしは尾道大学生の友人（約70人）にアンケート調査を行ってみた。

アンケート内容と結果は下記の通りだ。

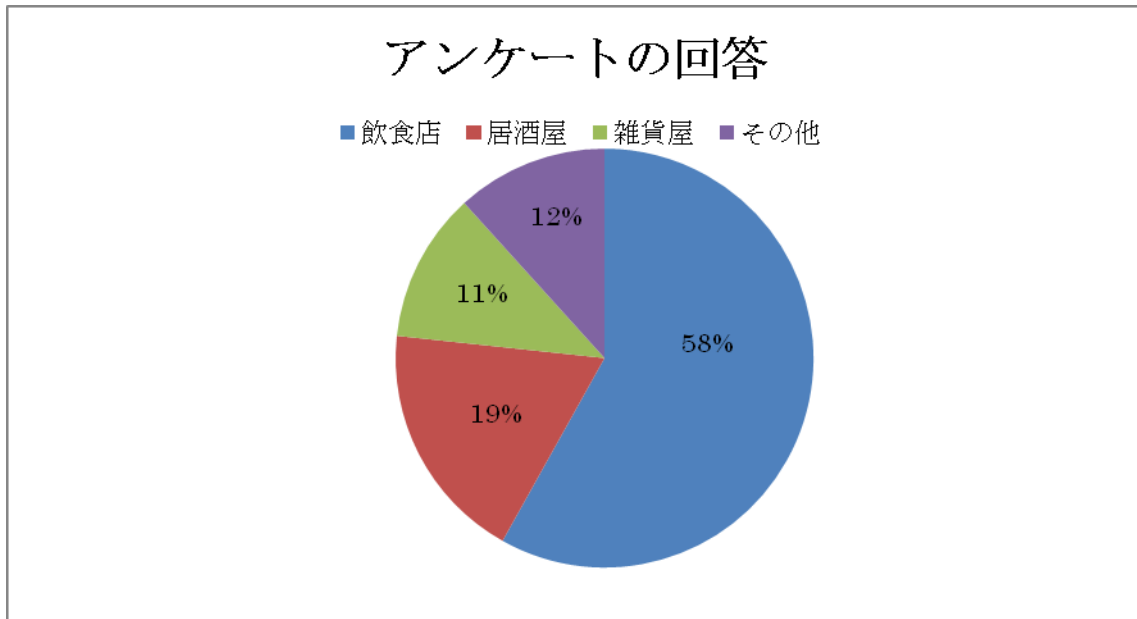
Q1.あなたは尾道商店街を利用したことがありますか？



Q1 考察

ほとんどの尾道大学生は利用したことがあった。しかし、頻繁に利用している人は少ないのが現状である。

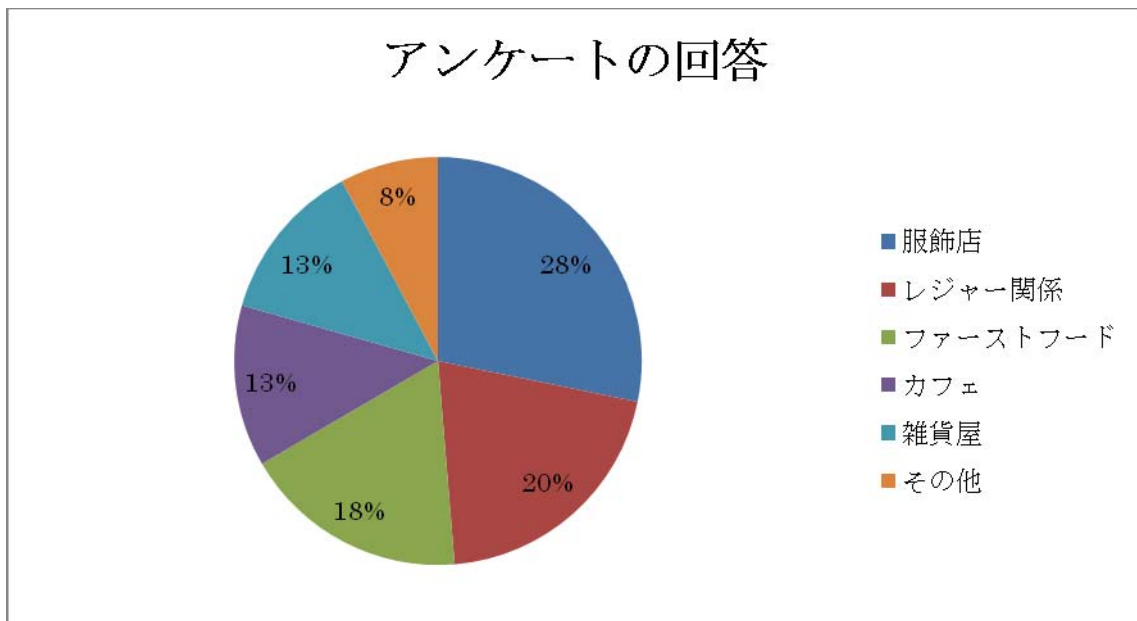
Q2.利用したことがあると回答した人は、どのようなお店を利用しましたか？



Q2 考察

7割の学生は飲み、食べに商店街を利用したことがあることがわかった。

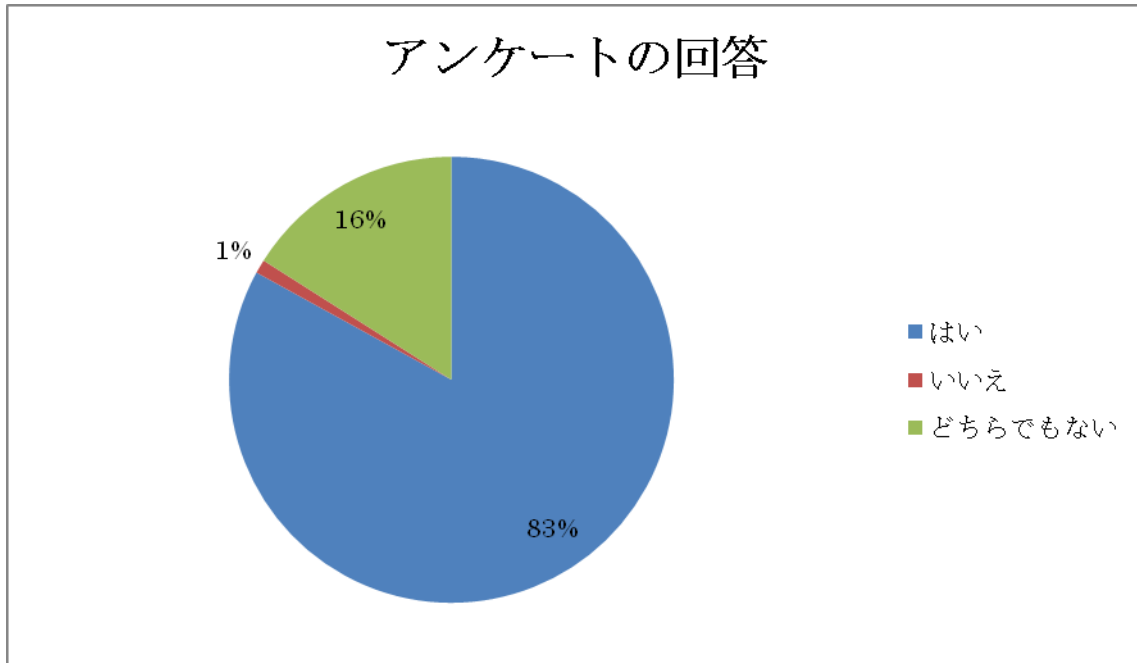
Q3.商店街や尾道市にあればいいなと思うお店はありますか？



Q3 考察

服屋と回答している人が多くいた。またレジャー関係（ラウンド1、カラオケ）のような遊ぶところがあればと思っている学生やマクドナルドなどのファーストフード店、スターバックスなどのカフェもとても人気があった。

Q4.学割が利くお店があればあなたは使用しますか？



Q4 考察

ほとんどの学生は学割の利くお店があったら利用したいと回答した。その学割の利くお店によるという回答も多かったが、興味のあるお店ならばぜひ行ってみたいと回答してくれていた学生もたくさんいた。いいえと回答した学生は、通いなので利用しないと思うと理由を言っていた。

Q5.活気のある商店街とはどんな感じだと思いますか？

アンケートの回答

- ◆ 年齢層に関係なく人通りが多い
- ◆ 賑やか
- ◆ 夜遅くまで開いている
- ◆ 開いているお店が多い

Q5 考察

上記に示した回答がもっとも多かった。その中でも、一番上に記述している「年齢層に関係なく人通りが多い」と回答した人が多かった。また、その他にもお店の人が元気という回答や商店街の人がみんな仲良しという回答もあった。

このようなアンケート結果を参考にして、わたしは尾道商店街を変えるにはどのようにしたら良いかを考えていきたい。アンケートの Q4 の質問「学割が利くお店があれば利用するか？」の質問に大半の学生が利用してみたいと回答した。したがって、尾道商店街に学割の利くお店を出店するとういと思う。また、Q2 では飲食店を利用したことがある学生が多いので、そこに着目して飲食店に学割の利く制度を設けたらいいと思った。そして、Q4 の回答を見ても飲食店があればいいなと思っている学生も多いのでやはり、学割を飲食店に導入するとういと思う。また、商店街のお店は、若者が入りづらいお店が多いと感じたので若者も気軽に入れるような外装のお店がいいと思う。しかし、尾道市のホームページに掲載されている“尾道市の財政運営見直し”という資料を見てみると、事務事業見直しによる人件費の減、高齢化に伴う社会保障費（扶助費）の増などで平成 25 年度までに約 6 5 億円もの財源が不足するという予測が示されていた。したがって、大規模な商店街の改装は難しいだろう。そのため、今あるお店に学割を導入してもらい、若者が入りやすいようなお店の雰囲気を作っていかなければならないと思う。例えば、お店の中を外からでも見えるような開けた感じにするとか、店員さんが笑顔で元気な感じの雰囲気がいいと思う。または、今空き店舗になっている場所に新しく学割を利用できるお店を作ればいいと思う。また、せっかく 4 年間尾道市にお世話になっている尾道大学生がみずから動いて、商店街の掃除をしたり、花を植えたりするようなボランティアに積極的に参加することにより、みんなで尾道商店街を活気づけていく必要があると思った。そして、商店街のシンボルとなる“ロゴマーク”なども作成して、より親しみやすい商店街にしたいと思う。若者が元気な町は元気な町だと思う。また、学割を導入することで商店街に行く回数も増え、賑やかになると思う。尾道大学の経済情報学部にいるので、例えば商店街の空き店舗を借りて、模擬店のようにお店の経営をしてみるのも商店街の状況も把握できるし、どのようにしたらお客が増えるかなど考えることができるのでやってみてもいいと思った。そして、商店街の人や地域の人とも交流することでより元気な商店街になると思う。高齢化も進んできているので、ここはわたしたち若者が頑張らないといけないと思った。活気がある商店街だと、幅広い年齢層の人が来るだろう。また、駅からも近いので少し寄ってみようとする人も増えると思う。もっと尾道商店街を利用してもらおうことで、商店街の良さを知ってもらいたいと思った。そして、より活気のある商店街にしたいと思う。

尾道市民にとっての郵政民営化

市場 隆介

今問題となっている郵政民営化について、Q&A方式と図を使って説明します。

尾道市は、ほかの市と比べて郵便局は多いです。

それに亀井さんの選挙区でもあるので尾道市民にとって、郵政民営化は身近で重要な問題です。

Q1 郵便局で取り扱っている商品は民営化後、増えましたか？

A 増えましたよ。これからもどんどん増やしていきます。

増えた商品

封筒

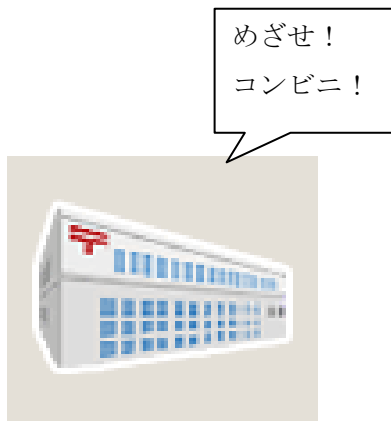
筆ペン

増えたサービス

お取り次ぎサービス

(引っ越し、携帯の買い替え

インターネットの加入など)



民営化後の郵便局は、現在の物流中心の業務を、物販や代理店業務などにも広げる予定です。

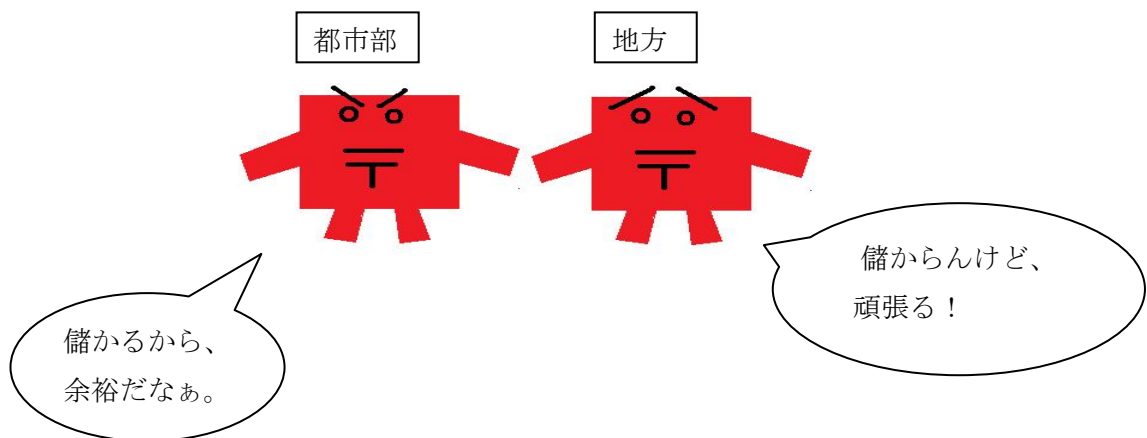
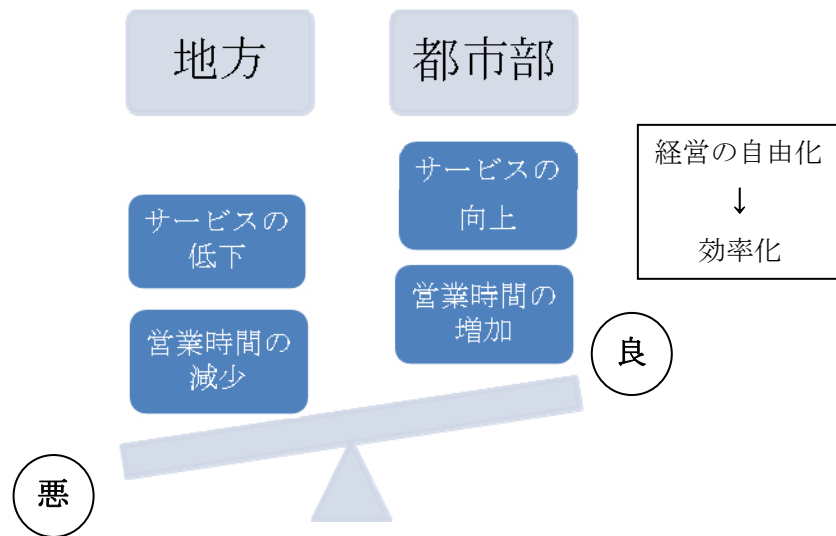
文房具や身の回り品を売ったり、旅行やコンサートのチケットの予約、販売などをしていく。

これからの郵便局の理想像は、各地の実情にあった「地域のコンビニエンスストア」です。

尾道の郵便局でも、これからどんどん商品を増やしていくそうです。

Q 2 民営化後、都市部と地方の郵便局での営業時間やサービスの面で変化はありましたか？
また、店舗数はどうなりましたか？

A 営業時間、サービス面、店舗数、変化なし。



民営化されると、経営も自由化され効率化される。儲かるところで儲けて、儲からないところからは撤退するということがおこる。つまり、地域ごとに格差が生まれてしまう。しかし、尾道では民営化後も変わらぬサービスを提供している。これからも変わる予定はないそうです。

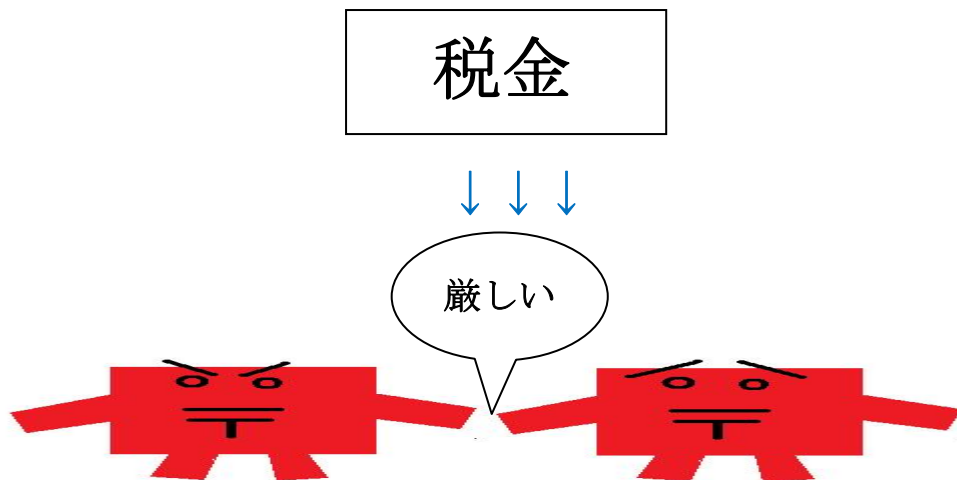
Q 3 郵便事業に関して、料金やスピードは民営化後変わりましたか？

A 料金は、はがき50円、封書80円と変わっていません。
しかし、特約ゆうメールなど去年の10月から料金を各支店で設定できる制度が導入されて少し値引きができるようになりました。

スピードについて、基本的には変わっていませんが、集配が尾道支店の1つに統合されて、影響を受ける地域が一部あります。

遅くなる地域
因島など

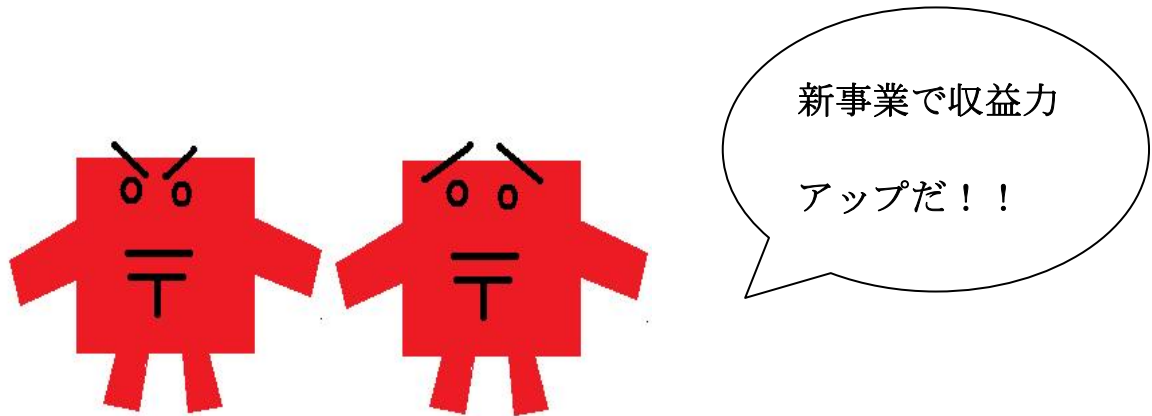
早くなる地域
三成など



民営化後は税金が課されるようになり、その分は料金が値上げされるというデメリットがありますが、尾道では値上げはないみたいです。
これからも値上げの予定はないそうです。

Q 4 民営化後の新事業はありますか？

A ゆうパックなど荷物を受け取り、送る、運輸業も力を入れています。



民営化後は、倒産しないために、収益を上げなくてはなりません。そこで、新事業にも参入し、収益を上げるという戦略に出ます。尾道でも同様にゆうパックなどの運輸業も行っています。これは市民にとっては便利になったと言えると思います。

結論

尾道市民にとって郵政民営化はプラスです。現在郵政民営化から2年しか経過してないということもあり、尾道市民に直接影響を与えるような大きな変化は、ほとんど見られませんでした。しかし、1つだけ大きく変化したところがありました。それは、従業員の考え方です。民営化したことにより、郵便局をもっと良くしよう、良くしなければいけないと考えが生まれ、従業員のお客様への対応やサービスは確実に向上していています。

最後に、郵便局の皆様のメッセージ
「メールも簡単だけど、手紙の方が心がこもっていて、もらった人もうれしいので、もっと利用してください。」

私は今回このレポート作成にあたり、どうすれば尾道大学生が尾道市内でお金を使うかということに焦点を当てて考えてみた。また、今回は尾道大学生が一番利用する尾道駅周辺から尾道大学までの範囲に場所を絞って考えていきたい。

福山市から通っている私が尾道市内でお金を使っていると実感するのはバスの通学定期券を購入した時、授業料を納めた時、新歓やゼミでの飲みをしている時だけなのである。もちろん尾道市に部屋を借りている人の意見は食料品やその他の消耗品を購入しているので私とは意見が異なっているだろう。しかし、せっかく多くの若者が市外から集まっているのにそれを簡単に逃してしまうのはもったいない。そこで私は以下の三点を変えていこうと考えた。

まず一点目に、駅周辺にリーズナブルな飲み放題のある店を誘致したい。これは、新歓やゼミの飲み会、友達と遊ぶ時などに利用しやすくするためである。尾道大学の新歓や飲み会なのに、松永や福山などに出て開催されるのは珍しいことではない。友人にアンケートを取った結果、尾道大学生が利用するお店の数は尾道市外の方が多いことが分かった。実際に私が所属する卓球部の新歓も今年は松永のお店で行われ、友達の誕生日会も福山で行われたのである。

アンケート

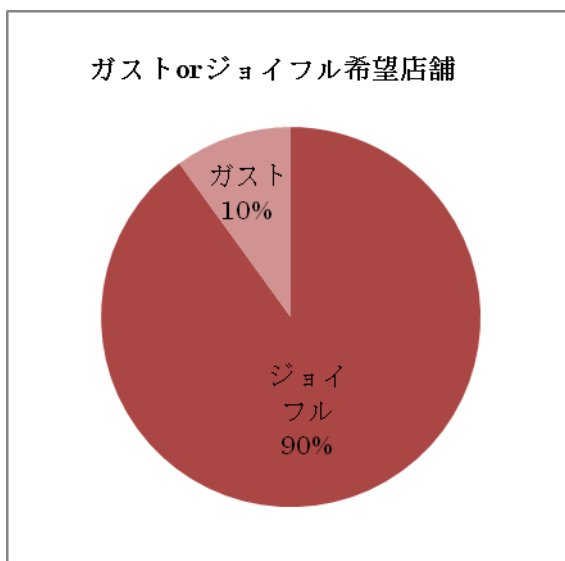
Q.あなたが飲み会で利用するお店はどこですか？

A.いっとく（尾道）、千年の宴（尾道）、ワタミ（尾道）、
福福（福山）、笑笑（福山）、ぐりぐり（松永）、
庄や（福山）、土間土間（福山） etc...

この問題に対応するためにお店の誘致を考えたのである。駅周辺に建てる目的としては福山方面や広島方面から通っている人の数が多いため、電車が出発するギリギリまで飲めるようにするためである。また、普段は原付で学校に通っておる人もお酒を飲んでしまっただけでは原付に乗ることはできない。そんな時に駅が近ければバスやタクシーを利用しやすく帰りの心配をする必要がなくなるのである。ゼミの飲み会などで誘致した店を使うようになり、店の売上げが上がれば結果的に尾道市にお金を落とすことになる。また、誘致したお店の近くにカラオケもつくりたい。これは、飲み終わった学生が二次会として使うことを考えてのことである。もちろん二次会として利用するだけでなく、普通に学生が学校帰りなどに歌いに来るのも狙いである。「尾道大学割引」や、「誘致したお店のレシートを見せれば安くなる」、というサービスをすればより多くの学生を呼び込むことができるのではないだろうか。

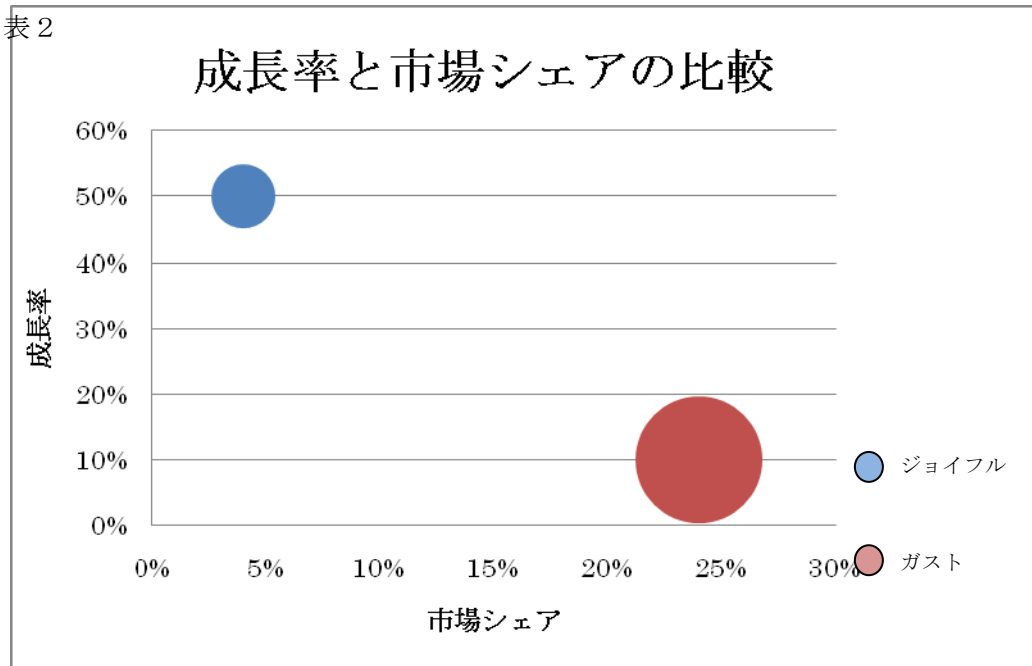
二点目に、川上のバス停近くにあるガストと新尾道駅の近くにあるジョイフルの場所を交換したい。この理由としては、学生にはガストよりもジョイフルの方が人気があるという単純な理由のほかに、成長率の高い企業により多くの客を集中させることによって利益をのぼし、尾道市に多くの法人税を納めさせるという理由である。私の友人間の簡単なアンケートでも九割の友人がジョイフルの方が好きだと答えている。

表 1



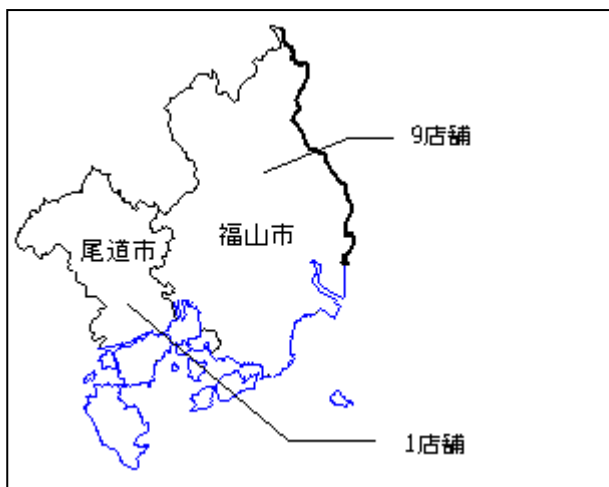
その理由としては、安い、入りやすい、パフェがおいしいといった意見があった。もちろんガストが特別高いというわけでない。それなのに学生がジョイフルを支持する理由は、上記の意見にもあったような入りやすい雰囲気である。以前の授業でドトールとスターバックスの雰囲気の違いが比較されていたように、ジョイフルとガストでは雰囲気が違うのである。ジョイフルのイメージとしては、若者が長時間滞在しているイメージが強く、賑やかな雰囲気を想像させる。そのため、あまりしっかりと食事をしたわけではないが、友達と座っておしゃべりをしたいときはジョイフルのほうが入りやすいのである。二十歳を迎えた大学生とはいえ、社会人を経験していない私たちにとっては落ち着いた雰囲気よりも周りを気にせず楽しくおしゃべりができる空間というものは必要なのである。こういった点から、尾道大学生も多く住んでいる川上のバス停近くにジョイフルを置くことで利用客が増加し、売上も上昇すると考えられるため、ジョイフルとガストの場所を交換したいのである。

表 2



三点目に、駅前にマクドナルドを設置したい。これも私の友人間の簡単なアンケートの結果だが全員がマクドナルドの設置を望んでいる。マクドナルドがあることが「都会である」ということには直接的にはならないが、マクドナルドがないということは「田舎である」というイメージに直接的に結びついてしまう。尾道の大学に通っている学生の考えでは、尾道市を都会にしたいというわけではなく、尾道市が田舎であるというイメージをなくしたいのである。

図.マクドナルド店舗数比較



実際に多くの学生が望んでいるため、設置したマクドナルドには多くの学生が訪れるであろう

う。しかし問題なのは、駅前には大学生だけでなく、高校生もたくさんいるということである。福山駅の駅前にあったマクドナルドも3月31日で閉店してしまった。これは、高校生などの若者の長時間滞在が原因であると考えられる。そうすると尾道駅に設置しても福山の二の舞になってしまう可能性がある。そうならないために、マクドナルドから椅子をなくしてしまいたい。そうすることで、座れない分滞在時間が短く回転が速くなり、短時間で多くの利益をあげることができるのではないだろうか。

以上が私の考える尾道市の変えるべき点である。このレポートは大学生の視点からのみの意見であったため、実際行うには無理な点も多くあったと考えられる。しかし、せっかく市外や県外から多くの学生が通い、暮らしているのだから勉強面以外も充実した大学生活を行えるように尾道市にも動いていただけるとありがたい。

よりよい尾道とは

岩下 真吾

1. 尾道という町について

尾道という町は瀬戸内海に面し、山肌に民家が立ち並ぶ静かな町である。産業は農業や漁業が多く、現在でも農業や漁業従事者は多い。昔は海運や物流の中継地点としてとても栄えていた。また明治になると鉄道が開通しますます栄え、広島市の東部最大都市となるが近年は工業化で発達した福山市にその座を奪われてしまっている。だが、しまなみ海道が開通すると四国と本州の物流の中継地点として再び栄えている。そのため現在でも、造船業や倉庫業といった物流の基本となる産業がみられる。よって主な今日の産業は、造船業、漁業、農業、観光業、製造業が中心である。また、千光寺や浄土寺を代表とするお寺が各所にあり観光客を楽しませており、林芙美子ら有名な作家などが育った町であることから、文学の街と呼ばれることもある。さらには尾道を舞台とする「尾道三部作」、近年では「新・尾道三部作」が発表されることから映画の街とも呼ばれていたりする。また各所に旧来の和を感じさせるような石畳の道や昔ながらの商店街といったようなすばらしい景色が存在する。このような、人と自然が調和した素晴らしい街にも問題点が存在する。今回はその問題点を挙げ、自分なりの解決策を述べてみたいと思う。

2. 尾道の問題点

まず資料①を見るとわかるように、人口が15万人前後に対して老年人口が4万人強というように、尾道は高齢者の割合がとても多い。約27%の人口は高齢者という現状である。これは尾道だけでなく日本をはじめとする先進国で見られる傾向である。これが現在、尾道の抱えるもっとも大きな問題点ではなかろうか？どんなにすばらしい産業や街並みがあってもそれを支えるのは人である。人がなくしてその町のさらなる発展はありえないだろう。そして尾道市は過疎化も進んでおり、資料②から分かる通り、人口も年々減少している。人口が減少し、高齢化が進むとそれに伴い、少子化が進んでしまう。少子化が進むと街の生産能力が衰え、福祉や医療に多くの税金を費やさざるをえないということになるが、その財源を徴収でいなくなり地方自治体も危ないという状況になりかねない。そのためには高齢化と過疎化まずは食い止めなければいけないことはわかる。

3. 広島市との比較

広島市は中国地方最大の都市であり、人口は百万人を超える大都市である。そして広島県の中心でもある。そこで、尾道と比較してみたいと思う。資料③の広島市の老年人口比率を見てもらいたい。尾道市が27%もあるのに対して、19%と高齢者人口割合は高いが、尾道ほど高いわけではない。それに伴って、年少人口や街の発展に最も必要な人口である生産年齢人口も尾道市が年少人口12%、生産年齢人口60%弱であるが広島市はそれぞれ14%と66%弱と差が出ている。また人口の増加数も広島市は増加傾向にある

4. 問題点の考察およびまとめ

以上のようなことから、尾道市の現状として少子高齢化や人口減少といった大きな課題がある。それを食い止めるには人口増加に持ち込まなければ、いずれも解決はできない。そのためには魅力ある尾道づくりが必要になってくると考える。具体的には、福祉や医療施設の増設や尾道ならではのイベントを増やす。現在ではみなとまつりや、花火大会など夏に主なイベントが集中しているように思える。そのため冬季にも大きなイベントを増やしてみるのもよいだろう。そのほかの対策として新規産業への取り組み、もしくは従来産業の雇用増加対策として、それらに関わる補助をするなどといった方法も考えられる。

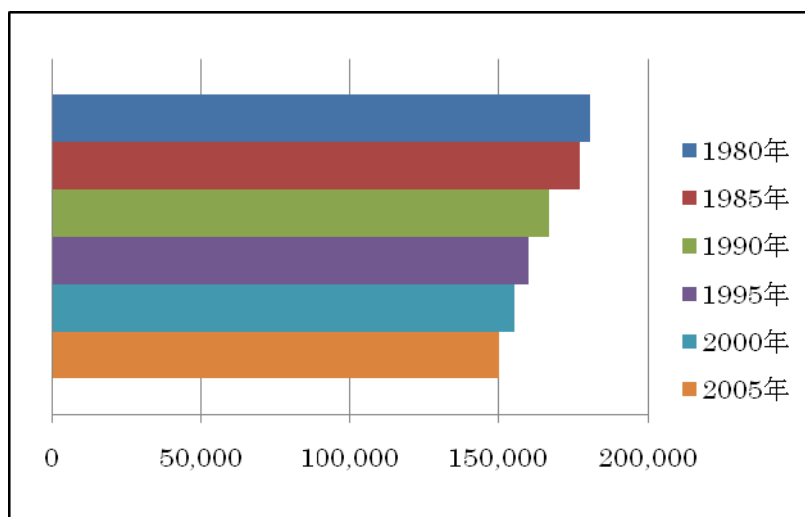
人口が増加している広島市であるが、このまま増加し続けるかということではなく、おそらく将来的には減少していくということは、他の県の大都市を見ていれば容易に想像がたつだろう。広島市も過疎化対策として人口を増やす政策を地方自治体を中心としておこなっている。尾道市ももちろん福祉関係の充実や過疎化の対策を年々おこなっているが、それが結果に出るのは少し時間がかかる。それまでに尾道独自の対策をして、いつまでもこの情緒ある街を存続させてほしいと思っている。

5. 資料・参考文献紹介

資料①尾道市の人口比率（平成 17 年国勢調査時）

年少人口（0～14 歳）	18,601（12.38%）
生産年齢人口（15～64 歳）	89,877（59.83%）
老年人口（65 歳以上）	41,294（27.49%）
人口合計	150,225

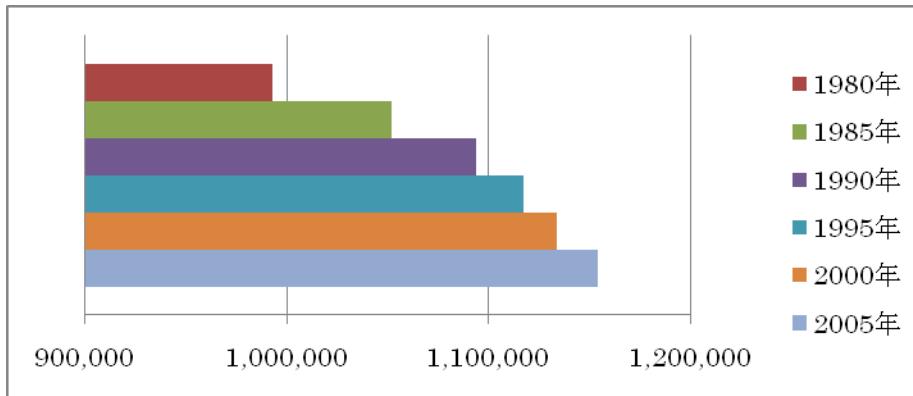
資料②尾道市の各年の人口



資料③広島市の人口比率（平成 22 年時）

年少人口（0～14 歳）	169,914（14.68%）
生産年齢人口（15～64 歳）	762,926（65.91%）
老年人口（65 歳以上）	224,714（19.41%）
人口合計	1,157,554

資料④広島市の各年の人口



参考文献

資料①尾道市の人口比率…尾道市公式ホームページ

(<http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/toukei/toukei.html>)

資料②尾道市の各年の人口…尾道市 Wikipedia

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%BE%E9%81%93%E5%B8%82>)

資料③広島市の人口比率…広島市公式ホームページ

(http://www.city.hiroshima.lg.jp/kikaku/joho/toukei/04_tnen/tnen-ind.html)

資料④広島市の各年の人口…広島市 Wikipedia

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BA%83%E5%B3%B6%E5%B8%82>)

尾道市と街並み

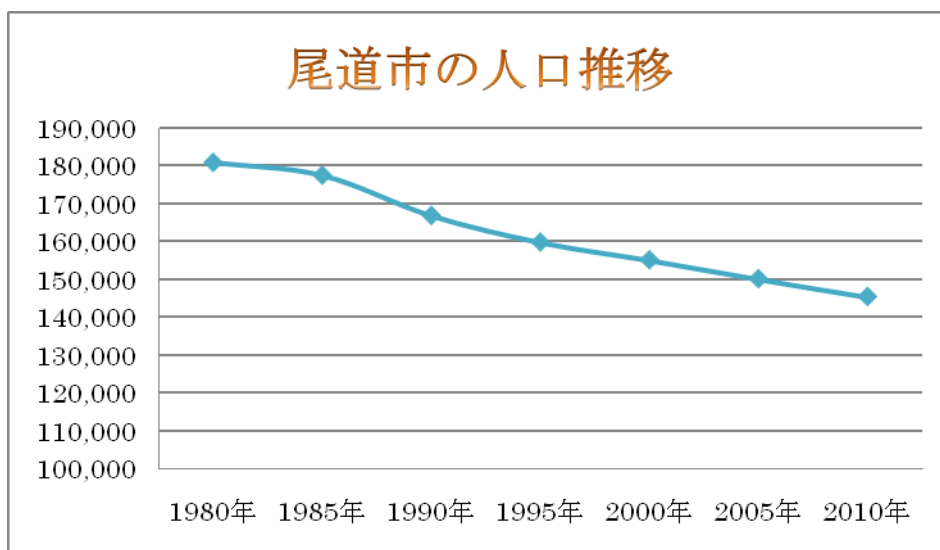
岩見 真実

1. はじめに

尾道市を活性化するためには何が必要か。私は、地域のインパクト（地域ブランド）が必要だと考える。高校での部活動や尾道で2年間過ごしてきた経験を活かして考えていきたい。

2. 尾道の現状

当時の尾道は港町・商都として栄え、戦前までは広島市に匹敵する程の経済力を持っていた。また水運に恵まれている立地から造船所が存在し、商都のみならず工業都市の一面も持っており、造船景気で栄えていた。しかし、近年は造船業の斜陽化により衰退の一途を辿り、人口の減少とともに尾道市の財政は悪化していった。



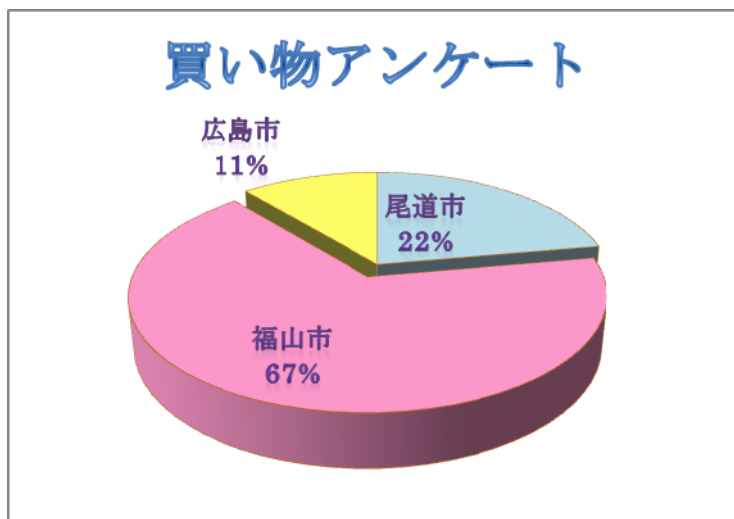
尾道の現状を見て市民はどのように感じているのだろうか。実際に、私が入試で初めて尾道を訪れた時には、「何もない、商店街がさびれている、どこで買い物するのだろうか」と期待を裏切られたことを覚えている。

また、私は高校の部活動において、地元の地域を活性化するために商店街の空き店舗を活かして特産品店を開いたり、他県で地域のPR活動を行っていた。その経験から、尾道を見たときに地元を思い出し、尾道も財政難で苦しんでいるのだと感じた。

3.

福山市との比較

◆ 具体的に尾道は何が悪いのか。福山市との比較によって考えてみる。
尾道市民の行動データとして、買い物の10%強が外部の都市へ流出しているという結果が出ている。また実際に、友人30人に「あなたは買い物をしに主にどの地域に行きますか?」というアンケートを取った。



グラフの通り、福山と尾道で明らかな差が出ていて、この大きな差は住民が求める店・企業が無いことから来ている。つまり、尾道に企業が少ないことから住民(特に若者)の金銭が他市に流れている。

尾道に入るはずの収入が流出=財政危機

◆ しかし、福山にはないものが尾道にはある。それは観光(文学・歴史)である。

現在も尾道市は、広島県内での地域ブランドのランキング2位である。しかし実際のところは、市街地の劣化は激しく、他県へのアピール力が足りないと感じる。

これらのことから尾道市の財政再建には、商業・観光の強化が必要だと考える。

4.

倉敷・外国の街並み

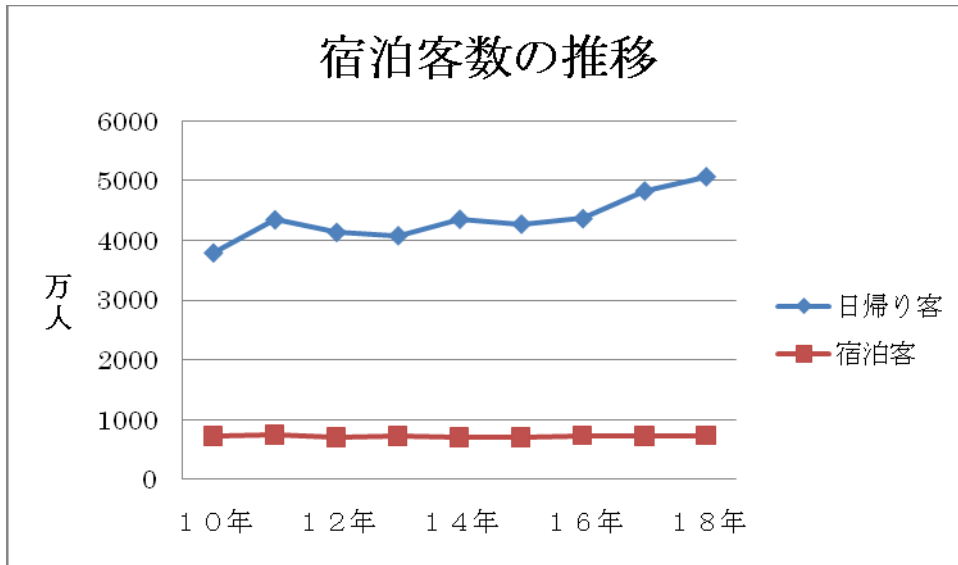
では、今ある観光名所の隣に新しい建物を建て若者を誘致したらよいのか。そうではない。尾道は、景観法により建築の制限が決まっている。それを活かして、徹底的な景観づくりと、それに合った企業誘致をすべきではないだろうか。

そこで私が考える提案は「倉敷市・外国（英国）の街並みを見習おう！！」である。

高校の部活動において、地域の活性化を目指す上で他の地域について学び、地元をPRするために多くの地域を訪れた。そこで一番印象に残っている市が倉敷市である。

- ・街全体が観光名所である。
- ・街並みに雰囲気がある。歩いているだけで楽しめる。
- ・その時代・文化を感じることができる。
- ・印象に残りやすい。

倉敷にはこのような特徴がある。これは景観が守られている英国の街並みでも同様のことが言える。それに比べて尾道は、確かに文学や寺など観光できるものはあるものの、その名所を巡るだけになりどこか統一感が無いように感じる。これでは観光客にとって魅力が無くなり、1度だけの日帰り旅行になってしまうのではないだろうか。



そこで、尾道市に徹底した景観づくりの観光地区を作るべきだと考える。駅前から商店街・寺一体を観光通りにし、尾道の文化・特産品を販売する企業や、尾道の新しい文化をPRする事業（ドラマのロケ現場等）・観光客が滞在できる宿、その観光客が必需品を買える店を誘致する必要がある。宿を作り宿泊客を誘致することで、より多くの収入が期待できる。

また、倉敷や英国は景観を守るために電線を地下に埋めている。これにより外観はすっきりし、より一層街並みの雰囲気に入り込める。このような徹底した雰囲気づくりをすることで、観光客の印象に残り、リピーターが増加するのではないかと考える。

5.

まとめ

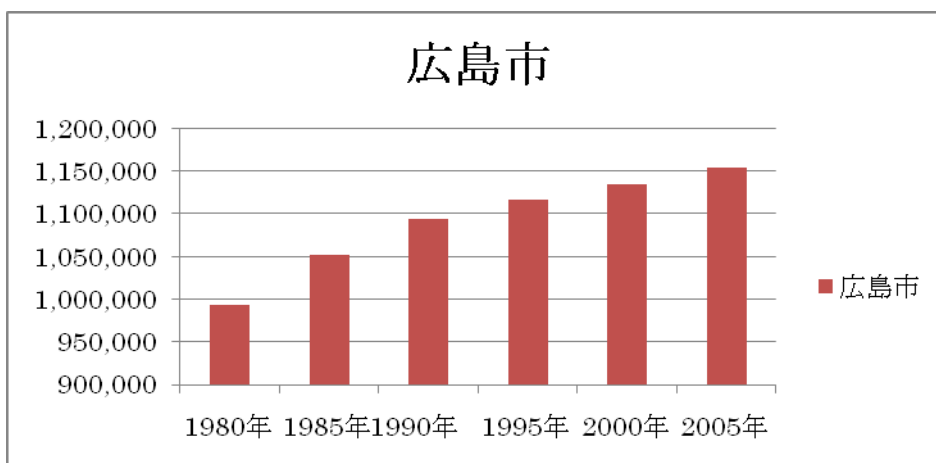
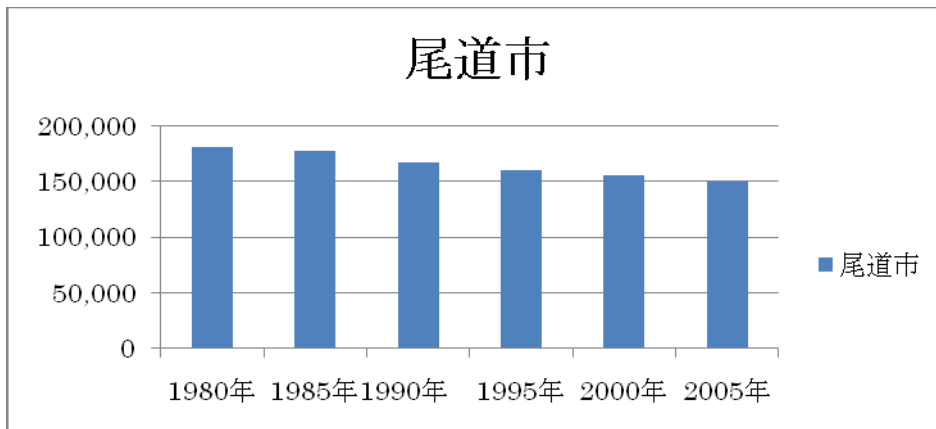
これらのことから、私は尾道市には徹底的な景観づくりが重要だと考える。尾道の文化・歴史を感じさせる街並みを作ることで、より高い地域ブランドを確立することができる。これは、観光客・宿泊客の誘致に繋げることができると思う。

このように観光客からの収入で尾道市の財政を立て直し、その資源をもとにこれからの市民が求める尾道市を作っていくべきだと考える。

◆ 尾道市と広島市

尾道市は旧来から北来船が寄港するなど、港町、商都として栄えていた。銀行の本店や企業の支店なども存在していた。また、水運に恵まれている立地なので、古くから尾道、向島、因島に造船所が存在し、商都だけではなく工業都市の一面もあった。特に、因島は造船景気で栄えていた。以上のことから戦前までは広島市に匹敵するほどの経済力を持っていたと言われていた。しかし、近年は見ての通り、造船業の斜陽化などにより衰退の一途をたどっている。どうして尾道市と広島市にこのような差が生じてしまったのか、初めに、この二つの都市の違いなどについて論じていく。

まずはこの下のグラフを見てみる。尾道市と広島市の1980年から2005年にかけての人口推移のグラフである。



もとの人口自体が違うものの、広島市は人口が年々増加していったが尾道市は5万人近く人口が減少している。原因として造船業の衰退もあるが、斜面地が多いという立地条件の悪さというものもあるだろうと思う。また、就職先となる会社がなく、若年層の者たちが市を出

て行ってしまうといった問題もある。どうすれば尾道市は昔のように栄えることができるのか。

◆ 尾道市を活性化させるには？

現在の尾道市は高齢者の方の観光客が多い。だがそれはこれからの時代では尾道市にとっては良い傾向ではないであろうか、これからの時代高齢者が増えていくだろうと考えられるのでそういった人にやさしい案内掲示板や、観光ツアーなどを活発にしていき観光客を増やしていけばいいと思う。次に、尾道市のセールスポイントは何であるかを考えてみる。千光寺公園などの数々のお寺や、昔ながらの街並み、尾道ラーメン、これらを今まで以上に伸ばし、例えば、街並みをさらに楽しむために尾道水道を通る観光船や、尾道ラーメンが集まるラーメン街を商店街の中に作るなどといった戦略があると思う。それだけではなく、尾道水道沿いにある商店街を広島市のように広く、若者向けの店を増やせばそこに若い観光客や大学生が足を運び、経済効果もより大きなものになると思う。しかし、そこまでする財源が尾道市にはないのが現状である。そのために観光客だけではなく人口の減った尾道市に若年層の人口を増加させるために就職先となる会社を設けることも重要だと思う。そうすることにより税金が集まり、色々なことにお金をつぎ込むことができるようになる。では、会社を増やすためにはどうすればよいのか。市が補助などで新しい会社を設立しやすくし、尾道に会社がある事が誇りに思えるような街づくりが必要となると思う。街づくりの一つの方法として地域ブランドの確立という手がある。

◆ 地域ブランド

地域ブランドとは地域を主に経済的な側面から捉えたときの、生活者が認識するさまざまな地域イメージの総体である。

例えば、僕の地元では右の資料のようなマンホールがある。このマンホールは鳥取県の泊村という村のマンホールで、グラウンドゴルフの発祥の地であり、港町なのでゴルフクラブとボール、波がデザインされている。村の人ならだれでも知っているものでグラウンドゴルフの大会が開かれる際にこのマンホールを見た参加者の反応も良いようです。



尾道市にはこれと違って認知されている地域ブランドがない。市の木と花はさくらなので、尾道といえばさくらと連想させるように千光寺で春に大きなイベントを開催し、市のシンボルマークやマンホール、パンフレットなどにさくらを起用するなどして、さくらのイメージをブランド化するのもいいのではないのだろうか。もちろん尾道ラーメンを完全にブランド化するなど他にも手はある。また、ブランド化に取り組む過程で地域の人との交流も深まり、活気があふれると思う。現在、地域ブランド化のためにナンバープレートの尾道ナンバーを作るような

取り組みもされている。

だが、市自体のブランド力は引けを取っていない。尾道市という都市名を聞いたことがないという人は少ないのではないのだろうか。広島市には原爆ドームや平和記念公園があり、外国人や修学旅行といった人たちはたくさん来るから経済は活発になるが、国内の人からすればそこまで魅力的な場所というわけではないと思う。むしろ市自体でのブランド力は優れていると思う。このイメージをもっと良く生かせれば地域振興につながるのではと思う。次項で地域振興に成功した地域の例を挙げてみる。

◆ 地域振興の成功例

長野県の小布施町の場合、昔は 12000 人足らずの普通の町であった、小布施町が、今では 100 万人の観光客を集める注目の街に変貌した。なぜこのような成果を上げることが出来たのでしょうか。まずいえることは、街ぐるみの取り組みである花いっぱい運動に始まる地域の協力が上げられる。また、与えられた資源を生かす、手法などが実った点にある。ただ恵まれた資源、葛飾北斎という世界的画家の存在は否定できない。しかし、それまでも葛飾北斎という人物の、ゆかりの地であったにもかかわらず、観光客には縁のない土地柄であった。それを生かしきった、地元の手法は見習うべき点が数多く見受けられる。

兵庫県の出石町の場合、この町は約 11000 人余の町です。この小さな町が、観光客 100 万人を集める有数の観光地になった。出石町は、鉄道のない閑静な城下町で、都市の発展には、不利な条件である交通の便が結果的に幸いし、都市化を妨げ、江戸情緒を味わえる貴重な観光資源として町並みが残ったことが、上げられます。これといった、特産品や、名物が全国に知られるまでにはいたっていません。ただ、沢庵和尚の、ゆかりの土地としてあげられる事が多い。いわば、不利な条件を逆手にとって、観光資源を生かした好例です。

ただ、町おこしは失敗例も多く、数年で沈静化してしまう事も少なくはなく、その活気をいかにして持続するかも大切になっている。

◆ 結論

結論的には、尾道市は若年層の人口を増やす事、つまり、企業や会社を設立して若者の働く場所を増やす事と、地域ブランドを確立していくことが必要であると思う。街並みを残すところは残して、影響を与えない程度で会社を設立していくべきだと思う。住民の反対は少なからずあるだろうが、町の発展には仕方のないことだと思う。僕ならばこの二つに重点を当てて尾道を変えていく。

私は、「医療観光」というものが今注目されているということを知って、それなら尾道市でもできるのではないかと考え、調べることにしました。

医療観光(メディカルツーリズム)は、10年ほど前から医療費の高い欧米の人が割安なアジアに出掛けて治療を受ける傾向から始まり、シンガポールを先駆けにタイ、マレーシア、インド、台湾などが力を入れています。これらの国は観光資源も豊富で、治療と一緒に観光を楽しむ人もいます。

日本でも成長市場として注目され、経済産業省や観光庁がタイに視察に行くなど調査を始めています。

また観光庁は2010年度から、中国人富裕層らをターゲットに、日本の高度な医療技術による健康診断や治療、日本の温泉や日本食などと観光で検診や治療と観光を組み合わせた「医療観光」をPRする取り組みを本格的に始めるようです。

10年度は主に中国を対象に、日本の医療観光に対する認知度や期待度を調査、マスコミや旅行会社を招き日本の医療現場などを視察してもらう方針で、既に外国人を受け入れている医療機関の情報を関係者が共有できるようにするほか、海外で外国人の治療のため導入されている「医療用ビザ」制度も調査する意向です。

自治体などでも取り組みが始まっており、徳島県では3月下旬、中国人向けに糖尿病検査の試験ツアーを実施しました。徳島県では、地元食材を使った低カロリー食や、鳴門のうず潮観光などを組み入れました。

県観光企画課によると、参加者はスムーズな検査を高く評価したが、検査の種類を増やしてほしいとの要望や、観光地に中国語の案内が少ないとの指摘があったということです。同課は「興味を持ってくれた旅行会社もあり、今後もパック商品を提案したい」としています。

高い経済成長が続く中国では、旅行を楽しむ富裕層も増え、そこに焦点を当てれば医療観光のニーズも見出せます。

医療観光を尾道市で行う場合に必要となるものは

- ・ 尾道市でしか受けられない検査や治療法
- ・ 観光地の中国語表記
- ・ 医療用語が理解できる通訳
- ・ 地域住民の理解と協力
- ・ 観光客が楽しみになるようなイベント
- ・ 観光地としての認知度

だと私は考えます。現在ある尾道市のイベントとして観光客にアピールできるものは、春の千光寺公園の桜や、夏の住吉花火大会の水上花火などがありますが、これらは楽しんでもらえるものだと思いますが、認知度は低いので、集客効果は薄いと考えられます。そこで、医療観光都市としてアピールしていき、日本で医療観光＝尾道くらい概念をこれから作っていき、有名にしていけばいいと思います。

また、尾道にはお寺が多いことから、宗教的なツアーを提案することや、縁結びや合格祈願などの逸話などを作りアピールし、「尾道に来たくなる」仕組みを作っていくことも必要だと思います。

また、日本食のニーズにこたえ、瀬戸内海ならではの料理を楽しんでもらったり、尾道発の新しい料理を作り、限定食抜いで提供したりして観光客の気分を良くするサービスでリピーターを増やしていくことも必要です。

高いビルがなく、都会ではない尾道だからこそ、アピールする部分をこれから作ることができ、自然や新しいものを利用することに力を入れ、それに地域全体で取り組むことで、大きな強みが生まれると思います。

はじめに

これから、今後の尾道市について考えていきたいと思う。私が初めて尾道市に来たときの印象は、尾道市って何も無いなということであった。尾道市は、多くの寺や坂があり、文学や映画の舞台となったり、昔ながらの雰囲気を残した、歴史のある町である。しかし、言い換えれば、交通が不便で、若者向けの施設がほとんど無く、お年寄りばかり住んでいる町という印象しかない。

こんな町に若者が住みたいと思うであろうか？答えは明らかに No である。若者離れが人口減少を招き、少子高齢化が進み、お年寄りしかいないといった固定観念を生み、更に若者が離れ、また少子高齢化が進んでいく。企業としても、若い労働力も少なければ、お金を落としてくれる人口も少なく、交通も不便で、市に魅力が無いために進出もしない。その結果、労働場所がないために更に若者は離れ、人口は減少、高齢化はどんどん進んでいく。この負のスパイラルがある限り、尾道市は現状より悪くなるばかりである。

確かに、医療技術の進歩、食生活の変化によって、平均寿命が延びたことで、昔に比べ高齢者が増えているのは事実である。それに、不況によって子供が産めず、子供の数が減っているのも仕方のないことなのかもしれない。しかし、だからといって何も対策をしないのはよくないことだ。そんなことを原因にしていたら日本は終わりだ。

では、尾道市を変えていくにはどうしたらよいのであろうか？

尾道市を変えていく方法として考えられるのは、法人税などで優遇して企業を誘致したり、住民税を安くしたり、行政サービスの充実、奇抜なサービスを考えたりして、尾道市の人口を増やし、市の収入を増やしていったり。景気回復を待ち、人々の消費が拡大するのを期待する。全国的に有名な尾道ラーメンに力を入れ、観光客の増加を促す。何か特産品を作る。少子高齢化に歯止めをかけられるような政策を考えるなど様々な方法が考えられる。

尾道市と福山市の今

今回私は医療・福祉の視点から、そして、隣接する福山市と比較して考えていきたいと思う。その理由としては、尾道市は 65 歳以上の人口 44,529 人、高齢化率 30.60%と高齢者が多く、医療や福祉が必要なのではないかと考えたからだ。そして、尾道市は隣接する福山市のように若者向けの町ではないが、あえて若者が多くなる町に変えていく必要はないと思い、お年寄りの方々を大切にしていく方がよいと考えたからだ。

確かに福山市は一般会計の歳入が 156,546 百万円で、尾道市の 59,303 百万円と比べて約 3 倍もの税収がある。その分多くのサービスが供給出来る。人口も 465216 人と多く、遊戯施設やデパート、スーパーマーケット、企業の数も格段と多い。交通も便利で、若者向けの街となっている。福山市のほうが現在も将来的にも住みやすく、魅力的な街であることは明らかだ。

では、尾道市も福山市のようになればよいのだろうか？

私は、尾道市は福山市のように変わる必要はないと考える尾道市には尾道市の良さがあり、昔からの伝統、地域柄、文化、風景などを変えてしまえば、それはもはや尾道市ではない。福山市のようになるのだけがすべてではない。尾道市は尾道市らしく、尾道市の特化している部分を更に伸ばしていけばいいのではないか。

	尾道市	福山市
人口	145,518	465,216
65 歳以上の人口	44,529	104,974
面積	284.85	518.07
人口密度	510.8583465	897.9790376
高齢化率	0.306003381	0.225645722

私が目指す尾道市

私が目指す尾道市としては、地域医療の充実を図り、子供からお年寄りまで住みやすい町づくりである。幸いなことに、尾道市には地域医療支援病院が 2 つもある。尾道市立市民病院と厚生連尾道総合病院である。対して福山市にも独立行政法人国立病院機構福山医療センターと福山市民病院の 2 つの病院が存在する。尾道市は 188 人に 1 つのベッドがあるが、福山市は 578 人に 1 つしかない。地域医療支援病院だけの比較であるのでこれがすべてという訳ではないが、尾道市の方が、地域医療が充実していることが分かる。医療の充実は市民に安心を与えることが出来、更なる医療の充実で全国的に有名になれば、尾道市にやってきてくれる人も増えるのではないか。

	尾道市	福山市
地域医療支援病院の病床数	772	804
人口	145,518	465,216
人口/病床数	188.4948187	578.6268657
65 歳以上の人口	44,529	104,974
65 歳以上の人口/病床数	57.68005181	130.5646766

また、看護学校の数を比較してみると、尾道市には広島県厚生連尾道看護専門学校と尾道市医師会看護専門学校があり、福山市には尾道准看護学院と福山市医師会看護専門学校がある。この看護学校は今後の尾道市にとって重要な役割を果たすのではないかと考える。今の日本は医師不足や看護師不足で医療現場における人員不足は深刻な問題となっている。また、ただでさえ若者の少ない尾道市にとって看護学生は大切な存在となる。様々な地域から

尾道にきた若者が尾道で就職し、結婚し、子供を産めば少子化に歯止めがかかり、地域活性化に繋がるのではないか。

尾道市としては、こうした学生の就職を支援するとともに、子育てがしやすい環境を整える必要がある。例えば、育児休暇を取りやすい環境を整えたり、働きながらも子育てが出来るように託児所を会社の中につくり、勤務中でも1時間は子供のために時間を使えるようにするなどである。そうすれば、尾道に来た若者も残ってくれるのではないか。

そして、最後に変えていきたいと思うのがお年寄りについてである。変な言い方、お年寄りは多額のお金を持っている。お年寄りの多い尾道市にとって、お年寄りのために使わなければならない税金は多い。少しでもお年寄りにお金を使ってもらわないと正直苦しい。そのために健康ランドなどの憩いの場をつくったり、お年寄りにとって一番大切な孫のためにおもちゃを買ってあげられ、一緒に過ごせるようなお店作りであったり、交通手段の充実を謀ること、老人ホームを作ることが必要であると考え。尾道市は人口のわりに意外と老人ホームは少ない。身内がないお年寄りは寂しい思いから施設に入る人もいるし、身内がいても迷惑をかけたくないという気持ちから施設に入る人もいる。そうしたお年寄りに優しい町づくりが、この町に住みたいと思う人をひとりでも増やせればよいと思う。

まとめ

私が考えた上に述べたような政策は、成果がすぐには表れないが、何年後に必ずして良かったと思える日が来ると思うので、財政支出が増えるし、負担になるからといってやらないのではなく、将来のために諦めずにやって欲しい。安易な考えでそんなことしたって効果ないと思う人もいるであろうが、私はこれこそ尾道市に必要なだと考える。地域にあった町づくりこそ、どんな政策よりも必要なことである。世間の評判を上げていけば必ずいい町になっていく。そしていつの日か、「尾道市？あぁ、知ってるよ。医療・福祉が充実していて住みやすい町でしょ。」と日本中に思われるようになって欲しい。

また、先日たまたまニュースで見つけ加えようと思ったのが、知的障害や精神障害、あるいは発達障害をもった人を臨時職員として雇い、文書の仕分けなどの業務をしてもらう組織「ワーク・サポート・ステーションひろしま」を広島県庁内設置するというニュースである。全国的に見ても障害者の雇用は進んでおらず、法定雇用率1.8%が制定されてはいるが、達成されていないのが現状である。広島県は、民間企業への障害者雇用促進のために行っていて、正社員として採用する計画は無い。正職員として採用しているのは、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県の4県である。そこで尾道もこうしたことを行えばよいのではないかと考えた。障害者雇用はいずれ避けられなくなる問題である。社会的にみても障害者雇用を行っているとなると評価は上がる。これも安易な考えであると批判されるかもしれないが、イメージアップは目に見えない価値を生み出し、尾道を将来的に変えていく効果があると私は考える。

おのみち元気プロジェクト

尾西 はるか

私の第二の故郷である尾道を活性化したい!!

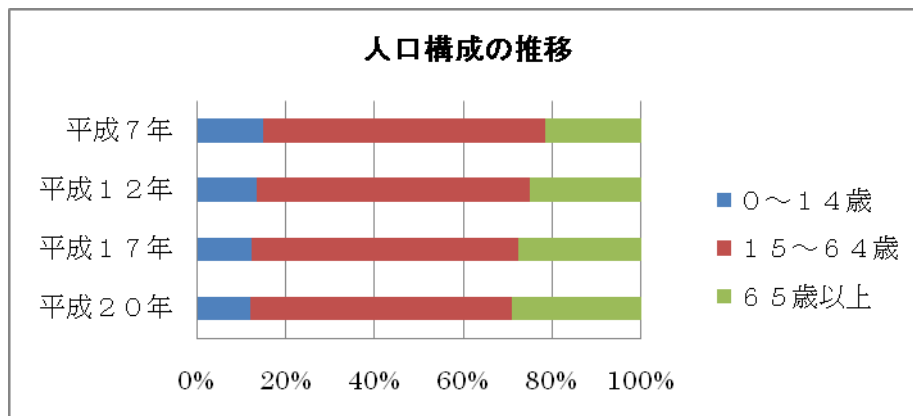
街の活性化には **人が集まる** → **にぎわう** → **収益up** → **にぎわい継続** という

ステップが考えられます。このステップをたどるように街のコンセプトや具体的なプランを作成する必要があります。

そのために、**①現状分析** **②ターゲット設定** **③目標設定・プラン作成** という流れで尾道市の活性化を考えます。今回は、移動の中心となる尾道駅周辺の、商店街や海岸通りに注目しました。

① 現状分析

まず、人口構成・推移を調べてみました。



上図から、65歳以上高齢者数は増加し、明らかに少子高齢化が進んでいると分かりました。

次に私は、実際に尾道駅周辺の商店街や海岸通りを歩いてみて、自分の目で改めて街を観察しました。その様子や感じたことを簡単に紹介します。

★商店街→人通りは少なく、若い人はあまり見られませんでした。空き店舗も多く、なんとなく暗い感じがしました。

また、小さな映画館が最近できたがあまり話題になっていません。

★海岸通り→駅を出て、グリーンヒルホテルがある通りを右に歩いて行き、「港湾駐車場」「レンタサイクル場」を過ぎると、今はほとんど使われていないような「大きな倉庫」がかなり広範囲を占めていました。この場所を有効活用すること

は、活性化ポイントのひとつになると感じました。

また、海岸通り全般には思った以上に飲食店がありました。その中でも子供から大人まで人気のある有名な「ラーメン」は尾道市の強みになると感じました。

② ターゲット設定

尾道市は特に少子高齢化が進んでいて、高齢者数は年々増加しています。この現状で、高齢者（お年寄り）をターゲットから外すことはできません。

また、尾道の良さを理解し受け継いでいくことも大切にしたいので、学生が尾道市での生活に誇りを持てるようにしたいです。

よってターゲット→高齢者、学生 に設定します。

③ 目標設定・プラン作成

「お年寄りが安心して暮らせ、楽しめる街づくり」

「学生も楽しく、学びの場にもなる街づくり」

という目標を設定します。

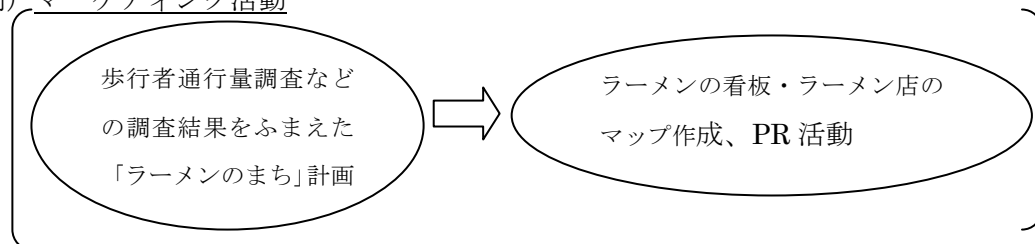
プラン内容

- I 商店街の空き店舗を利用して学生のアトリエや研究室を設ける
- II 映画館の利用を増やす
- III 海岸通りの「大きな倉庫」をなくし、芝生を植え、誰もが気軽に利用できる運動場、公園をつくる
- IV ラーメン店の活性化

I 商店街の空き店舗活用

商店街を学びの場として活用してもらい、学生が商店街に来ざるを得ないような状況をつくろうと考えました。そのために、学校側に「机上だけでなく実践活動を通じてマーケティングや地域ビジネスを学ぶことで学生自身の成長につなげる」という提案を持ちかけます。その研究室として空き店舗を利用してもらいます。

(例) マーケティング活動



この例は、Ⅳのラーメン店の活性化にもつながります。

このように学びの場として活用すると共に、商店の人との会話を楽しんだり、尾道の良さを発見したりすることで、若い人が少なかった商店街に常に学生がいるというにぎわいを期待します。

Ⅱ 映画館の利用を増やす

昔はまった映画やドラマの話でよく盛り上がるという経験があります。そこで、ある程度有名な昔懐かしの映画やドラマを低料金で観られるようにします。また、リクエストBOXを設置して、リクエストに応じて上映していきます。

今よりも映画館に足を運ぶ人が増えてにぎわうことを期待します。

Ⅲ 海岸通りの広場の整備

倉庫をなくし、芝生を植え、大きくて海が見える眺めの良い広場をつくります。そこには、グランドゴルフ・ゲートボール、フットサルなどができる運動場、また、ウォーキングコースや公園をつくります。その広場が、お年寄りや学生などが身体を動かして楽しんだり、コミュニケーションを取ったりできる「憩いの場」としてにぎわうことを期待します。

また、駐車場利用者も増えると考えられるので有料の「港湾駐車場」を拡大します。

さらに、街中にある利用者の少ない自動販売機を「憩いの場」に移設して確実に利用者を増やします。

「憩いの場」として海岸通りに人が集まれば、今まであまり知られていなかった尾道のレストランやカフェがにぎわい、収益UPにつながると考えます。

Ⅳ ラーメン店の活性化

尾道の強みである「ラーメン」をもっとPRする必要があります。

そのため、駅などにラーメン店をピックアップしたマップの看板をつくります。また、店にたどり着く間の所々にも、おもしろ案内看板やラーメン店紹介の広告を置いたりします。このように人を楽しませ、行ってみたいと思ってもらえるようにすれば、さらに強みになると考えます。

これで、少しでも、尾道駅周辺の商店街や海岸通りに人が集まりにぎわうことで、尾道市が元気になることを願います。

尾道をどう変えるか

鬼村 茉莉

今回、尾道市を基点に考えて私ならどう変えるかを考えていく。

まず、今から尾道市について、尾道市の現状、問題点、改善点、福山市との違いから見えてくる尾道市の問題点を順に述べていく。

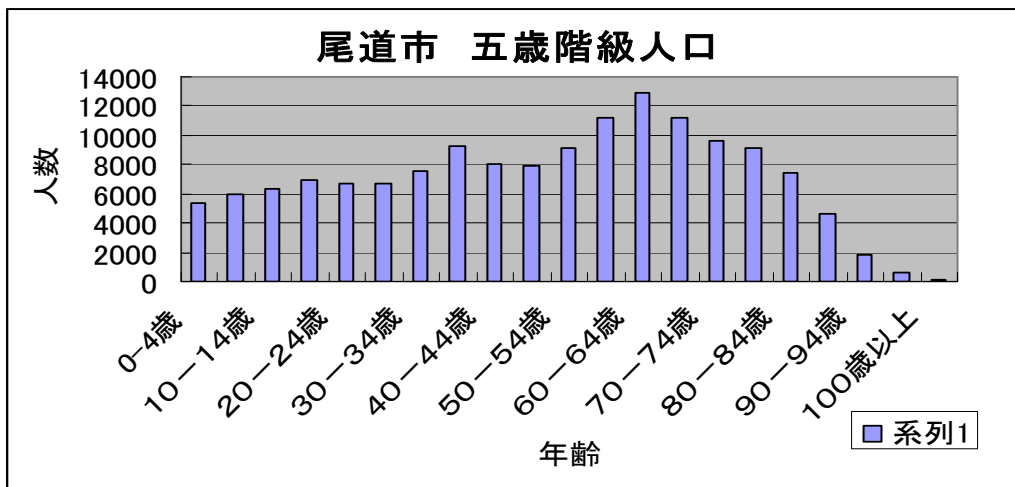
1. 尾道市について

尾道市は瀬戸内海に面した場所に位置しており、水産業が盛んな都市である。2005年には向島町と御調郡御調町、2006年に因島市と豊田郡瀬戸田町と市町村合併をした。フェリーを使い行き来をする人も多い。また、坂の街、文学の町、映画の街とも知られ、寺や観光スポットが多数存在し、他の市や県や海外からの観光客が年中見られる。そして、尾道ラーメンといった食に関しても有名であることから尾道市民より観光客で賑わっている。また、尾道駅周辺は山と海に挟まれているため山側に住宅や寺が密集しており、道路も狭く傾斜が急な立地条件となっている。そのため、坂の街と呼ばれるのである。そして、1968年の尾道大橋の開通、1999年のしまなみ街道の全通により四国と尾道間の交通は便利になり物々の運送もしやすくなり産業が発展していった。この2つの開通により経済効果が上昇したのは言うまでもない。立地ではとても水軍に恵まれており昔から造船所が尾道、因島、向島に存在して工業都市として造船も栄えていたが、今は造船も衰退化してきている。しかし、そのままで終わらずせっかくの海に面した立地として交通条件の良さを利用しての新たな「瀬戸内の十字路」と呼ばれ、さまざまな他産業推進に努めている。

※参考：尾道市Wikipedia (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%BE%E9%81%93%E5%B8%82>)

2. 尾道市の現状

尾道市の人口を5歳階級で見ると次のようになる。

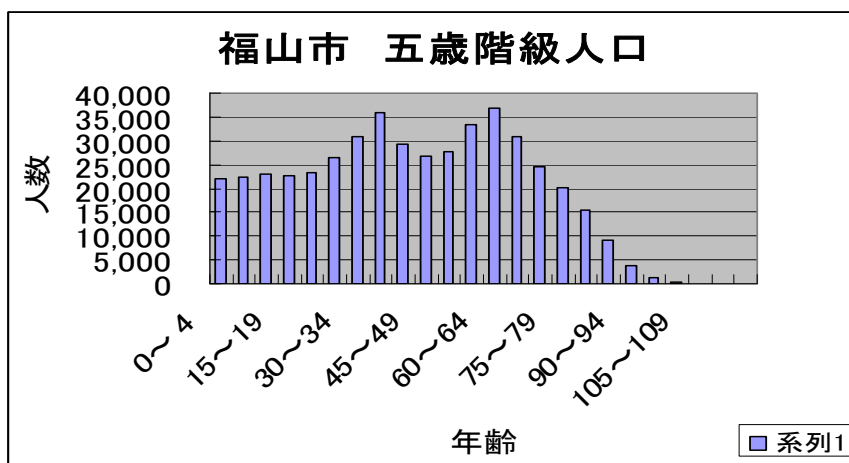


※平成22年4月22日現在

このグラフから見て分かるように、尾道市は若年層より60歳以上の高齢者の層の方が多い。
 ※参考：尾道市ホームページ (http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/shimin/16_jinko/H220430.xls)

3. 福山市の現状

福山市の人口を5歳階級で見ると次のようになる。



※2010年4月末現在

このグラフから見て分かるように、福山市は若年層の割合の方が高い。

※参考：福山市ホームページ (<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/shiseijoho/toukei/toukei/nenrei.xls>)

4. 尾道市の問題点

1. 尾道市の現状より尾道市は高齢者の方が多い町ということがわかる。それに対して、街の中は坂道や細い道など情緒にはとても溢れている良い町だけれども、住むにあたっては危険が多い町とも言える。また、若者が少ないとは雖も、尾道市には若者が楽しめる場所が少ない。洋品店や映画館、飲食店などどちらかといえば若者向けのものより高齢の方向けのほうが多い。

5. 尾道市と福山市の違い

1.尾道市の現状、2.福山市の現状の2つを比べ合わせて見ると、尾道市は60歳以上の高齢層が若年層より多いが福山市は若年層、高齢層がどちらかの割合が極めて多いのではなく、ほぼ同じくらいの割合であることがわかる。つまり、福山市は若者が多い分それだけの需要に対してのモノ（洋品店、飲食店、映画館）などが充実している。高齢層に対しても交通機関や道幅など住みやすい街となっている。欲しい商品を手に入れやすいなど重要と供給が満たされている。そのため、どの年齢層にもあまり偏ることなくどの年齢層も均等に存在することが考えられる。そこが尾道市と福山市の大きな違いであろう。

6. 改善点

以上の点より私は、尾道市はまず年齢層に合わせた街づくりを行うことが第一であると考えられる。福山市のように交通機関も整え、主にバスの本数を増やしたりする。特に高齢層の方は病院などの施設を利用する回数が多いため病院に向かうバスの本数を増やすのが適当である。それと同時に、フェリーの本数も増やし向島や因島の人たちが尾道に来やすいようにする。そして、福山市との違いで述べたように他の市からの若年層の数を増やしたり、尾道市民の若年層に対する尾道市での娯楽の追及のため、駅周辺にショッピングモールの建設を行う。尾道市の若者は広島市や福山市まで出て買い物をしたりする。それは、広島市、福山市では自分の要求が満たせる物や場所が揃っているからである。尾道市では高齢者向けの店などが多いため、尾道市の若者は尾道市での娯楽を満足に行うことができないのである。また、坂の街とも言われることは尾道市がそのような地理的条件に位置するため仕方ないことではあるが、道路の幅など広くしたり急な傾斜を少しは緩くしたりするなどの道路状況の見直しが必要である。

尾道市再建計画

檜山 麻由美

尾道市の財政再建を計画するに当たり、尾道市の財政を圧迫しているのは何だろうか。よく、尾道は高齢者が多い。特に後期高齢者が多いと言われているが、本当に高齢率の問題だろうか。

尾道市は平成の大合併で旧尾道市、旧御調町、旧向島超の3つの市町村が合併し、2005年3月28日に今の尾道市が誕生した。

その合併理由になったのが

1. 少子高齢化対策
 2. 財政状況
 3. 行政改革
- である。

では、実際に3つの市町村が合併し、高齢率や財政状況、行政問題はどのように変わったのだろうか？

合併前の3市町村の基礎情報

	人口	高齢化率	面積	議員数	経常収支比率
旧尾道市	92,586 人	23.20%	110.95 k m ²	26 人	83.70%
旧御調町	8,111 人	30.20%	82.98k m ²	16 人	87.00%
旧向島町	16,710 人	24.60%	18.40 k m ²	16 人	86.40%

※2000年の国勢調査を元に作成

	旧尾道市	旧御調町	旧向島町
年少人口 (0~14歳)	12,155人 (13.4%)	1,014人 (12.9%)	1,886人 (12.0%)
生産年齢人口 (15~64歳)	55,512人 (61.4%)	4,314人 (55.1%)	9,291人 (58.9%)
老年人口 (65歳~)	22,824人 (25.2%)	2,509人 (32.0%)	4,581人 (29.1%)
※年齢不詳除く			

	旧因島市	旧瀬戸田町
年少人口 (0～14歳)	2,704人 (10.2%)	842人 (9.3%)
生産年齢人口 (15～64歳)	15,546人 (58.4%)	5,214人 (57.5%)
老年人口 (65歳～)	8,374人 (31.4%)	3,006人 (33.2%)
※年齢不詳除く		

上は合併前の因島市の基礎情報

合併後の（新）尾道市の基礎情報

	人口	高齢化率	面積	議員数	経常収支比率
新尾道市	117407 人	23.60%	21.33 k m ²	34 人	87.90%

この高齢率23.6%という数字では782市23区の中で300位以下という平均的とも言える数字である。しかし、財政の硬直度を示す経常収支比率が87.9%と言うのはあまりにも高すぎないだろうか？これでは財政に余裕があるとは言えず、色々な事業に投資することが出来ない。硬直しつつある状況である。尾道市の経常収支比率は人件費及び公債費が類似団体の平均と比べるととても高い水準であること。人口千人当りの職員数が9.84人というのはあまりにも職員が多すぎないだろうか？議員数の定員を3分の2まで減らすと言う案があるようだが、議員数より職員数を3分の2程度に減らすほうが平均的水準まで下げることが出来るので、そちらを考えたほうがいいだろう。にもかかわらず、尾道市が2006年1月10日に因島市と合併したときに発表された文章の中に

「全国的に少子高齢化が進行する中で、両市においては、2000年の国勢調査における65歳以上の人口のしめる割合は、尾道市23.9%と広島県平均18.5%を上回っており、全国平均を上回る少子・高齢化が進行し、今後とも高齢化が寄り進行することが想定されている。少子・高齢化の進行は増大する住民サービスとそれを負担する人口の減少によって財政の収支に不均衡をもたらすことが予想され、こうした状況に対応した適切な保険・医療・福祉サービスの維持・向上を図っていくことが必要である。」

というものがある。2005年の合併のときに人員削減をしようとしていたのに、職員数も議員数も

定員いっぱい抱えたままである。減らす気はなさそうである

尾道市は平成21年度当初予算案を発表した。一般会計は544億3000万円で、前年度比5・2%減となった。23日開会の市議会2月定例会に提出される。

歳入では、景気悪化による法人市民税の減少などで、市税については約193億円（前年度比1・2%減）を見込み、財政調整基金約2億5000万円を取り崩すなどして財源不足を補う。これに伴い基金の残高は約21億円となった。

歳出は新規採用の抑制や公債費の削減などで、義務的経費を約287億8000万円（同2・7%減）とした。その一方、緊急雇用創出費として、計約6億8000万円を計上した。記者会見した平谷祐宏市長は「持続可能な行政運営を行うため、市債の抑制と、予算規模の適正化に努めた」と述べた。

それに先立ち尾道市は1月14日、旧2市3町の合併に伴い策定した「新市建設計画」を見直し、合併後10年間で実施予定だった事業のうち30事業を凍結・執行停止する方針を明らかにした。これは尾道市が直面する財政難を受けたものである。

ここで考えなければならないのは、尾道市の財政力指数は0.61で普通決算の財政規模は560億円という中で、総事業費1000億円を超える投資というのは無理があったのではないかということである。見直すとののはいいことであるが、そもそもの計画自体が実施可能な範囲を超えていたので、むしろこうなることは普通だったのではないだろうか。

このような状況であるので、普通に考え付くような人員削減、事業凍結などではそもそもの解決には至らないのではないか。もっと大胆な議論を展開しなければならない。

この先は倫理上、また法律上問題があるかもしれないが、私が考える最も大胆に増やす方法である。

まずマクロ的に見ても経済規模を拡大させようと思うと、不可欠なのが人口の問題である。一般的には人口が増加していくにつれて経済規模も大きくなるとされている。日本の今の（尾道市にも当てはまる）不況は経済が伸び悩み、個人消費が落ち込んでいること（内需にスポットを当てれば）にある。では個人消費を増やすことを考えたときに、一人当たりの消費は変わらなくても、人口が増えれば個人消費はアップするという単純な考えである。

しかし、外需に依存してきた日本が今考えなければならないのは、外需を今後前の水準に戻すということよりも内需拡大を図ることである。これを尾道市に置き換えてみる。

では一体どのように尾道市の人口を増やすのかというと、尾道市だけ日本で、というよりも世界で特別なルールをつくれればいいのである。私が提案するのは「尾道市は同性でも入籍が可能な市にすること」である。日本と言う国ではとても難しいかもしれないが、最近多くの英米の調査では人口の2~13%（50人に1人から8人に1人）の割合で同性愛者が存在しているということが分かっている。日本にこれだけ存在しているかは不明であるが、少なくとも統計的には人口の何%かは必ず同性愛者がいるということである。彼らが直面する問題は様々であるが、入籍できないということが大きいのではないだろうか。

尾道市は同性でも入籍を許可するとどのような効果が現れるだろうか。まず、全国の（世界中から国籍を日本に変更して）同性愛者が尾道市で入籍をしようとする。そのときに尾道市はひとつ決まりごとを作る。納税は必ず尾道市にしてもらおうこと、できる限り尾道市に住んでもらおうこと。これだけでいい。前者が大切で、後者はどちらでもいい。というのは、同性愛者は同性なので子供（嫡出子）を作ることが出来ない。したがって尾道市に住んでもらうと、子供がいない分の浮いたお金を地域に落としてくれる。子供がいないと言うことは公的に設置しなければいけないような保育所だとか学校の費用も当然加算されないの、高齢者が多く、社会保障費がかさんでいる尾道市としてもとてもいい。

しかし、どこに住んでいても納税の義務は背負ってもらおう。これでもし同性愛者が人口の2%いるとして、日本の人口を約1億2000万人だとすると、240万人いることになる。このうちの5%が尾道市で入籍したとすると12万人、納税者が増えるということになる。これは納税義務者数が3万8000人余りの尾道市にとっては余りにも魅力的な数字であるはずだ。経済特区を作るなど、さまざまな対策がある中で、私が考えた最も大胆な案がこれである。尾道市にはぜひ検討していただきたい。

尾道造船の発展

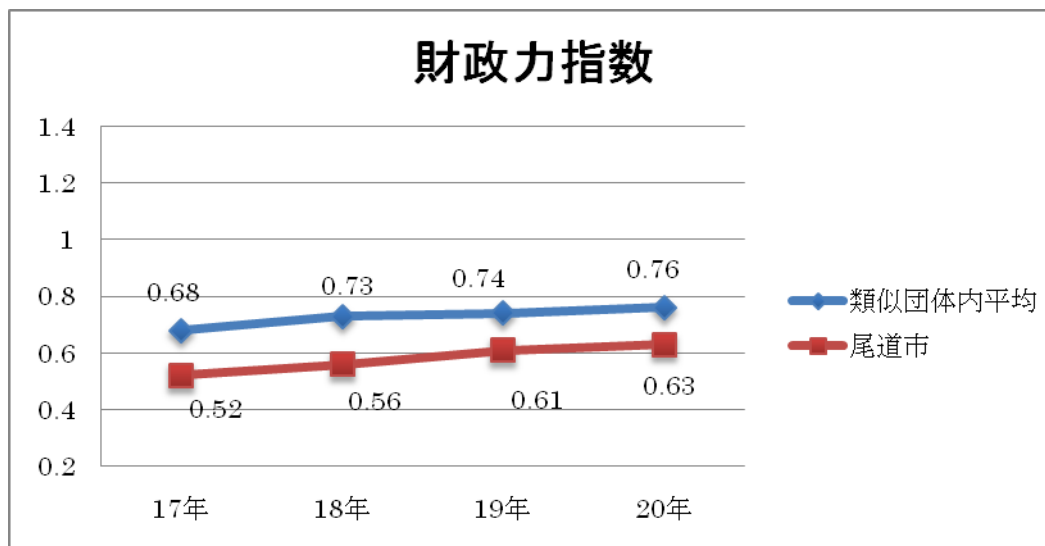
門田 楓

1. はじめに

尾道市を活性化させるためには何が必要か。私は、地場産業の再生が必要不可欠であると考えている。その中でも、昔は栄えていたものの近年は衰退の一途を辿っている造船業に重点を置いて、私の地元であり、造船業が盛んな今治市と比較しながら考えていきたいと思う。

2. 尾道市の現状

尾道古くから海運による物流の集散地として繁栄していた。戦前までは広島市に匹敵する程の経済力を持っていたと言われている。また、水運に恵まれている立地から、古くから尾道・因島・向島に造船所が存在し商都のみならず工業都市の一面も持っており、造船景気で栄えていた。しかし、近年は造船業の斜陽化により衰退の一途を辿っている。



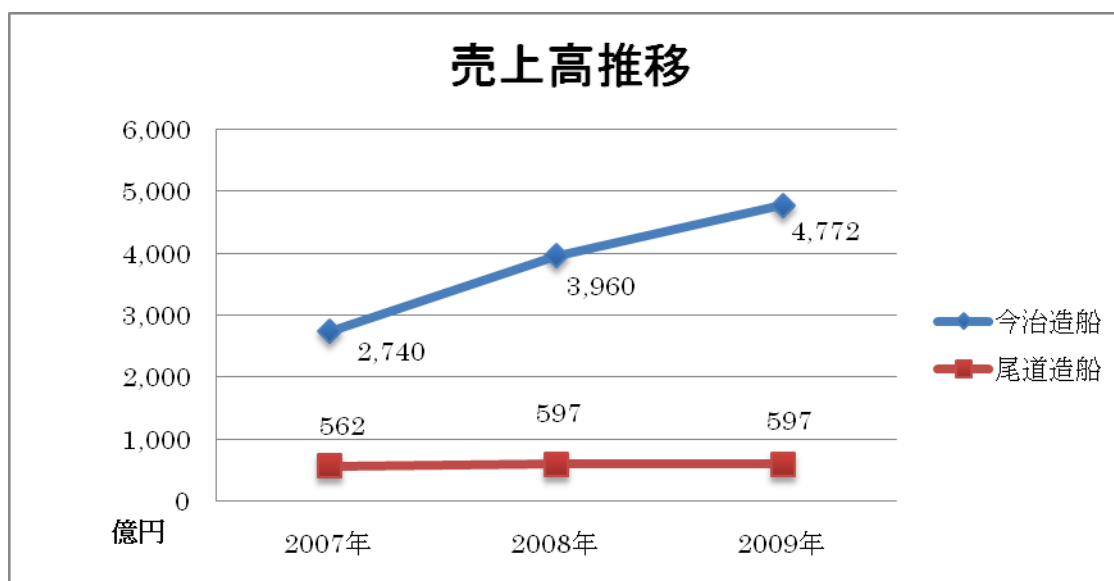
上のグラフは尾道市の財政力指数を表したものである。20年度は前年度を上回り0.63となったが、元来、税収が少ない脆弱な財政基盤で、更に2回にわたる合併では財政力の低い市町と合併した影響もあり、類似団体平均に比べて低い数値になっている。

3. 尾道市と今治市の比較

なぜ尾道の造船業が斜陽化しているのか。隣接しており、国内でも造船でトップシェアを誇る今治市と比較してどのような対策を行えばよいのか考えていきたいと思う。

実績

	尾道造船	今治造船
資本金	1 億円	9 億 7,800 万円
従業員数	467 名 (グループ従業員数 750 名)	1,080 名 (グループ従業員数 11,000 名)
売上高	597 億円 (2009 年度実績)	4,772 億円 (2009 年 3 月実績)



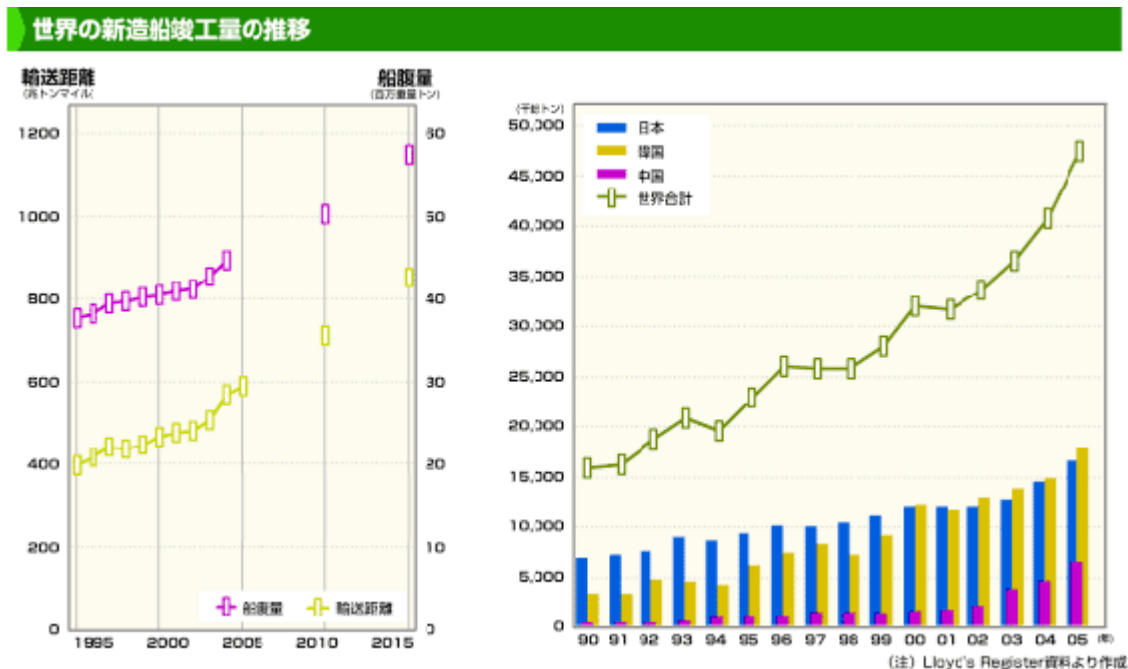
上の表からでもわかるように、今治造船は尾道造船に比べ規模がかなり大きい。今治市は不動の造船王国で17の造船所があり、建造隻数では国内の18%を占めている。今治市に本社や拠点を置いている造船会社のグループ全体では、日本全体の30%を超える船舶を建造している。日本の建造量におけるシェアは22%を占めており、また世界の建造量におけるシェアにおいても、日本24%のうち5.5%と高い実績を誇っている。また今治市内には、造船業の発達によって船舶用の機械や資材を生産する工場が集積している。

それに比べて尾道造船は、造船所は3つしかなく建造実績は500隻にとどまっている。1700隻を誇る今治造船とはかなりの差がある。3つの造船所のうち、2つは最近操業開始されたばかりで、歴史ある造船所であるとは言い難い。売上高においては、尾道造船は2年前と比べて若干伸びているものの、今治造船は2年前と比べると約2000億円の伸びとなっている。同じ造船業でも、大きな格差があることがわかる。

5. 今後の在り方

世界の貿易量の大半を輸送している船、その必要量は世界経済と強く関係している。現在の世界の海上輸送は、BRICs（ブラジル・ロシア・インド・中国）の発展に伴って、年々輸送量が増加しており、非常に好調である。年間約10億トンもの物資が海上輸送されているが、最近ではその量も年間約5%（5000万トン）ずつ上昇している。世界の造船会社がフル操業した場合の船舶建造能力が、年間約4000万総トンであることを考慮すると、今後も「船舶」の需要は伸びていくと考えられている。

このことを背景に、各社が建造能力を増強し、積極的に受注活動を行うなど、造船業界は非常に活況を呈している。



日本は有数の造船国である。世界でも建造量は3位で、高度な技術に定評がある。このことをふまえ、尾道も造船業の拡大を進め日本国内だけでなく、世界を相手に事業を展開して尾道を支える程の大企業に成長することが重要である。

また、尾道は観光業が盛んである。土日・祝日には、商店街を中心に観光客の姿をよく見る。これをうまく利用して、地場産業を観光客に見せることで再評価する「産業観光」を進めるべきである。尾道造船所では、1年間に約10隻の船を船台から海面に滑り下ろす進水を行っている。進水式は、一般の方の見学も可能である。巨大な船が海面に下りていく光景はとても迫力があり感動的である。この光景を少しでも多くの観光客に見てもらい、観光客を増やすことも可能であると私は考える。

今治造船は、今治市を支える大企業である。これと同じように、尾道造船も今後事業の拡大を行い、尾道市を支える程の大企業へと成長することは可能である。地元に着した「地場産業」の再生・再興を行い、尾道の活性化へ繋げていくことが必要である。また、造船業が盛んなになれば、船舶用の機械の製造などの船舶関連会社も必要となり、更なる町の活性化に繋がるはずである。

私は、尾道市を変えるためには資金が必要だと思うので、まず、尾道市の収入を上げるためにはどう変えるべきかを同じく古き良き観光名所である京都に対してどこが劣っているのか考えることによって、求めていきたいと思う。

まず、京都の観光客数と尾道の観光客数を比較してみる。下の表はそれを表にしたものである。

表 I

区分	平成 17 年 (2005 年)	平成 18 年 (2006 年)	対前年比
京都の観光客数	4,727 万 1 千円	4,839 万 1 千人	112 万人
尾道の観光客数	292 万 6 千人	300 万 9 千人	8 万 3 千人

表 I を見てわかるように京都の観光客数は尾道に比べ 1.5 倍以上も多い。観光客数が多ければそれだけ観光による収入が増える。しかし、尾道と京都では面積や観光名所の数や面積などで規模が違うので観光客数で京都に追いつくことは難しい。そこで、観光客の消費額をどのようにして増大させているか考えていきたい。

観光客が主にお金を消費するのは

- ①食事 ②お土産 ③入場料 ④交通費、の 4 つである。

まず京都について上記 4 つを見ていきたい。

- ①食事・・・京都には京料理と呼ばれる料理がある。これは京料理と 1 くりにされているだけでさまざまな種類がある。観光客がリピーターとなるためには、このように食に飽きさせないようにする必要がある。
- ②お土産・・・誰もが知る名物「八橋」を筆頭にさまざまな和菓子を販売。和菓子という大きな分野を名物にすることによって多種類のお土産を販売する。また、清水寺などの名所をモチーフとしたお菓子の販売など、現地でしか買えないものを販売することにより購買意欲を誘う。
- ③入場料・・・清水寺を始め、入場料によって収益を上げる場所がいくつかある。観光客は名所に行くために来ている人がほとんどなので、安定して収益を上げることができる。
- ④交通費・・・電車(JR、新幹線)やバス、タクシーなど、交通の便は充実している。タクシーはもちろんだが、バスも各名所のすぐ近くまで行くようになっており、観光客が利用しやすいように工夫されている。

次に、先の4つについて尾道を見ていきたい。

- ①食事・・・基本的に名物尾道ラーメンのみ。
- ②お土産・・・食事同様に名物尾道ラーメンがある。また広島県名物紅葉まんじゅうも主流。
- ③入場料・・・千光寺などの名所は無料である。
- ④交通費・・・電車(JR、新幹線)やバス、タクシーなど、交通手段はあるが道が狭く渋滞を巻き起こしやすい。千光寺に行くためのロープウェイもある。

ここで、先ほど出てきた4つについて京都と尾道を比較していきたいと思う。

①の食事について

京都の多様な料理に対し、尾道にはラーメンしかない。料理を楽しみに観光に行く客も少ないので、京都に見習い、今後尾道は料理のバリエーションを増やしていくことが必要になる。そもそも京料理とは、京都の京野菜を使った料理である。つまり、地元の食材を生かした名物だ。尾道も京都のように地元の食材を使った名物を開発していくべきではないだろうか。尾道は観光名所であるのと同時に瀬戸内海に面した漁師町である。だから魚料理をもっと有名にしていく価値はある。したがって、尾道は魚料理を有名にすることによって、料理のバリエーションを増やせば、収入を増大させることができる。

②お土産について

京都の八橋に対し、尾道にも尾道ラーメンという名物お土産がある。しかし、①の食事同様、その他のお土産には「バリエーション」がない。清水寺を例に見るようにもっと名所を利用したお菓子などの販売をすべきである。これにより、収益を上げるのはもちろんだが、より知名度を上げることにつながり、観光客数増大につながる。

③入場料について

京都が入場料を清水寺で大人300円、小人200円取っているのに対し、尾道は千光寺で一切料金を取っていない。ここでの収益の差は大きい。千光寺の入場料を100円、尾道に来る観光客数の1/10が千光寺に来客するとする。表Iの2006年を例にとると、 $300万9千人 \times 1/10 \times 100円 = 3009万円$ と大きな収益を得ることができる。したがって、千光寺で入場料をとるべきである。

④交通費について

京都も尾道も交通手段についてはほとんど同等といっていい。しかし、尾道は道路整備が遅れ渋滞を巻き起こしやすい。これでは、バスやタクシーで多くの観光客を名所に運ぶのに時間がかかりリピーターが減ってしまう。だから、交通に関しては京都のように道路をしっかり整備すべきである。

以上4点で京都と尾道を比較し尾道の収益を増大させるためには各点でどうすべきか考えてきたが、私はもう2つ京都と尾道には決定的な違いがあると確信している。1つ目は、観光客の宿泊である。観光客が宿泊するということが、それは、観光客の滞在時間が長くなり、

消費額が大きくなるということである。では、なぜ京都には多くの観光客が宿泊するのだろうか。尾道には京都のような日本らしきのある「旅館」というものがあまりない。また、京都には多くの寺の名所があり、その数は1日で回りきれないほどである。一方、尾道にも京都同様に多くの寺があるのだが、その名が知られている場所は少ない。そこで、今あげた2点をどう改善していくか考えていきたいと思う。

まずは、宿泊について。尾道には「旅館」というものがあまりない。外国人観光客にかぎらず古き良き観光地には日本古来の良さを求めにくるものである。だから、もっとホテルではなく旅館を作るべきである。また、観光客が旅館に求めるものは温泉街なら温泉を、京都なら京料理を求めるように、現地でしか味わえないものである。したがって、尾道は2ページ目でも述べたように、魚料理を有名にして出すべきである。

次に、2日以上滞在したくなるようにするにはどうしたらよいかを考える。現在、尾道には千光寺グリーンランドという小さな遊園地がある。



しかし、この遊園地には絶叫マシンなどはなく、10代後半や20代の若者が遊ぶレベルには程遠く、小さな子供が遊ぶレベルの物ばかりである。そこで、私は尾道に若者の楽しめる遊園地を設立することを提案したい。もちろん、尾道が観光名所であると同時に映画の撮影名所であることを考えるとそう簡単に作ることは容易ではない。しかし、映画の撮影に使われるのは海沿いや千光寺そして千光寺付近の山がほとんどなので、三成のほうにつくればよいと思う。遊園地ができれば、尾道観光で1日、遊園地で1日の合計2日間楽しめるようになるので、宿泊客の増加が見込める。

二つ目は観光客への観光のさせ方である。私は②お土産と④交通費を清水寺と千光寺を比較することによってより追及していきたいと思う。京都の『清水寺』という名所に対し、尾道には『千光寺』という名所があり、同様に坂の上にある。しかしながら、この2つには大きな違いがある。それはそれぞれの名所への行き来の過程である。千光寺へは、ロープウェイやバスが出ていて、一見便利でいいように思えるが、ここに欠点がある。観光客というのは、名所を見て回り、お土産を買って帰るのが一般的である。観光客が来てもお土産を買っていかなくては収益の伸びは見込めない。

京都は坂の下から上の清水寺まで交通の便はなく、多くのお土産屋が並ぶ中を歩かせるようになっていて、それによって多くの収益を上げているのに対し、千光寺は頂上に1店舗のお土産屋があるだけだ。そこで、私は新たな観光の方法を提案したい。

まず、京都の例にならって坂道にお土産屋並べる。そして現在あるロープウェイを行き専用にし、帰りは歩いてお土産屋の並ぶ坂道を歩いて帰ってもらう。そうすることにより、ロープウェイで収益を上げつつお土産でもより一層収益を上げる。

まとめとして、日本の代表的な観光名所である京都と比べ尾道は、まだまだ劣っているが、その分まだまだ改善の余地があると言える。



尾道大学は久山田でいいのか！？

木村 千尋

1. 今の尾道大学

こんな経験はないだろうか。夏の暑い日に、思わずアイスを食べたくなることが…。大学周辺に住んでいる人がそう思った時、どうするか。



➡ 近場で買う。

大学周辺のお店は次のようにある。

	営業時間	補足
Y ショップ	8:30~19:00	基本的に土日、祝日は休み。
学生会館	10:30~19:00	
坂本ストアー	7:00 頃~21:00 頃	基本的に開いているがたまに休む。

すぐにアイスを買って食べられるため、満足が得られる。ただし、24 時間いつでも買えるわけではない。

➡ 山を下りて買う。

大学から尾道駅の地図は右に載せたとおりだ。

大学付近に水源地があることから、大学が山の上にあることが分かる。

家がなく、
街灯が少ない山道



前ページより、歩きや自転車での移動は大変であり、夜は危険だ。原付や自動車など、自分で移動できる手段を持っている人は、好きな時に山を下りられるが、その他の人は、バスに頼るしかない。

しかし、バスは時間や本数が決まっているため、好きな時に山を下りることができない。すぐにアイスを買に行きに行くことができないので、あまり満足が得られない。

また、バスがなくなってからは、自分で移動できる手段を持たない人は山から下りることができない。

➡ 我慢

お店が閉まっていて、バスがない時間にアイスが食べたくなった場合、諦めるしかない。

大学周辺に住んでいる人は、満足にアイスを食べることができない。



2. 尾道大学を変えよう！

では、大学周辺で満足にアイスを食べられるようにしよう。

➡大学周辺に 24 時間営業のコンビニを建てる。

これなら、アイスはいつでも買え満足が得られる。大学周辺の寮に住む学生のほとんどが利用すると考えられる。

しかし、大学が長期休暇に入ると、寮に住む学生のほとんどが帰省し、利用客が激減する。地域の人を呼び込もうと思っても、わざわざ山の上に来るとは到底思えない。

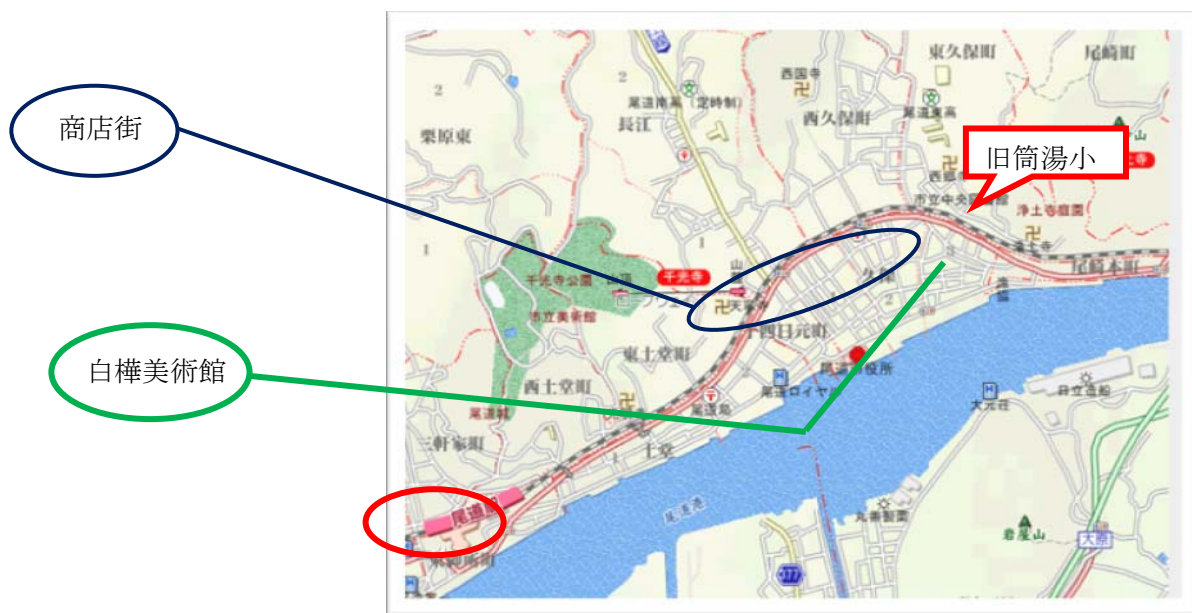
よって、コンビニを建てることは不可能に近い。

➡大学を移設する。

大学周辺にコンビニを建てるのが無理ならば、ここは思い切って大学を他の場所に移してはどうか。

例えば、旧筒湯小はどうか。

尾道駅から旧筒湯小までの地図は次のページに載せたとおりだ。



旧筒湯小も山の上だが、今の尾道大学と比べて家や街灯の少ない山道はなく、街にかなり近い。少し歩いただけで大きな道路にぶつかり、コンビニや商店街に行くことができる。ここなら、バスに頼らずアイスを買って物に行け、満足が得られる。

また、尾道大学の分館である白樺美術館が近くにあるため、美術学科の人にとっては都合がいい。

尾道駅から旧筒湯小に行くには、防地口というバス停までバスに乗り、それから少し歩いたところにある。バスでの移動時間は下の表のとおりだ。

	バス停	所要時間
尾道駅発	尾道大学前	23分
	防地口	5分

見てわかるように、今の尾道大学より旧筒湯小の方が尾道駅に近い。バスで5分なら歩ける距離だ。

現在、旧筒湯小周辺には多くの空き家がある。これは学生寮にすることで利用できる。また、通学路の途中に商店街があるため、商店街を利用する学生が増えると予想される。これにより、商店街が発展し、街の発展にも期待ができる。

大学を移設することで、学生にとっても便利になり、尾道市も発展し一石二鳥となる。

3. これからの尾道大学

今、尾道大学では E 棟を建設するため、20 億円を投資する案がある。アイスも満足に買えない不便な久山田に投資をするより、学生にとって便利なところへの移設にお金を使ってはどうか。

《参考資料》

『山陽日日新聞』 平成 22 年 1 月 1 日(金曜日) 第 18635 号「尾道大学を筒湯小跡へ」

平成 22 年 3 月 13 日(土曜日) 第 18692 号「万機公論に決すべし」

平成 22 年 3 月 14 日(日曜日) 第 18693 号「広く市民的な議論を」

MAPPLE地図「ちず丸」 <http://www.chizumaru.com/index.aspx> (2010/5/20 アクセス)

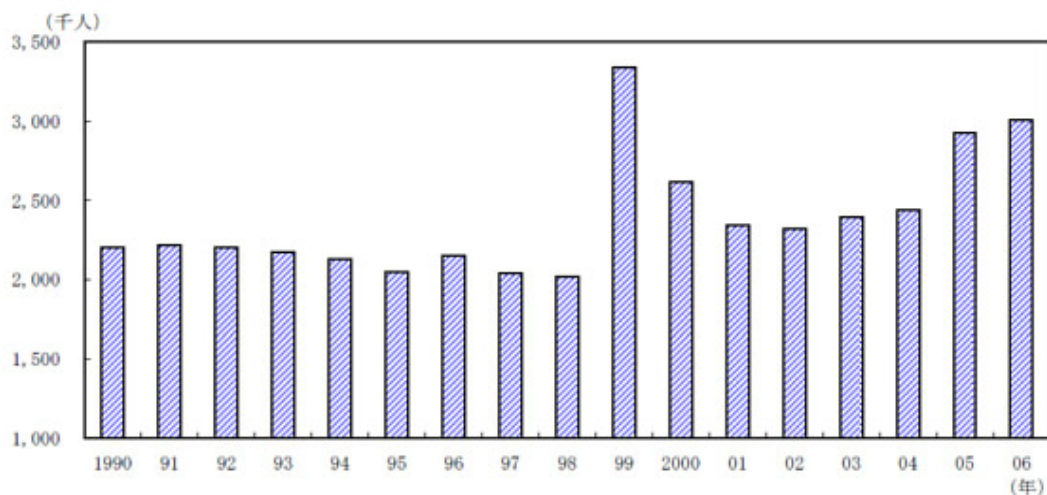
尾道バス <http://onomichibus.jp/> (2010/5/23 アクセス)

尾道の観光事業の成績が芳しくない事についてのレポートを書くにあたって、おさらいしておきたいのが、平成に入ってから尾道の観光客数の推移である。

尾道観光協会が発表している尾道観光事業についての資料には、映画のロケ地であることをウリとした観光事業の開拓により、平成7年度の入込観光客数約 384 万人であったところを、平成 17 年度には約 510 万人を記録したとのことだ。(だが、平成 17 年頃に平成の大合併の為、尾道市の範囲が広がっている為、旧尾道市内で統計した資料によると、平成 7 年度から平成 17 年度における観光客数の推移については約 90 万人とのことである)

近年のうちで一番多い観光客数、約 330 万人を記録した年は 1999 年で、この年には「瀬戸内しまなみ海道」が開通した。この次に多い観光客数を記録した年は 2006 年で、映画「男たちの大和/YAMATO」のロケセットが公開されていた年である。

第 3-5-6 図 尾道市入込観光客数の推移



↑尾道市入込観光客数の推移(http://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr07/pdf/chr07_3-5-6.pdf)より引用

この通り、観光客数については、1990 年代に比べて格段に多くなっている。

しかし、観光用の施設面では、1966 年からオープンしていた「千光寺山グリーンランド」が 2007 年に閉鎖され、営業終了までの収入は施設維持費と客数の関係により、とんとんの状態だったとのこと、少々経営面で厳しい部分があったことも伺える。

また、商店街には一部シャッター街のようになっているなどの寂れた部分も目につきやすく、近年客数が増えている街にしては少々物悲しいところがある。

今回のレポートでは、これらの今実施されている事業の他に、現時点で尾道に存在する常設の観光名所に関して、今現在集客力があるかなどについて、あくまで改善の余地がある部分についていろいろ考察を入れてみた。

まず、一番私にとっては目に付きやすい特産品について上げてみる。

尾道の特産品として、一番に挙げられる商品といえば「尾道ラーメン」だろう。醤油味の汁の中に、豚の背油をいっぱい入れたスープがクセになる尾道の御当地ラーメンだ。

尾道駅から尾道大学までバスで通っている人でも、通学路中に尾道ラーメンのお店は途中で何件も見ることになる。私は現在原動機付自転車で別の道から学校まで通っているが、思いだせるだけでも駅から大学までの道に尾道ラーメンの店は3件近くあったはずだ。そして、駅から大学までの道と反対側にある、現在の私の家(美ノ郷町)から大学までも、思いだせるだけで2件は存在したはずだ。この約20km間に置いて、少なくとも5件の尾道ラーメンの店が存在するのである。

これだけの御当地食品の店があるにも関わらず、何故この辺りの街はあまり賑わっていないのだろうか、ということを考えて際に、すぐに答えに届きそうな意見が見つかった。

正直私自身、ラーメンがあまり好きでないのである。この好みと偏りの問題というのは案外致命的のように思える。

同じ広島県に宮島という広島の有名な観光スポットがあるが、一度行ったことのある人なら分かる通り、宮島に存在するお店の8割は「もみじまんじゅう」の店である。(一般的なお土産屋含む)

だが、宮島にはこの銘菓以外にも見所は多数存在する。船を下りてすぐの広場に大量に群がる鹿の群や宮島水族館等の動物、そして何より一番の見どころは、世界遺産に登録された厳島神社だろう。

尾道にも多数の寺や神社が存在するが、厳島神社のネームバリューにかなう神社は残念ながら存在しない。

それでは、上記に上げた宮島と尾道の観光名所としての差を、それぞれの特産品、そして、歴史的建築物と比べてみよう。

まずは特産品、「もみじまんじゅう」と「尾道ラーメン」を見てみる。

このもみじまんじゅうと尾道ラーメンでは、圧倒的な戦力差がある。もみじまんじゅうは周知の通り、手のひらサイズであっさり目の甘さがウリの饅頭である。

その特徴から、いつでも気軽に食べやすいという長所がある。味のバリエーションも豊富で、宮島に行けば「揚げもみじ」という一風変わった美味しい食べ方まで存在する。2009年に朝日新聞が会員サービス「アスパラクラブ」内で行ったアンケート調査「日本一のまんじゅうは？」でも、全国1位となっている。

尾道ラーメンももちろんとても美味しいのだが、やはりコッテリしたラーメンを気軽に食べられるかと聞かれたら、やはりそういう訳にはいかない。特にもみじまんじゅうと比べてしまうとその差は歴然と表れてしまう。

それにもみじまんじゅうは「お土産」だ。お土産屋の入りやすさとラーメン屋の入りやすさは、ジャンルが違うとはいえ、ここにも差として表れている。

そして次に、歴史的建築物の「厳島神社」と「千光寺などの有名な神社、寺」の差についても、観光客の心をつかむ重要な要素がそこに存在するといえる。

まず、厳島神社と尾道の神社について、広さと特殊な位置関係以外、参拝した時点では特に変わったところは存在しないように思う。特に尾道の千光寺などは、文学の小道を含めてまた来たいと思わせる心地よさであった。

だが、厳島神社には上記に書いたとおり、厳島神社のネームバリューを形成することが出来るだけの要素がある。これは残念なことに千光寺には存在しえないものだ。

大きな理由として、まず1つに世界遺産として登録されていること、そしてもう一つは、有名な歴史人物——戦国時代の武将、毛利元就に縁のある建物であるということだ。

いつの時代にも戦国時代や三国志に魅せられる人は多く、有名人に会いに行くような気持ちでこのような建築物を訪問する人達も少なくないだろう。

もちろん尾道にも「文学の小道」という観光名所が存在する通り、林芙美子、志賀直哉、正岡子規などの有名な文学作家を生み出してきた土地であるが、はたして文学作家の出身地が、戦国武将の出身地に比べ、それらの著名人のファンに「是非行きたい」と感じさせる力があるかどうかと聞かれると、少々疑問が残る。

もちろん尾道にあつて宮島にはない、尾道だからこそその魅力も存在する。しかし、その部分を実際観光に来た時に生かせるかどうかという難点も同時に持ち合わせているものも多々ある。

その一例として、今回は「尾道の路地」を上げさせて頂く。

尾道は他の街と一風変わった坂道の多い小道で有名な街である。その土地柄が生み出す古風な家の並んだ小道の写真は、私たちに感嘆をもたらす程の美しさである。

だが、写真に関しての素人な私たちが実際にその風景を期待して尾道の街に行ってみると、なかなかあの写真のような美しい風景にたどり着くことはなかなかないのである。やはりあの美しさはプロの写真家の腕が成せる技なのだろう。(ただ、駅前によく一眼レフカメラを持った方々がいるので、写真のモチーフとしてとても素晴らしい土地であることは間違いないだろう)



↑尾道の路地(左)、商店街(右)の写真。絵的に映える場所が多いのは確かだが、常にそのように人の目に映るかどうかはわからないのが難しいところ。

私の考えられる町おこし案の中で1つ、尾道市が成功できるのではないかと考える案がある。「個性的な御当地マスコットの作成」である。

有名なところで彦根市の「ひこにゃん」のような「ゆるカワ系」のマスコットや、「まりもっこり」、「せんとかん」など、若干受け入れ難いフォルム故に記憶に焼き付いてしまうような、こちらはいわゆる「キモカワ系」のマスコットなど、是非キーホルダー等のグッズを購入したいと思わせるマスコットキャラクターが各地に多数存在する。

これらのような個性的な尾道市のマスコットキャラクターを作成することに成功すれば、きっと観光客の心をつかむ安心の要素が1つ増えることになる。

そして、尾道市ならきっとそれが出来るのではないかと考えるには理由がある。

「広島ブラックマッペくん」たちの存在である。

「広島ブラックマッペくん」は、広島全域に販売されている、主にお好み焼きに使用される細いモヤシ「ブラックマッペ」の商品名、及びキャラクター名である。

私が広島に来て一番に衝撃を受けたのは、何を隠そうスーパーの野菜売り場で大量に売られている彼らの存在だ。一体どのような感性があればあのようなフォルムのキャラクターを商品化しようと思えたのだろうか、と感じながらも、あのピンクのもやしはスッカリ私の心をガッチリつかんで持って行ってしまったのである。

また、ブラックマッペくんの他にも、尾道駅前のコンビニに並べられている「因島のはっさくゼリー」のパッケージにプリントされたキャラクター、「はっさくボーイ」の存在を忘れてはいけない。

広島ブラックマッペくんはどちらかといえば広島全域に存在するマスコットであるが、はっさくボーイを見ていると尾道特有のこのようなキャラクターを作成するのも無理ではない話なのではないか、と私は常々考えている。



↑(左)広島ブラックマッペくん (右)はっさくボーイ

ツイッターにてフォロワーの皆様に写真を撮ってお見せしたところ、私同様心を持って行かれた人が多数出た為、狙えない線ではないように思うのがどうだろう。

そして最後に、これは私自身の尾道のあり方に関する意見なのだが、確かに現在尾道は広島や福山と比べ、少々寂れ、人の少ない印象があるが、数多くの尾道の写真を見ていると、このままの町並みがこの尾道の魅力なのではないか、とも考えている。

このような一例として、島根県の石見銀山は世界遺産に指定された時、観光客が押し寄せた際に、今までの石見銀山の雰囲気を守るために、石見銀山エリアに入場制限を設けた。

きっと尾道が尾道としての観光名所という形で存在するためには、客に「また来たい」と思ってもらえる、リピーターの確保が必要になってくると思われる。その為になによりも一番大切なのは、「街全体が観光名所としての自覚を持ち、観光客を暖かく迎えるための心構えを持つ」ことが大事だと、私は考える。

参考 URL

- ・ 広島県尾道市の観光情報 <http://www.ononavi.jp/index.html>
- ・ もみじ饅頭(Wikipedia) <http://ja.wikipedia.org/wiki/もみじ饅頭>
- ・ おのみちや。(尾道市内の写真引用元) <http://www.ononavi.jp/onomichiya/>
- ・ Web ショップいんのしま(はっさくボーイ画像引用元)
<http://www.innoshima-shop.jp/index.html>

尾道市を変えるには？

近藤 匡晃

尾道市を変えるにはどうすればいいのかと考えたときに思ったことがある。例えば尾道大学を尾道駅付近にある福屋を高層ビル化してそこに移転するのはどうだろうか？これを思いついた理由として第一に尾道大学の立地の悪さがある。今の立地では尾道大学生をうまく生かしきれていないのである。遊びたい、買い物に行きたいと思っても尾道大学周辺にはお店がないのである。そもそも尾道大学周辺にお店を作ったところで春、夏、冬休みと合わせて4カ月以上も長期休暇があるのでお店側としても利益をあげて繁盛させるのは至難の業なのだ。結果的に今現在尾道大学周辺にお店は1件もないのである。(図1) 第2に大学までの交通手段の悪さがある。普通車免許がなければたいていはバス通学になってしまう。尾道大学には尾道駅からバスで20分弱、片道のバス賃は270円かかる。この大学の立地と便の悪さが尾道市でまずここを変えたいと思った理由である。

そこで尾道大学を尾道駅周辺に移した時の利点を考えてみたいと思う。まず欠点である交通の便の悪さが解消されると思う。それはもちろんのこと尾道大学が駅周辺にできる事でマンションやアパートが近隣にできることが想像できる。そうすると尾道大学生が駅近くに集合することになる。当然のことながら駅周辺の飲食店は繁盛するだろう。ただそれだけでは尾道市を変えることにはおそらくつながらないと思う。それは上記にも説明した通り尾道市に娯楽施設がないことがあげられる。(表1)

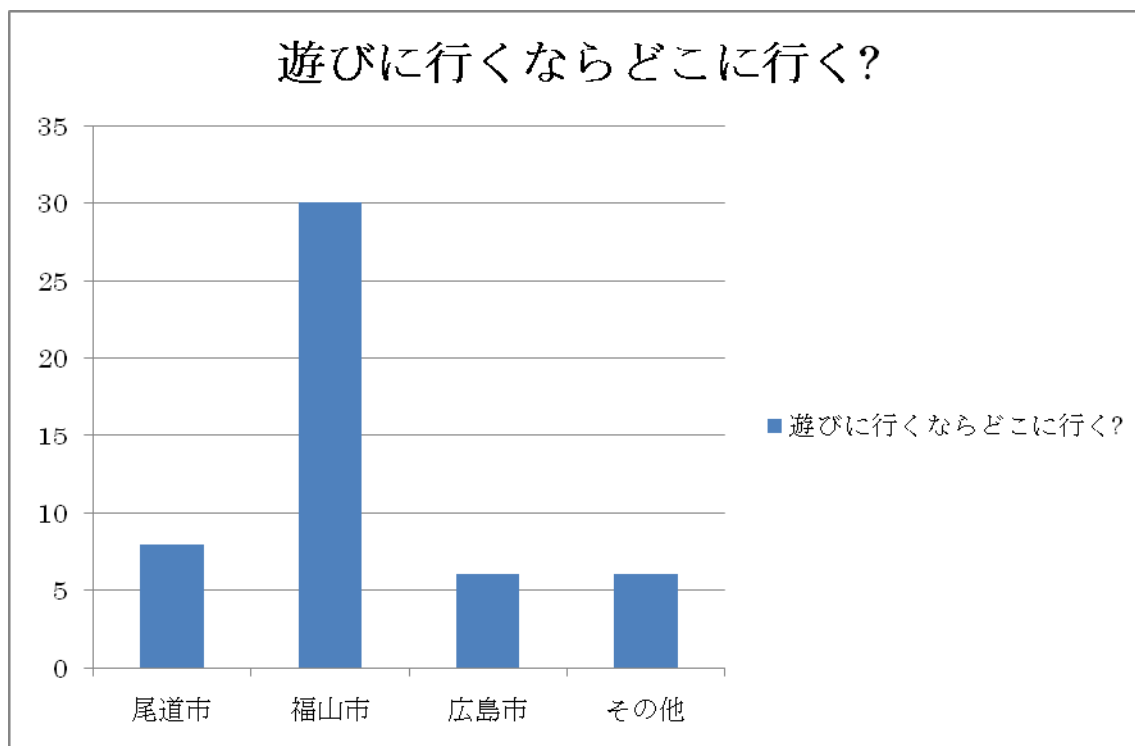


表 1

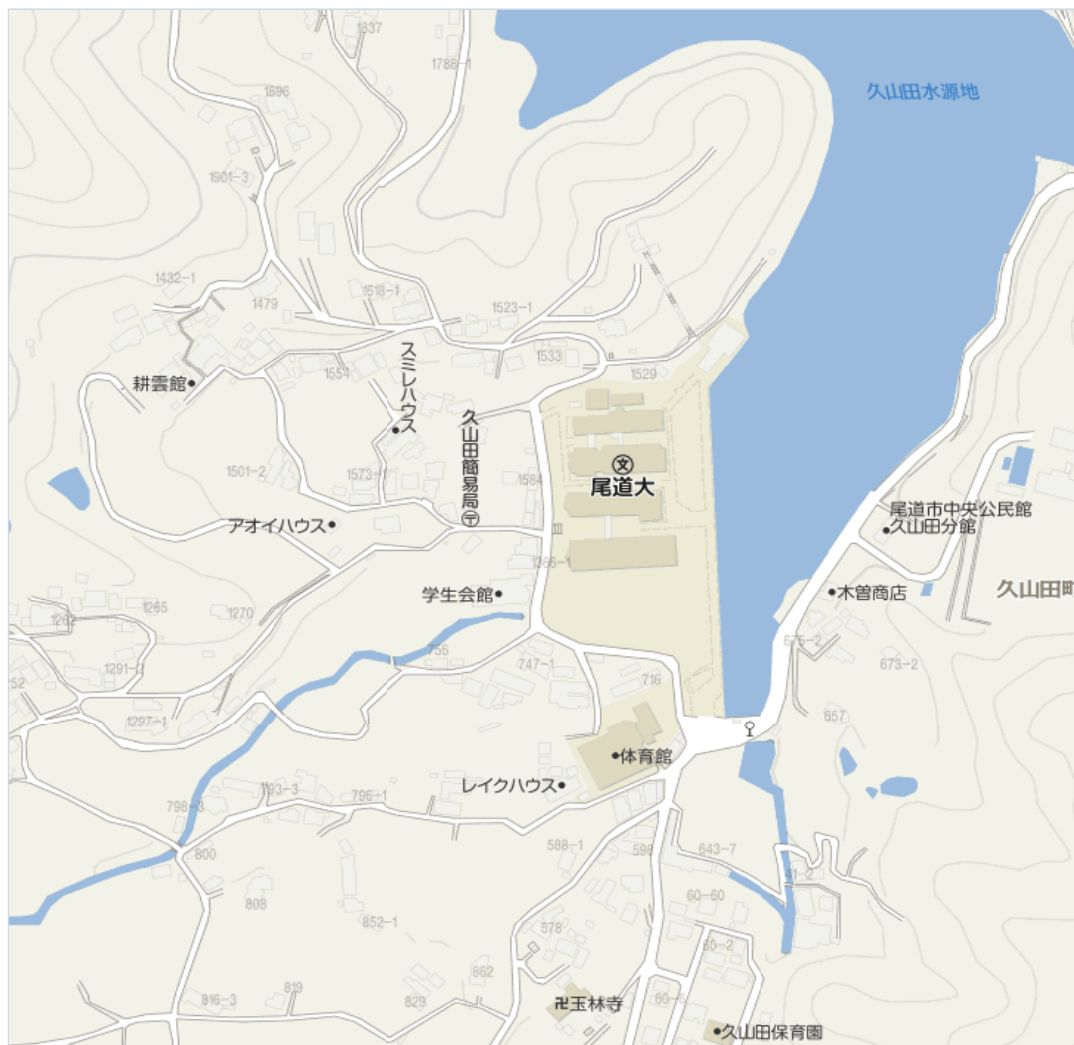
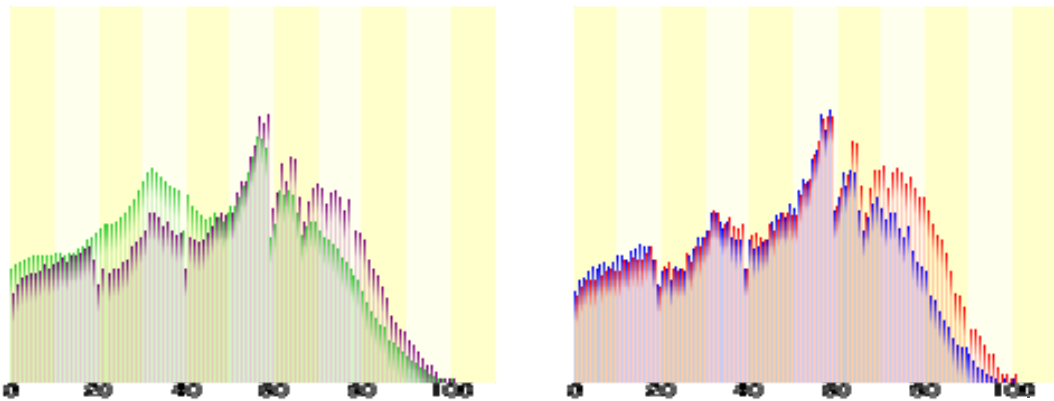


図 1

50人に遊びに行くならどこに行くと調査した結果、尾道市ではなく福山市が一番になった。なぜ尾道市ではなく福山市なのかと聞いたところ大半の方から尾道市に魅力を感じる事が出来ない。どこで一体遊ぶの？という意見が出てきた。尾道市に住んでいながら遊ぶとなれば福山へ電車や車を使ってまで行くのが一番だということがこの結果で分かる。いくら尾道駅周辺に学生が集まってもやはり遊ぶところがなくては意味がないということ如実に表している。そこでこの考えを打破する案として尾道商店街や飲み屋街の活性化を推進してみたいと思う。しかし今の尾道商店街に賑わいはあまり感じられず言い方は悪いがさびれた感はいない。やはり商店街は昔からずっと続いてきたという誇りと伝統があると思う。それが今の気風とマッチせずに学生を受け入れないのではないのか。やはりなじみの客だけでは商店街の活気を甦えらせることはできないと思う。このままでは尾道商店街はテレビで最近よく見るようになったシャッター街のようになってしまう危険さもあると思う。その危険をなくすにはやはり学生の商店街への取り込みが必要不可欠になってくると思う。そのためには商店街のカスタマイズが必

要になってくる。今の商店街は完全に若者向けというよりは主婦とお年寄りをターゲットにしていると思う。これをどのように変えていくか？キーワードは今一番尾道市を脅かしている福山市である。福山市にあって尾道市にないものそれは、おしゃれさ、雰囲気の良い、利便性の良さである。福山市で遊ぼうと思ったらカラオケに行ける、ショッピングに行ける、小腹がすいたら軽くご飯を食べることもできる。尾道駅周辺でこれらのことができるかといったらほぼできないだろう。福山市に対抗するためにはこのような障害を乗り越えなければならないと思う。それによって尾道のよさでもあるレトロな街並みをかなり変えてしまうことにもつながりかねない。しかしこのような根本的な改革をしなければ将来尾道はどうなってしまうのだろうか？そのための第一歩として尾道駅周辺の整備が必ず必要になってくると思う。ただ学生だけにやさしいではいけないと思う。地元住民にも住みやすい街並みが必要になると思う。表2を見ていただければわかるように尾道市は若者が少なくお年寄りが多いという統



紫：尾道市 緑：全国平均

赤：尾道市の女性割合

表2

青：尾道市の男性割合

計が出ている。この状況を変えることはなかなかできないことだと思う。ただよい方向に導くことはできると思う。お年寄りの住みやすい環境を整備するのだ。坂の町と尾道は言われている。これは若者にとってはあまり意識していないことかもしれないがお年寄りにとっては非常に大変なことだ。ただ尾道すべてをバリアフリーのすることは無謀である。でも自分の考えでもある尾道駅周辺の活性化の一環でここからでもバリアフリーをするのはどうだろうかと思う。尾道商店街が若者とお年寄りのどちらも楽しむことのできる場所に変える事が自分にとっての一番の理想である。そのためには商店街のすべてを若者向けにするのではなく今のままで変える必要のないところもある。例えば婦人服のお店などはそのまま維持したほうが良いと思う。さらに多くのお年寄りに来てもらうために学割ならぬお年寄り割引を実施すればよいのではないのかと思う。もちろん学割も実施する必要はある。そうすることでより一層商店街の魅力が増すと思う。

活気ある商店街ができれば学生が福山市にわざわざ行くこともなくなり尾道市が変わっていくのではと思う。そうなれば尾道市に本来ある千光寺をはじめとする多くのお寺や、映画の撮影場所にもなった豊かな自然、尾道を代表する尾道ラーメンやお好み焼きなどに匹敵する尾道

市の大きな魅力になるだろう。それは観光客だけの魅力ではない。観光の町として発達してきた尾道市だが普段から尾道市に在住している人にとってもやはり住みやすい街であったほうがいいに決まっている。人口が増加するためにも必要になってくると思う。やはり伝統や風土守るだけではゆくゆくはさびれてしまう。それを防ぐ起爆剤としてこのような考えがあってもいいのではと自分は思う。尾道駅から商店街へ最終的には尾道市全体が活性化することができれば「尾道市が変わる」という今回の目的が達成できるのではないかと考える。

まとめと感想

自分なりに尾道市についていろいろ考えてみた結果が上記のような意見になりました。尾道市は自分が思っていた以上に過去発展していた土地だということも分かりました。というか広島市の次に尾道市が位置していたなんて思いもよりませんでした。尾道市はについてさまざまなことを調べることは本当にためになりました。尾道大学に来て3年目ですが実際に商店街に行ったことは1, 2回しかありません。ただインターネットなどで調べてみて、商店街にはいろいろと興味深い場所もあって行ってみたいという気持ちにもなりました。今回は50人の人に意見を求めたのですが、その中に尾道市出身の人は1人もいませんでした。多くの方が福山市に遊びに行くといっていました。その中の何人かは尾道市のことをそもそも自分のように知らないから分かりやすく発達した福山市を挙げたのかもしれませんが。尾道市を変えるためにはまず尾道市のことを知ってもらうことから始めないといけないと思います。そのあとで自分が考えた意見がどのような反応をもらうのか気になります。ただ今回のことは尾道市の財政状況を全く省みていません。どれだけの投資をすれば商店街が変わるのか調べる必要があったのかもしれませんが。また世代別にどのような魅力を与えればいいのかより深く考える必要があったのかもしれませんが。多用な可能性の中から自分の意見を述べる難しさ、何かを良い方向に導くことの難しさを今回のレポートから知ることができました。

参考資料:Wikipedia

Yahoo! 地図

1. 初めに

尾道市は広島県内でも有数の観光都市として有名で、その景観から、映画や小説の舞台としてだけでなく、テレビCMにも多く使われている。尾道市の政策においても、観光都市としての機能は重視されており、政策目標の最初に取り上げられている。

それならば、尾道市を変えるには、というレポートにおいてもその意図に沿って、観光都市としての尾道市を見ていきたい。

尾道市を舞台をした作品

男たちの大和(佐藤純彌監督)

時をかける少女

テレビCM

サントリー ザ・プレミアム・モルツ 「お歳暮旅情編」(矢沢栄吉・2006年)

尾道市の特徴

尾道市は古くから海運による物流の集散地として繁栄しており、明治時代には山陽鉄道の開通によって備後地方最大の都市となった。ところが昭和 40 年代初頭、東隣の福山市に置いて工業都市化が進展し、いつしか中心都市としての機能は福山市に明け渡してしまった。現在尾道市では、古くから栄えたその街並みといまだに多くのこされる寺院を観光の名所としてPRし、観光による街の発展を目指している。

具体的には次にあげる名所・イベントが尾道市のPRポイントとなっている。

尾道市の観光名所 千光寺・しまなみ海道

メインイベント みなと祭り (4月)、住吉はなび (7月下旬 or 8月上旬)、べっちゃん祭り (11月)、尾道縦走 (3月) 千光寺の見どころは4月の桜。

尾道市を観光都市として他の地域にアピールするには、千光寺や瀬戸内海の島々だけではインパクトに欠けるのではないだろうか。事実、広島県下では有名な尾道市も県外、とくに東日本に行くと、その知名度は低い。他県からしたら、広島県の観光名所と言えば、宮島・原爆ドームなど、西側の観光地なのである。

尾道市に観光客を集めるには、尾道市を全国的に知ってもらうところからスタートしなければならない。

2. ひこにゃんと経済効果

そこで、尾道市も「ゆるキャラ」を作ることを提案したい。そのために、全国的に有名なゆるキャラ「ひこにゃん」の経済効果を見ていきたい。

ゆるキャラ→「ゆるいマスコットキャラクター」の略

イベント、各種キャンペーン、村おこし、名産品の紹介などのような地域全般の情報PR、企業・団体のコーポレートアイデンティティなどに使用。

近年「ゆるキャラ」はブームとなり、ひこにゃん以外にも奈良のせんとくんやまんとかんのように全国的に有名なキャラも登場している。

ひこにゃんの活躍

<彦根市の特徴>

- ① 滋賀県のほぼ中央に位置する、京都・大阪のベットタウン
- ② 江戸時代には、彦根藩の城下町・中山道の高宮宿・鳥居本宿の宿場町として発展
- ③ 江戸時代に城下町として栄えた文化的な街並みが彦根市の売り。

一方…①近畿・東海圏では知名度の高い町だが、総人口は、11万人程度。

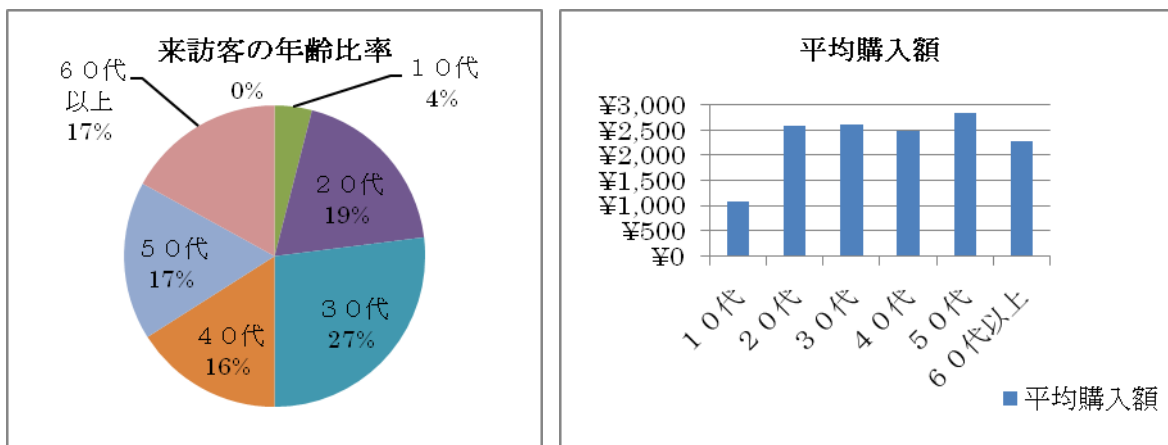
②交通アクセスの面では、大阪から在来線で約1時間半、新幹線は最寄りの米原駅に1時間2〜3本と、関西では有利と言えない。

このようなアクセス面の不利を抱えつつも、「**国宝・彦根城築城400年祭**」は約76万人の来場者数を記録した。これは実施委員会の入場者予想を20万人も上回っていたという。

この活況の“招き猫”となったのが、ひこにゃんだったのである。

<ひこにゃんの経済効果>

- ① 年代別の来訪者の比率は20～50代がほぼ同等（下図左）。
- ② その年代のひこにゃんグッズの平均購入額は2500円前後（下図右）。



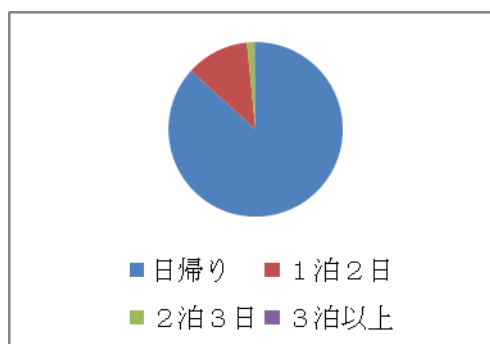
→「国宝・彦根城築城 400 年祭」の観光消費がもたらす様々な経済波及効果を推計すると、なんと総額約 338 億円にもものぼる。また雇用効果は 2,872 人にもものぼる。これは彦根市総生産の 7%にあたり、彦根市労働力人口の 5%にあたるといわれている。地方ほど深刻といわれる雇用状況だが、イベントの成功が雇用を増やす良い事例になった。

「国宝・彦根城築城 400 年祭」成功の要因については次のことが言える。

- ① 最近のレジャー傾向「安・近・短」（来訪者の 58%が近畿地方、25%が東海地方）。
- ② 地元を除いても初めての来訪者よりも、2 回目以上の来訪者のほうが多い。

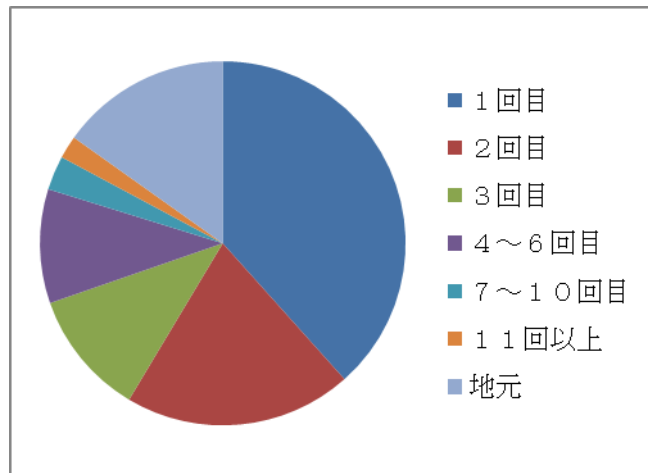
<来場者の滞在期間>

日帰り	86.8%
1泊2日	11.7%
2泊3日	1.4%
3泊以上	0.2%



< 来訪回数 >

1回目	38%
2回目	20%
3回目	11%
4～6回目	10%
7～10回目	3%
11回以上	2%
地元	15%



さらに、ふるさと納税でもひこにゃんが大活躍している。全国から寄附が寄せられており、事業の中でも「みんなのひこにゃん応援事業」への寄附件数が突出しており、ひこにゃんの活躍はイベントだけではないことが分かる。

3. 尾道でゆるキャラを定着させる

このように、ゆるキャラは地域の象徴となり他の地域へのPR効果がとても大きいものである。尾道市でもゆるキャラを作ることによって市民が盛り上がると私は考える。

ゆるキャラを作るに当たっては次の方法を提案したい。

- ① キャラクターおよびキャラクターの愛称を市民からの公募で決める。
市民が決めることで、市民の間での話題となり、口コミで広がる。
- ② ゆるキャラの発表は毎年恒例のイベントで発表する。
人が多く集まるイベント期間に発表することで、より多くの人に知ってもらえる。
発表後も、継続して尾道市で開催されるイベントに出ることで、尾道市に定着する。
- ③ キャラクターグッズを作る。
グッズが尾道市で売れば、その利益は尾道市にも還元される。
グッズにより尾道市を宣伝でき、新たな観光客が増える。

4. まとめ

ゆるキャラによって、観光客を集めることができ、尾道のいいところを知ってもらい、観光に来た人がリピーターとなって新たな観光客を連れてくる。

そのことによって、尾道の観光収入が増え、尾道市の財政に還元される。

尾道市の観光都市としてのインフラ整備ができる。

このような好循環が生まれることが期待される。

参考資料

彦根城築城400 年祭 経済効果測定調査 報告書

<http://hikone-400th.jp/news/2008/img/200803207_keizai.pdf>

月刊マガジンマネット 2009 年 10 月 「ご当地 “ゆるキャラ” のもたらす経済効果」

<http://www.ma-net.jp/archives/2009/10/post_266.html>

Wikipedia 尾道市／彦根市

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%BE%E9%81%93%E5%B8%82>>

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BD%A6%E6%A0%B9%E5%B8%82>>

彦根市ホームページ

<<http://www.city.hikone.shiga.jp/>>

画像

白地図→http://www.craftmap.box-i.net/sozai.php?no=0310_3

キャラクター→<http://www.yomiuri.co.jp/feature/yuru2009/>

現在の尾道市の方針としては、在の日本経済の状況は、一昨年来の危機的な状況を回避し、持ち直してきているものの、自立性に乏しいとされている。

物価は緩やかなデフレ状態にあり、依然厳しい雇用情勢が続くものとみられており、海外の景気の下振れ懸念などに留意する必要がある。

一方、地域経済については、景気の下げ止まりの状況が続く中で、輸出は持ち直しているが、中・小・零細企業にも円高や海外の景気の影響が及んで来るなど、今後の推移が非常に懸念されている。

本市においては、この様な状況を踏まえながら当初予算編成に当たっては、「持続可能な行政運営」を基本として取り組んだ。

平成21年度当初予算において、前年度比で30億円、5.2%の削減を行い、さらに人員削減や基本給のカットによる人件費の縮減にも取り組み、尾道が尾道らしく輝き続けるための一歩を踏み出した。

平成22年度予算では、さらに大きな一歩を踏み出し、持続可能な行政運営に向けての本格的なスタートを切った予算と位置づけている。次代を担う尾道市の子供たちのために、必要な施策を積極的に展開していくとともに、持続可能な予算編成を目指した。長期的な財政見通しに立つと、地方交付税の一本算定を迎える平成27年度以降の厳しい財政状況を乗り越えるための体制を整えるため、予算規模を縮減し、経常経費を削減して行く必要がある。とりわけ、市債の発行を抑制し公債費を減らし、予見可能性の高い財政運営を確立し、将来の市民サービスを保障していく事が肝要である。

この予算では、投資的経費の抑制を図りながらも、維持補修経費には出来る限り配意した。また、「地域医療体制の構築・維持」と「健康文化の創造」を基本理念とする「地域医療を守る条例」を提案している。この基本理念の下に瀬戸田診療所建設や救急医療対策などを行なう。子供たちが元気で明るく育つ環境づくりに向けて、ブックスタート・プラス事業、休日保育や5歳児相談などの実施、国民読書年にちなみ保育所・幼稚園の図書の実施などを行い、今後、「尾道つくしプラン」として、就学前教育を充実させていく。

さらに、地域産業に元気が出る施策として、援農テグー隊事業や元気な水産業支援事業など農林水産業の活性化や、地域商業の活性化を図ると共に、NHK朝の連続テレビ小説「てっぺん」の舞台として、市を挙げて観光の振興をはじめ「てっぺん」を活かしたまちづくりに取り組み、知名度の更なる向上や「おのみち」のブランド力の強化を図る。と言ったようなことを示しており、目標の都市像として設定した次の7つの政策の柱に沿って、現在の事業実施を図っている。

1 多様な交流の輪が広がるまち

地方分権の時代、都市間競争の時代、また人口減少の時代に対応していくためには、まちの個性や特色を活かしながら、交流人口を増やし、まちの賑わいを高めていくことが重要となる。

そこで、(仮称)尾道「てっぱん」推進協議会を設立し、尾道の個性を活かした交流促進を図るとともに、外国語表記の案内板や観光パンフレットの作成など市外から来訪しやすい環境づくりを進めていくこととする。

2 活力あふれる産業が育つまち

まちに活力をもたらす、豊かな市民生活を支える土台を築くためには、経済の安定的かつ持続的な成長を図っていくことが重要となる。

そこで、「瀬戸内の十字路」としての拠点性や尾道のブランド力を活かし、援農テグー隊事業、元気な水産業支援事業や地域商業活性化事業補助など産業が活発で、多様な働く場が充実したまちづくりを進めていくこととする。

3 尾道の持つ感性の豊かさが誇りになるまち

まちにゆとりと潤いを与える芸術・文化を創造していくためには、そこに暮らす人たちの感性の豊かさと芸術・文化を身近に親しめる環境づくりが重要となる。

そこで、文化財保存修理、女流アマ囲碁都市対抗戦の開催や継続して音楽によるまちづくりなど尾道に培われてきた芸術・文化の次世代への承継とともに、尾道らしい景観と良好な環境の保全と創造を進めていくこととする。

4 市民と市が協働し、ともに創るまち

住民自治の確立と自立した地域社会を実現するためには、市民自らが自治の主体であることを認識し、市とともにまちづくりに取り組むことが重要となる。

そこで、市民提案事業を継続実施し市民と市との信頼関係のもと、協働のまちづくりを進めていくこととする。

5 心豊かに育ち、学び高めあうまち

子どもたちが将来を担い、大きくはばたいていくためには、基礎的な学力の定着を図るとともに、豊かな人間性と生きる力を高める育むことが重要となる。また、市民一人ひとりが輝くためには、それぞれに活躍の場があり、自らの能力を高めることに生きがいを感じることも重要となる。

そこで、就学前から大学までの教育の充実を目指して、尾道大学校舎建設設計、向東小・中学校の給食調理場建設の着手や尾道教育さくらプラン2を継続実施するなど学校・家庭・地域が協力して、夢と志を抱く子どもたちを育てていくとともに、市民が生きがいを持って活躍できる場の創出を進めていくこととする。

6 暮らしの安全性と快適性が高いまち

尾道に住み続けたい、住んでみたいと思える魅力あるまちとするためには、まちの基本的な機能として、防災・防犯体制や生活基盤が整っていることが重要となる。

そこで、自主防災組織育成補助などにより市民・地域と市が総ぐるみで暮らしの安全・安心を確立するとともに、ポンプ場の整備による浸水対策などを実施し日常生活の快適性を高めていくこととする。

7 子育てや長寿を楽しみ、誰もが幸せに暮らせるまち

子育て世代や高齢者、障害を持つ人たちが生き活きと暮らしていくためには、一人ひとりの自立を基本に地域で助け合いながら、健康に暮らしていくことが重要となる。

そこで、休日保育や5歳児相談などを「尾道つくしプラン」として実施することで就学前教育の充実を図り、瀬戸田診療所建設や救急医療対策などの地域医療の充実などにより安心して子どもを産み育て、高齢者や障害を持つ人たちが不安なく地域社会で生活でき、誰もが健やかに暮らせるまちづくりを進めていくこととする。

私の意見としては、福祉に対する政策が多く、老人の多い地域そうだという印象を得た。あまりこれから明るい未来が広がっているような印象は受けなかった。

高齢者や子供に対する政策が多いことで、今の民主党の政府のようにどこかぼやけているようにも感じた。こんな風にしとけばいいのでしょ的な感じがした。

カンブリア宮殿やガイアの夜明けに出てくるような斬新であったり、挑戦的であったりするような政策があってもいいのにと、尾道に住んでいながらも住所をうつしていない自分としては思う。

私なら、

支出を抑えるための変化としては、様々な業務の電子化を進めていくことで作業の効率を上げていくことができると思います。公務員の問題としてよく問題あるとされているものとして、作業がとても効率が悪かったり、窓口の人の態度が悪かったり、そのようなことが尾道市で起こっているのかどうかはわからないのですが、そういったことが起こっているのであれば給料をカットすることは職員の方に影響し逆効果なのではないのかと思うので、よりサービスの向上をシステムの面からも目指していくことも大切であると思う。

あと、私は市議会議員の人に何かしていただいたことがないと思っているせいなのかもしれませんが、市議会議員の方は現在34名おられるのは、そんなに必要なのかと思い、どうにでもできるのであれば、6人くらい減らそうと思います。

さらに、おのみち映画資料館や歴史博物館などを統合したりして運営をスリム化するか、もっと言うなら閉めてしまってお金がかからないように展示するか。

今は、石を蹴れば老人に当たるくらい高齢者は珍しくもないので、過保護に保障していかず、もっとかかる費用を減らしていく。

地域活性においては、

〇〇のまち尾道と言いついで、結局売りが何なのかがぼやけてしまっているので、これと言ったものを作って、それに色んなものを無理やりこじつけてお土産やフェアを開いていけばいい

と思う。お寺がたくさんあるのは分かるけれど、そのお寺についてのエピソードやいわれなどを知ってもらえるようなものを作ればいいと思う。

御当地のキャラクターとか作って、地元のテレビ局でそれについてのアニメなどのローカルな中で世界を作り、さらに大きなメディアに取り上げられるまで頑張ることもしてみる。

あと、尾道は新鮮な魚が売りだと様々なホームページサイトに書いてあるのですが、尾道の駅を出たらすぐに造船所が見える街で新鮮な魚というのは、あんまり美味しそうじゃないと思うのは私だけなのだろうか。

私が尾道市に来て2年になる。県外から尾道市にやってきて尾道市を見てみると、尾道市市民に比べ尾道市を客観視することができる。

昔から尾道市に住んでいる者ではないが、その分、自分の故郷の市との違いを発見することができると思う。

今回、尾道市についての問題点をもとに、いくつか例を挙げて尾道市をこう変えるべきという私の考えを述べようと思う。

私は尾道市に住み、尾道大学に在籍している。尾道大学にもスポットを当て今後の尾道大学についても考えていこうと思う。

昭和21年に尾道市立女子専門学校を母体として、昭和25年に尾道短期大学となる。その後、国際化、情報化、高齢化の進展や女性の参画参加の拡大など、社会情勢が大きく変化し、市民ニーズも多様化する中で、尾道市内唯一の市立高等教育機関である尾道短期大学の整備が重要視され始めた。

そして、尾道市は平成13年に4年制の「尾道大学」へと変貌を遂げた。

学生の受け入れ体制、施設整備、芸術文化のまち尾道としての伝統を受け継ぎ、質の高い芸術文化を提供するとともに、少子高齢化、高度情報化、国際化に対応することが課題となってきた。特に、少子化は大学間の競争をさらに過熱させるものとなった。このことから、大学は全体的な大規模な見直しが必要であると思う。

国立大学も私立大学も、さまざまな工夫をこらして生徒の確保に力を注いで大学づくりを行っている。公立大学は、福祉看護に力を入れ、法人化をはかっている。

三位一体により、市財政は極めて厳しい状況となった。大学運営や大学活動には財源が必要である。私はその大学の運営を支える財源を市にばかり依存するのではなく、大学の自立と自律を図るためにももっと外部資金が必要だと考える。産学連携の受託事業だったり、寄付金の取り組みをしたり、企業と提携したりすることも可能ではないだろうか。尾道大学というものは、尾道市民全体のものであり、尾道市が支えていくべきものだと私は考える。

その外部資金こそが尾道大学にとっての政策課題であると考えます。尾道市の活性化は、尾道市全体が抱える地域問題ともいえるのではないだろうか。

尾道大学はその恩恵を受けるために地域活動に積極的に参加し、地域の行事や尾道の知名度

を上げるような住民として、尾道大学生として、そして尾道のまちづくりの主役にもなるような活動をやっていくことで地域貢献に繋がっていくと思う。

やはり尾道大学は、市民の支持が必要不可欠である。学内外の活動に積極的に取り組むことで地域住民に対するイメージアップにつながる。イメージを与えることは存在感を出すということである。

イメージというものに対して最近気になることがある。それはタバコである。それは尾道市だけではなく全国各市町村が今、抱える問題だと思うが尾道市も喫煙に対して敏感に反応しているようだ。

2006年7月、尾道市庁に喫煙室が設けられ、尾道市に尾道市医師会から全面禁煙を求めた申し出があつての実施であった。

平成8年、ポイ捨て禁止条例・尾道市環境美化に関する条例が制定されたが、この条例には罰則がない。

広島市ポイ捨て等の防止に関する条例が2003年10月から制定。2004年からは美化推進及び喫煙制限区域において、罰則を適用した。

これは2002年に東京都千代田区が制定し、各市町村自治体に広まっていった。

このように喫煙に対する世の中の視線は月日を重ねるごとに厳しいものとなっている。とくに最近は全国の大学が喫煙への関心が高まり、大学構内での喫煙を禁止にしている大学も増えてきているようだ。

だいたいの大学は喫煙所が設けられ、尾道大学もその一つである。しかし喫煙所を設けても、喫煙所以外でタバコを吸っている生徒をよく見かける。また、歩きタバコをやっている生徒や喫煙所以外で吸う教授も数多く存在する。今、ただでさえ喫煙に対する世の中の意見が冷たい中、もし尾道大学生が尾道市民にそういう場面をみかけられたらどうだろうか。確実に尾道大学に対するイメージは下がってしまうだろう。

自分自身タバコを吸うので、より喫煙に対する大学側の行動に敏感になってしまう。全国の有名大学が構内での喫煙を禁止にしていく中で、尾道大学はどのように対応していくのだろうか。尾道大学がタバコに関心を向け、地域住民に良い印象を与えることが一番にイメージアップに繋がると私は思う。そしてそれが地域活動に繋がっていくことが外部資金への近道ではないだろうか考える。

尾道大学は、尾道市にとって尾道市民のシンボルであり誇りあるものであって欲しいと考える。私なら尾道市を変えようと考えたとき、尾道市唯一の高等教育機関である尾道大学から改革をしていく。なぜならば、大学というのは全国の高校に名前を知ってもらえる機会が多い。また、近隣郊外に対しても名を知られるのが手っ取り早いからである。

そして尾道大学から変革していくとき、まずは地域貢献や地域活動にもっと積極的に参加していくべきだと考える。

それが外部資金に繋がり、尾道市全体が活性化していくと思う。

尾道市の経済発展を考える

都築 亮平

下の表は平成22年4月30日における尾道市の人口表である。また2ページ目のグラフは尾道市と全国の年齢別人口分布、尾道市の年齢・男女別人口分布である。この2つからわかることは、尾道市は全国的に20代～40代の若い世代が少なく、男性よりも女性のほうが多いということである。尾道の経済を発展させるにはまず若い世代を増やし経済を活性化させれば良いのではないかと思う。

住民基本台帳町別世帯人口表

平成22年04月30日現在

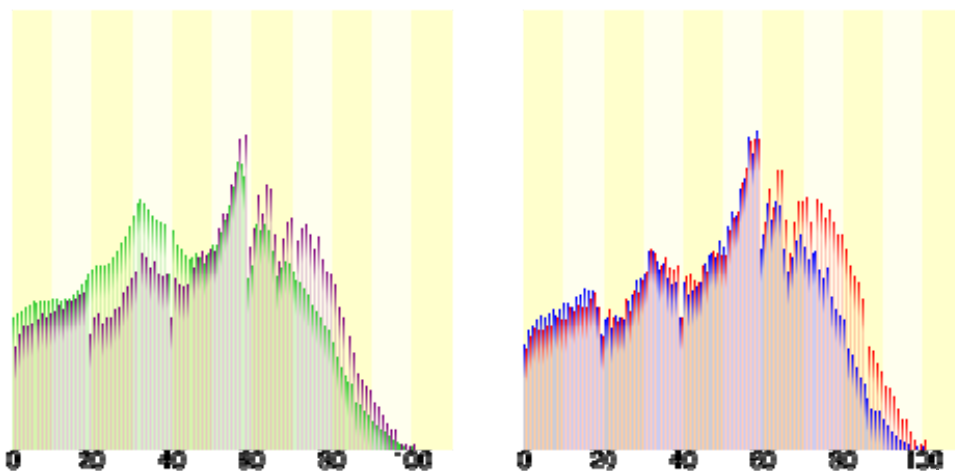
尾道市市民生活部市民課

地区名	世帯数	人口(男)	人口(女)	人口(計)
山崎町	1,700	1,852	2,020	3,872
尾崎本町	228	195	217	412
尾崎町	15	15	19	34
八原一丁目	218	173	239	412
八原二丁目	294	206	283	489
八原三丁目	229	175	239	414
東八原町	358	306	372	678
西八原町	500	427	517	944
院後町	457	435	467	902
八原町	542	583	639	1,222
十四日元町	91	82	116	198
長丘一丁目	392	330	394	724
長丘二丁目	411	327	462	789
長丘三丁目	454	483	537	1,020
十四日町	78	76	98	174
土堂一丁目	249	235	277	512
土堂二丁目	172	164	220	384
東土堂町	221	175	223	398
西土堂町	219	177	238	415
東瀬所町	131	98	138	236
西瀬所町	245	191	293	484
新長一丁目	424	404	474	878
新長二丁目	160	142	165	307
古長町	430	442	532	974
正長町	277	279	310	589
福後町	227	250	248	498
吉野町元町	414	368	429	797
神保町	388	420	475	895
東元町	392	356	400	756
神田町	347	391	459	850
手崎町	326	293	393	686
宮崎町	403	396	480	876
日比崎町	426	427	473	900
吉和町	502	582	647	1,229
三軒家町	441	361	471	832
元崎町	554	596	730	1,326
東原東一丁目	367	333	393	726
東原東二丁目	601	590	616	1,206
東原西一丁目	342	338	398	736
東原西二丁目	335	384	395	779
東原北町	440	472	557	1,029
西原北町	390	423	474	897
藤見町	102	104	125	229
坂町	214	240	282	522
門田町	810	1,039	1,132	2,171
東原町	3,635	4,083	4,367	8,450
八山田町	497	490	575	1,065
美ノ瀬町	3,447	4,303	4,505	8,808
木ノ庄町	949	1,200	1,250	2,450
原田町	617	634	785	1,419
西瀬町	670	917	945	1,862
高瀬町	4,537	5,719	5,938	11,657
百島町	349	262	359	621
渡崎町	1,448	1,740	1,959	3,699
向東町	3,992	4,619	5,056	9,675
東尾道	19	23	21	44

地区名	世帯数	人口(男)	人口(女)	人口(計)
平原一丁目	312	446	482	928
平原二丁目	258	408	425	833
平原三丁目	242	387	358	745
平原四丁目	129	192	168	360
新高山一丁目	206	227	262	489
新高山二丁目	438	510	561	1,071
新高山三丁目	291	389	395	784
長者原一丁目	1	1	0	1
長者原二丁目	0	0	0	0
養瀬町	2,897	3,606	4,093	7,699
向島町	6,410	7,303	8,160	15,463
向島土生町	2,652	2,550	2,864	5,414
向島田代町	1,775	1,907	2,045	3,952
向島三庄町	2,121	2,137	2,218	4,355
向島船通町	50	54	55	109
向島船通町	86	76	89	165
向島外通町	214	230	247	477
向島中庄町	2,196	2,682	2,790	5,472
向島大庄町	378	365	413	778
向島重井町	1,504	1,818	1,857	3,675
向島原町	357	349	397	746
向島洲江町	345	384	400	784
瀬戸田町	3,892	4,320	4,676	8,996
合 計	63,510	70,666	77,781	148,447
前月合計	63,313	70,664	77,734	148,398
前月差引増減	197	2	47	49
前年同月	63,257	71,089	78,219	149,308
前年差引増減	253	-423	-438	-861

尾道市外国人登録者数

男	女	計
1,476	611	2,087



■紫色 — 尾道市
 ■青色 — 男性
 ■緑色 — 日本全国
 ■赤色 — 女性

若い世代を増やすためには教育環境を良くする、また尾道で働きたい人へのしっかりとした就職支援などが必要だと思います。

現在尾道市には高校が11校と大学が1校あります。特に大学は県外からも多くの若者を呼べるチャンスなので、尾道市として今よりも多く教育関連に投資をするなどして若者が多く集まる街にする機会として生かすべきだと思います。

尾道市は老人の人口が多い街である。だから予算も老人福祉関係が多くなってしまふのはしかたないと思うが平成22年の予算を見てみると似たようなものや、削減できるのではないかと思うものがある。

例)

地区老人クラブ事業運営補助 7,014 (7,476)

高齢者生きがい対策事業委託 4,600 (4,900)

敬老祝金品支給 8,143 (6,932)

現在の尾道市の状況を考えればこういったことに予算を費やしてもしかたないと思えるがこれからより経済を発展させるためにはこういった小さな予算も他に回していかなければいけないと思う。

尾道市は旧来より北前船が寄港するなど港町・商都として栄え、戦前までは広島市に匹敵す

る程の経済力を持っていたと言われて、銀行の本店や企業の支店なども存在していた。また水運に恵まれている立地から古くから尾道・向島・因島に造船所が存在し商都のみならず工業都市の一面も持っており、特に因島は造船景気で栄えていた。しかし、近年は造船業の斜陽化により衰退の一途を辿りつつも新たに「瀬戸内の十字路」として交通条件の良さを利用し、工業団地の造成により他産業の誘致を進めている。

産業別 15 歳以上就業者数 (平成 17 (2005) 年国勢調査)			
	旧尾道市	旧御調町	旧向島町
総 数	42, 184人	3, 756人	7, 553人
第1次産業	1, 754人 (4. 2%)	546人 (14. 5%)	850人 (11. 3%)
第2次産業	13, 473人 (31. 9%)	1, 114人 (29. 7%)	2, 449人 (32. 4%)
第3次産業	26, 605人 (63. 1%)	2, 049人 (54. 6%)	4, 201人 (55. 6%)
分類不能の産業	352人 (0. 8%)	47人 (1. 2%)	53人 (0. 7%)

この表は産業別 15 歳以上就業者数を表したものである。かつて尾道を支えていた造船業は現在大変厳しい状態になっている。尾道もこれからはサービス業といった第3次産業に力を入れていかなくてはいけないと思う。尾道市が行っている就職事業に「尾道市ふる里就職促進協議会事業」というものがあります。

尾道市ふる里就職促進協議会事業

尾道市ふる里就職促進協議会は、本市及び市外の就学者並びに県外就労者の地元就職の促進と定着化を図り、地域の活性化のため各種事業を行っています。

こういった就職に関する事業はもっと増やしていくべきだと思うし、就職が厳しい現在、尾道市は高校卒業してすぐに働く人が多いと聞きます。そういった人たちへの支援を充実させ、尾道で働く若者を増やすことがとても重要だと思います。

また尾道は名所・レジャースポットが数多く存在し、多くの観光客を招致することができると思います。

千光寺などのお寺が数多くあったり、坂の街としても有名です。また映画やドラマの舞台となることも多く、そういったたくさん観光スポットがある街としてももっともっとアピールしていき、観光客が増えれば経済もどんどん活性化していくと思います。



千光寺より市街地東部を眺める

私は尾道に来て三年目になるが、実はあまり尾道について詳しくない。今回のレポートはインターネットを使って知りえた情報をもとに進めていく。まず尾道の経済や経営についての分析から行う。【2005年から、日本の人口減少は始まっている。しかし、尾道市は1975年にすでに減少が始まっている。経済が右肩上がり状態では、人口は規模の経済や、教育水準の高い日本の人口の技術進歩創出効果等により、経済は加速度的に成長したが、現在は逆の結果となっている。一方、財政赤字による三位一体の改革や東京等東関東圏への人口集中により、地方は過疎地や限界集落が大量に発生している。また、厳しい財政の影響で、市町村合併が行われ、分権型社会、自己完結型自治体への転換や定住自立圏構想が唱えられている。2008年6月11日(水)に尾道大学の公開講座「おのみち今昔」では、2007年も開催されており、その際、尾道大学の洲浜源一教授(当時)が尾道市の現状について講演を行っている。洲浜の説を要約すると：尾道市は、石見銀山の積出港であり、北前船の寄港地、豪商の自治都市である点、尾道から全国への情報発信が行われていた点、第六十六国立銀行の設立、尾道商業会議所の設立、さらに尾道市の発足(明治31年、人口2万人)がなされたとの7点が挙げられた。一方、商業・企業の特徴では御調の医療福祉、瀬戸田の農業が盛んであり、製造業では、造船業と日東電工(プラスチック)が重要で、特徴的とされている。また、2005年度の一人あたり所得は14都府市中8位だったが、成長率は1位、出荷額はプラスチック製品に特化していると述べている。さらに、地域ブランド指数は、県内では広島市につづいて2位、しかし買物の10%強が、外部の都市へ流出しているという。また、コンパクトシティとしては、①「景観地区」の中央商店街の人口増は無理である。それゆえ、若者の広場、緑地、歩行者空間、映画館等の賑わいの拠点作りが必要という。一方、学生は映画館とデパートを作ってほしいという要求が強いという。②国道184号線の沿線の南部地域と国道2号線の西御所町以西は「街なか居住」の充実、強化が必要であり、医療・福祉・文化の立地、誘導と交通機関、連結道路の設置が必要であるという。③また、尾道は林間地区、中心地区(尾道地区)、島嶼地区とに区別されるが、地区ごとに「コンパクトシティ構想」を計画することが重要であるといわれてきた。さらに、道州制では中国・四国の9県のへそは尾道近辺の百島であり、尾道は中心になる都市であると述べていた。(http://www.ac.auone-net.jp/~mitoshi/newpage1.htmlから抜粋。)]

次に下記の資料を見ていただきたい。尾道市経済動向調査の結果報告である。

【平成21年12月期の景況】

()内は前回調査(平成21年9月期)の割合

	好転	横ばい	悪化
全業種	6.8% (3.4%)	33.9% (55.2%)	59.3% (41.4%)
製造業	6.3% (0.0%)	37.5% (41.2%)	56.3% (58.8%)
非製造業	7.0% (4.9%)	32.6% (61.0%)	60.5% (34.1%)

平成21年12月期 生産額・売上額

()内は前回調査(平成21年9月期)の割合

	増加	普遍	減少
全業種	12.7% (7.7%)	20.0% (40.4%)	67.3% (51.9%)
製造業	25.0% (18.8%)	18.8% (25.0%)	56.3% (56.3%)
非製造業	7.7% (2.8%)	20.5% (47.2%)	71.8% (50.0%)

尾道市の生産額・売上額の推移を見てみても平成19年12月からD I値(各調査項目についての判断の状況を示す。ゼロを基準として、プラス値は景気の上向き傾向(「良い」)をあらわす回答の割合が多いことを示し、マイナス値は景気の下向き傾向(「悪い」)をあらわす回答の割合が多いことを示す。)は0.0を下回り現在では-6.0近くまで下がっている。尾道市の景況感の推移も同様19年6月からD I値は下がり続け-5.0にまで下がっている。(http://www.onomichi-cci.or.jp/index.php?page=doukouから抜粋)

以上の点を踏まえ、経営分析を行う。

第一に気になるのは、「地域ブランド指数は、県内では広島市につづいて2位、しかし買物の10%強が、外部の都市へ流出しているという。」の文章である。「学生は映画館とデパートを作ってほしいという要求が強い」この文章と合わせてみる。私は短いながらも2年間尾道に住んできて、この文章を見ても納得である。結果から言うと尾道市は若者にやさしくない街なのである。尾道大学学生のほとんどは服を買うときは、福山市か広島市に行き買って買う。私もその一人だ。尾道で服を買おうとはあまり思わない。東尾道にあるユニクロやショック(古着屋)が唯一買っていいと思う。が、尾道大学は久山田にあり、栗原や則末に住んでいる学生にとっては、わざわざ東尾道に行くのであれば、福山に行ってしまうのである。さらにアバターなどの3Dの映画など、映画の人気の高まっているこの時期に、尾道で映画を見ようとも思わない。3D映画は何か特殊な技術が必要だろうから仕方ないと思うが、放映している映画はほぼすべて若者に人気の映画ではない。せっかく映画館が復活したのに、若者にとってはまったく

無意味といっても過言ではないと私は思う。さらに尾道市は観光地である。消費を狙うにはやはり観光客を狙うしかない。私は居酒屋でバイトをしているのだが、観光客から帰り際にこんなことを言われる「いまから食べられる尾道ラーメン屋さんはないですか」と。私は「いま10時ですから、飲み屋街のほうまで行かないと空いているお店はありません。1kmくらい歩かないと行けませんね。」と。かなり認知度の高い尾道ラーメンなのだが、夜10時にはほぼすべての尾道ラーメン屋は閉まってしまうのだ。私は観光客が尾道に落とそうとしているお金を尾道市は拒否しているようにも見えてしまうのだ。

第二に「**中国・四国の9県のへそは尾道近辺の百島であり、尾道は中心になる都市である**」である。尾道には、しまなみ海道、山陽道、そして近日島根へ抜ける高速道路も尾道にできるそう。まさに中国四国のへそ、西日本のへそと言ってもいいだろう。この恵まれた土地を生かしているだろうか。しまなみ海道に関してはかなり良い感じではある。サービスエリアでのお土産も充実しているし、多田羅大橋などの宣伝も大きく取り上げている気がする。バイクや自転車でしまなみ海道を渡れるというのも面白い。バイク好きの人にとっては、なかなかの有名スポットらしい。問題は、山陽道だ。というよりも山陽道としまなみ海道という交差点を活かしているのかどうかである。尾道にしかない。尾道でしかあじわえないようなものが、ないのではないだろうか？ 現在、四国は観光地として注目を浴びている。本州から四国に観光に行く人たちはかなりの経済効果をもたらすだろう。尾道で一泊してから、四国へ行くという人もよく聞く。しかし、先ほども述べたが、尾道ラーメン屋はすぐに閉まってしまう。かなり歯がゆい気分だ。

次に生産高、売上額、景況などを見ていく。最近では、製造業は好転の兆しが見えてきているのだが、非製造業がかなり落ち込み、全業種でもさらに悪化している。非製造業の中では、建設業、小売業、運送・サービス業が大幅なマイナス値を示し、特に、小売業、運送・サービスは厳しい状況である。逆に食品、造船は回復しつつある。

全体的にみると、尾道市は人を住ませない、買わせない、寄せないように知らず知らずのうちにやっているのである。

ではここで私が尾道市長になった場合、私なら尾道をこう変える。

まず、現在尾道ラーメン屋として店舗を開いている店すべてに、土、日、祝日2時まで店を開けるならば、給付金を出すことを約束する。それでもあかない場合は、それらすべてを取りやめ、市で経営する尾道ラーメン店を開く、その店は駅付近で午後9時から開店し、3時閉店で行い、人件費を削減するとともに、居酒屋で飲んだ人たちをターゲットとする。もちろん、電車で帰る人やホテルに泊まる人、観光客を主なターゲットとする。

次に大きなデパートを作る。中途半端に作ってはいけない。広島市のパルコ並みに大きなデパートである。そこには若者向けの服などを主な品物とする。さらに従業員向けのアパートを作るなり、空き部屋など、とにかく尾道市内に従業員を住ませる。アルバイトとして尾道大学生を雇ってもよいだろう。さらにシネマ尾道をそのデパートに移転させる。そして若者向

けの映画を放映する。放映回数は少なくとも良い。買い物もできて映画も見られるようにすることができれば、良いのだ。このデパートのターゲットは若者。向島などの島民や尾道内の学生、さらに広島市のパルコ並みのデパートであれば、三原や西条からも狙うことができる。場所は新尾道付近を推薦する。場所は駅付近がやはりいいだろう。中高生も来ることができるし、向島からも船一つで来ることができる。そうすることによって必ず尾道は商業の街として再復興するはずだ。

尾道市の財政について

土井 強平

私は尾道市の財政について、また『自分なら尾道市をどう変えるか』ということについて考えた。

尾道市の財政を考える前に、尾道とはどのような市なのかを理解しておく必要があると思う。まず尾道市とは、14市5郡(9町)から構成される広島県中の1都市である。また、786市757町1841からなる日本の自治体の中で、180位(県内5位)となる150,225人の人口を抱える都市である。

ここで尾道市の特筆すべき全国的にも際だった指標をいくつか挙げると、

- ・ 第一次産業就業者数： 全国で93位(県内3位)の5,587人
- ・ 卸売業・事業所数： 全国で122位(県内4位)の512人
- ・ 小売業・事業所数： 全国で125位(県内4位)の1,891人
- ・ 農業・産出総額： 全国で203位(県内3位)の1.084千万円
- ・ 総人口は全国： 全国で180位(県内5位)の150,225人

上記5つが挙げられる。

また、尾道市は古くから続く造船の町で、農業や漁業、かまぼこ佃煮等の海産物加工、観光業(観光名所：国宝重文名勝など多数の浄土寺、三重塔が国宝の向上寺、重文多数の西国寺、おのみち映画資料館など)も盛んに行われている。

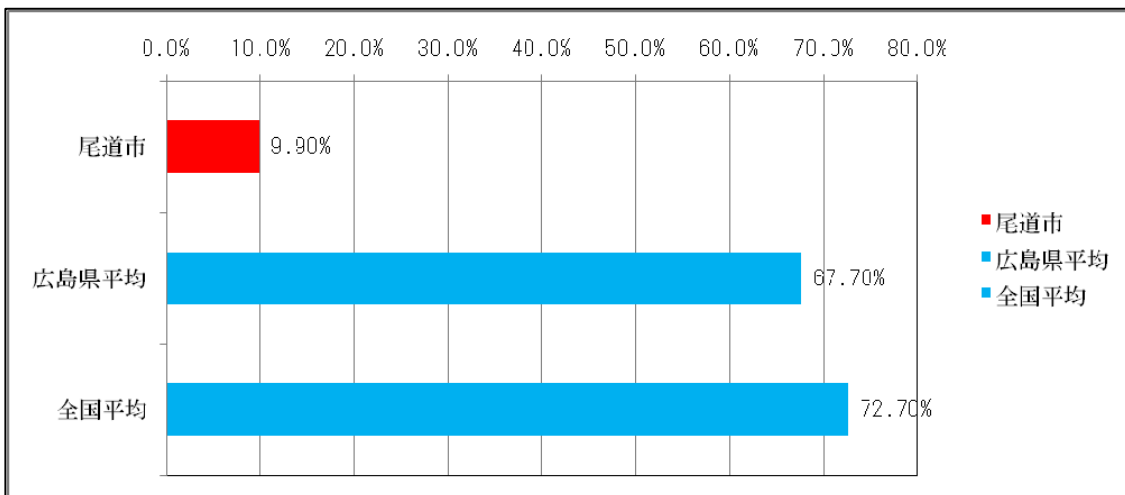
尾道市にはこれ程までの名所や、素晴らしいことがあるのだ。

しかし、私がまず考えたことは、下水処理があまりよくないことだ。

これ程に人口が住んでいる都市ならば、下水処理は完備されていて当たり前だと思っていた。

しかし、尾道市には完備されていなかったのだ。

<図1>



この図から分かるように、尾道市の下水道普及率は全国的にみても、広島県内的にみても、誰しもが見て明らかに小さいと言ええる。

なぜ尾道市はこんなにも普及率が悪いのかという点に対し、私は2つの原因があると考えた。

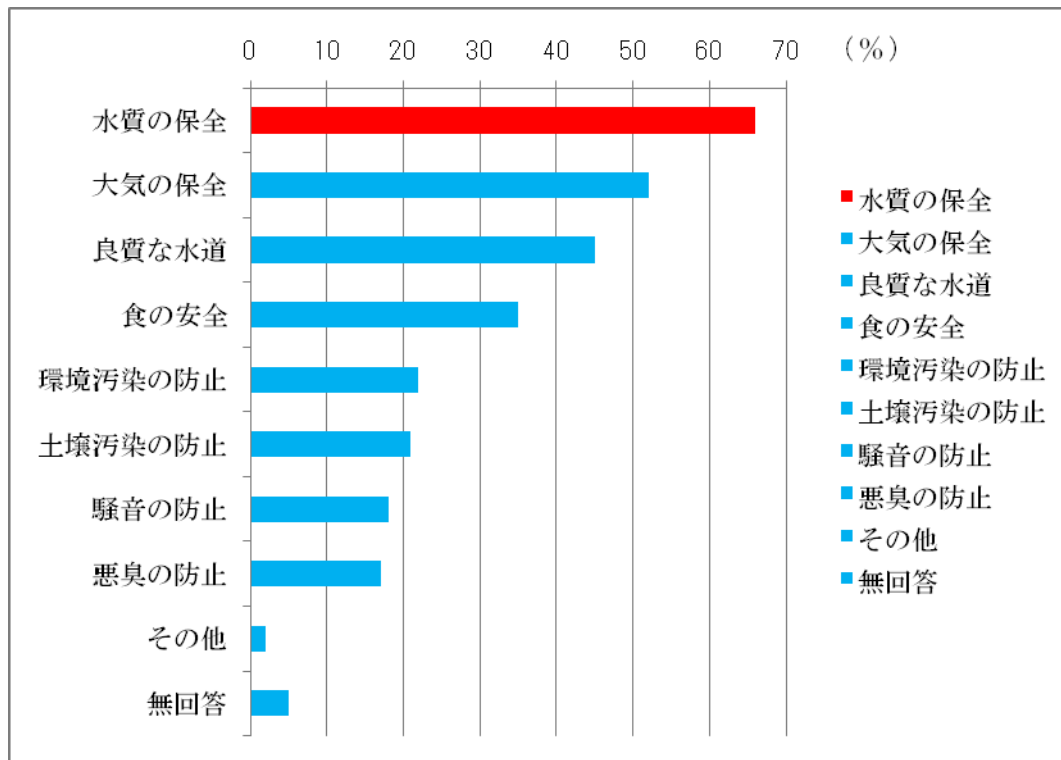
まず1つ目は、海岸部の狭隘地形等、施工条件が厳しいがために、莫大な投資と時間を要するため。

そして2つ目は、他のライフラインが設備されているため、埋設するためには、移設等に、費用・時間がかかるため

この2つを考えた。

また、この件に対しての市民アンケートを探したところ、

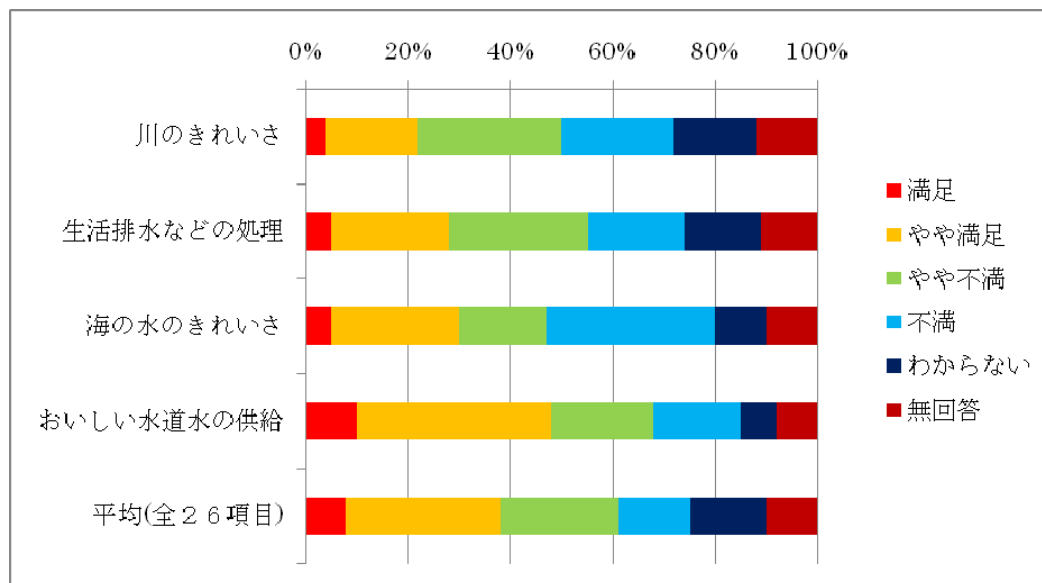
<図2：市民アンケートより>



<図2>をみて分かるように、尾道市民の全体の6～7割の回答者が水質の保全を望んでいることがわかれると思う。これだけの割合の回答者がいるということは、現在より前から課題となっていたのではないだろうか。

またこの<図2>に付け加えて、尾道市民が今の水質に関して、どのような満足度を感じているのかを調べたところ、このような結果になった。

<図 3>



この<図 3>をみて分かるように、川の水・生活排水・海の水に対する満足度が、3割程度しかないのである。

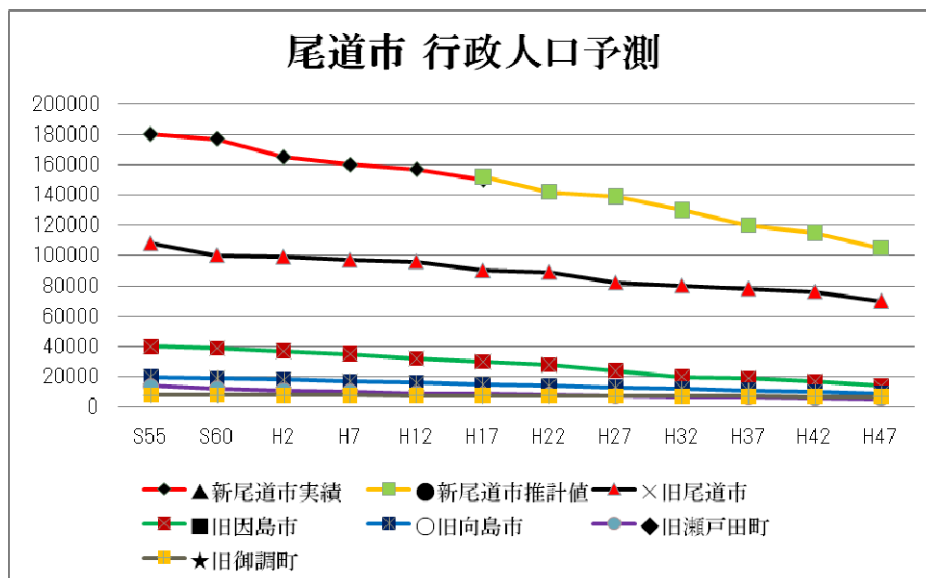
尾道市は、海に面していることもあり、水質保全については海へ繋がっている川の流水量が少ないため、直接的な汚濁の影響がでてしまうのではないかと感じた。汚濁そのものを減らすために発生源からの水質改善をすること大切だと思う。

万が一対処できなかった時の結果として、川や生活排水・海の水だけでなく、海の幸などの【食】に関しても不満が出てきてしまうと思った。それだけでなく、海の水質も守るべきだと感じた。

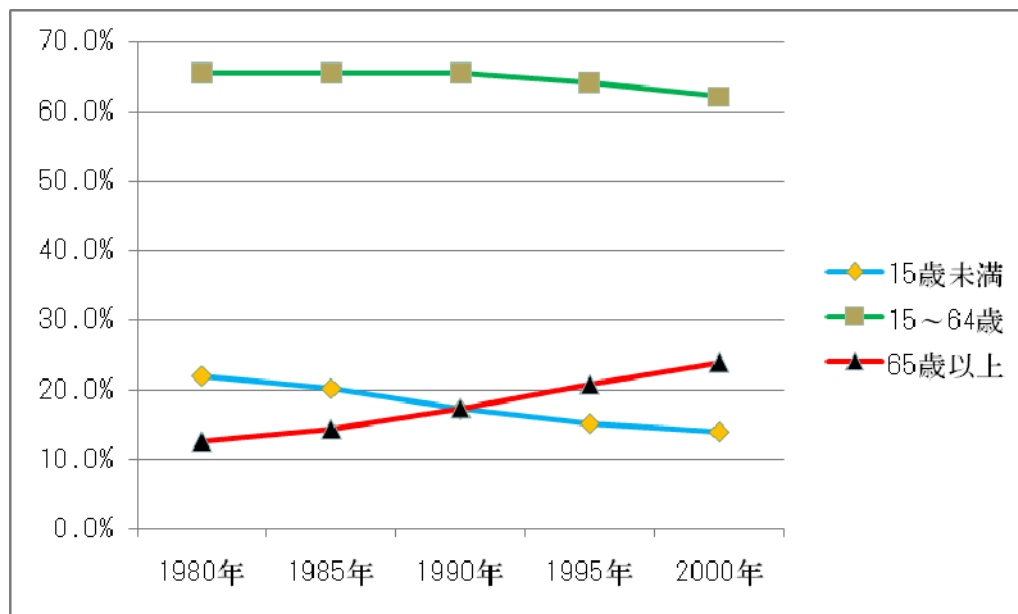
この点でも、下水道普及は費用不可欠であると考えた。

また、下水道を普及することに関して、考えるべきこがもう1つある。

<図 4>



<図5>



この<図4>・<図5>からみて分かるように、今後の尾道市に関して、『公共下水道の利用者の減少傾向』・『少子高齢化による将来的な人口減少』が予測されるのである。

環境への関心が節水意識の向上によって、1人当りの水利用量も減少すると予測されるために、有収水量の低下にともなう料金体系の見直しなど、下水道事業に直接的に関係してくるのである。

このような状況に対して、下水道経営の健全化のために、下水道利用者の増加を早期に測ることも1つの対策に繋がるのではないかと私は思う。

このように、下水道の普及に関しての、課題や解決策を挙げたが、身近なところから改善すべきだと思う。

たとえば、経営分析論の講義の時の話題にあった、『20億円を投資し、尾道大学のE棟を建設する』という計画だった。

正直なことを言えば、現・在学生としては、新しい棟ができることは嬉しいことである。しかし、今回、私は、尾道市の現状について調べることで、E棟建設の計画には賛成できなかった。

なぜなら、市のためにもっと有効な資金の使い方がありと目に見えているからだ。下水道の普及に関しては、私たちにも関係してくる事でもあるので、より関心を持つことができた。

私が今まで知らなかったことを、明確に理解することができ、下水道の普及を進めていくことが、【尾道市に住む】という条件も、尾道市の自然環境もより良いものになっていくのではないかと考える。

だから私は、今後の尾道市を改善していくためにも、現在の尾道市の下水道普及率を高めるべきだと思った。

尾道市を変えるためには、その方向性を定める必要がある。そして、そのためには今の尾道市に足りないことや改善の余地がある点などについて考えることが適切であろう。

学生としての視点からいえば、やはり遊べる場所が少ないことは特筆に値する。尾道市自体に少ないことは言うまでもなく、その周辺に関しても、とても遊べる場所が多いとは言い難い。これがもし、付近に広島市、あるいは福山市のような、比較的都会と呼べる都市があればどうだろうか。恐らく、尾道市は学生にとって、利便性に富んだ都市へと生まれ変わるだろう。しかし、尾道市を変える方法が「都会の隣へ移動する」では話にならない。かといって、尾道市自体が都会化することが、尾道市に必要な変化であるとは思わない。遊びという観点における都会的な利便性は、あくまでも学生という一部分にとってのニーズに過ぎず、尾道市の変化に関して適切な方向性とは言えないのである。だが、このことは尾道市を変える方向性を定めるヒントにはなり得る。

尾道市の特徴は様々なものがある。たとえば、志賀直哉の『暗夜行路』をはじめとする、様々な文学のモチーフとなった都市であることや、かつては交通の便の良さから港町として栄え、歴史的に重要な都市であったことなども尾道市の特徴であろう。それらの特徴のなかでも、私が最も注目したいのが「西の小京都」と称されるほどの神社仏閣の数々である。千光寺や西国寺をはじめとする大小様々な神社仏閣は、尾道市の変化における重要なテーマとなるだろう。つまり、私が目指したい尾道市の変化の方向性は、“神社仏閣を主軸に据えた観光都市”である。

さきほど述べたような、学生にとって遊ぶ場所が少ないということは、一見、都市のマイナス要素でしかないように思われる。しかし見方を変えれば、その都市が煩雑な施設の少ないおだやかな都市であることを示している。つまり、今の尾道市の性質は、神社仏閣をテーマとする観光都市を目指すのに適していると見てよいだろう。神社仏閣巡りは、趣味としてはそれほどマイナーではない。むしろ近年では、年配者は元より、若者にもこうした趣味を持つ者は多い。私が思う尾道市における神社仏閣の魅力は、土地の広さに対する神社仏閣の多さである。これはつまり、神社仏閣が近場に密集していることを意味し、それは巡りやすさに繋がる。尾道は「坂の町」と称されるだけあって、坂道が多い。このことは、交通的に、神社仏閣を巡りにくくしてしまうことは事実である。しかし、坂道が多いことは尾道市のカラーであり風情である。尾道市を訪れる人々は、恐らく尾道市民以上に「坂の町・尾道」を認識しているはずである。そして、そうした地形と、その中にある自然を楽しみに訪れる人々は多いはずである。そのため、尾道市の地形が、神社仏閣巡りに全面的な悪影響を及ぼすとは考えられない。むしろ、神社仏閣を目的とする顧客層にとって、坂道は魅力なのではないだろうか。これらの観点から、私は、尾道市は神社仏閣を主軸とした観光都市に、非常に適していると考えている。

それでは、具体的に、尾道市の何を変えればよいのだろうか。

まずは、宿泊施設を充実すべきである。観光都市を目標に掲げている以上、これを外すわけ

にはいかない。特に尾道市の神社仏閣などの観光名所は、細大漏らさずに回ろうとしなければ、日帰りでも満喫できてしまうため、宿泊施設に力を入れなければ、観光客はわずかな滞在時間でもって帰ってしまう恐れがある。これでは、観光都市としての成功は難しい。宿泊施設を充実させることで、観光と並んで、あるいはそれ以上に魅力を感じてもらうことが、観光都市として経済的な成功を遂げるための、最低限のラインである。幸い、尾道市は山海ともに恵まれており、自然を売りにする条件が揃っている。そのため、宿泊施設に魅力を持たせることは十分に可能である。

また、宿泊施設そのものだけではなく、宿泊客をターゲットにしたイベントを行うことも有効であろう。たとえば、花火大会などは老若男女問わず人気のあるイベントであるため、高い集客力が望める。現在、尾道市で行われている花火大会は「おのみち住吉花火まつり」と「いんのしま水軍花火大会」であるが、いずれも夏季のイベントである。残念ながら後者には行ったことがないため詳しくは分からないが、少なくとも前者は尾道市外からも大勢の人々が訪れる、尾道市のメインイベントのひとつと言ってよい。従って、新たに花火大会を開催するならば、今の花火大会の時期とはかぶらない、夏季以外の時期が好ましい。新たに行う花火大会の目的は、神社仏閣を目当てに訪れる観光客に魅力を感じさせることも目的なので、冬よりも春、あるいは秋が良いだろう。また、花火大会自体を目的とした日帰りの非観光客の集客も望めるため、花火大会のようなイベントは、尾道市にとって大きなプラス効果をもたらすと考えられる。しかし、ここで重要なのは花火大会の規模である。もちろん、盛大ならば盛大なほど集客力は増すだろうが、ここではあまり大きな規模を期待しない。なぜなら、規模自体が小さいとしても、「花火大会」というキーワード自体に集客力があるからである。そしてなにより、大規模な花火大会を新たに催すほど、尾道市にはコスト面において余裕がないと考えられるからである。最初から大規模なイベントを行わずとも、必要に応じて、徐々に規模を変化させればよい。ここでは花火大会を取り上げたが、イベントはもちろん、花火大会でなくとも構わない。花火大会はあくまでも一例である。

以上が、私が尾道市の変化の方向性“神社仏閣を主軸に据えた観光都市”の具体的な指針である。しかし、この方向性だけでは「神社仏閣」自体に興味がない人間にとって、尾道市が魅力に欠ける都市になってしまう恐れがある。もちろん、宿泊施設や花火大会など、これまで述べたものは、神社仏閣を巡る観光客だけをターゲットにしたものではない。しかし、花火大会はともかく、宿泊施設に関していえば、尾道市に観光的な目的がない人間が利用することは、この状況ではあまりないだろう。そう考えれば、ターゲットが神社仏閣を巡る観光客だけでは心もとない。そのために私は、尾道市の変化の、第二の方向性を提示したい。結論から言えば、“歴史文化都市”である。つまり、尾道市の観光客のターゲットを、これまで述べた神社仏閣巡りを目的とする人々に加え、尾道市の歴史や文化、芸術などに興味を持つ人々とするのである。

尾道市は、先述したとおり歴史的に重要な都市であったため、現状でも市立美術館や平山郁夫美術館、おのみち文学の館や本因坊秀策囲碁記念館など、歴史や文化、芸術に関する実に多

くの施設が点在している。また、因島周辺は村上水軍の拠点であったため、村上水軍の本拠地・因島水軍城を筆頭に、数多くの城や城跡が残されている。村上水軍は言わずと知れた、日本を代表する水軍である。これだけ有名な歴史的軍団の本拠地があることは、歴史好きの人々にはもちろん、若い世代に対する尾道市のアピールにもなるだろう。そして、これだけ歴史や文化、芸術に関する施設が充実していることは、尾道市が観光都市を目指すなかで、非常に有力な武器となり得る。

それでは、この現状を踏まえた上で、具体的にどのような変化が必要だろうか。

ひとつは、ツアー会社にアピールすることである。さらに具体的に言えば、修学旅行生の目的地の一つに尾道市を入れてもらうことをアピールする。私の場合、幼少期から広島県で育ったため、修学旅行といえば東京や大阪などの都会であったが、逆に都会の学校での修学旅行の目的地に広島県が選ばれることは少なくない。なぜなら広島県には、日本の歴史上、絶対的な文化遺産、原爆ドームがあるからである。しかし、現実的に、原爆ドームや原爆資料館、その周辺にある平和公園だけではあまり長い時間をつぶすことはできない。そこで尾道市を、あくまでもサブプランとして修学旅行のプランに入れてもらおうというのである。修学旅行のコンセプトは文字通り修学であるが、尾道市のような歴史や文化、芸術が充実した都市は、このコンセプトにそぐわないものでは決してない。また、交通面においてもアクセスがよいため、修学旅行のサブプランとして立ち寄ることが容易であることも、尾道市のアピールポイントとなる。広島市ではなく尾道市を宿泊地に選択してもらえれば、神社仏閣の件で述べた宿泊施設が有効活用できる。このような観点から、尾道市を修学旅行のサブプランのような目的地として導入してもらうように、ツアー会社にアピールするべきであると考え。

そしてもうひとつが、ドラマや映画の誘致をすることである。何度も述べたように、尾道市は歴史的に重要な都市であったため、ドラマや映画のネタが他の都市よりも多い。たとえば、村上水軍などはその筆頭である。招致したドラマや映画のテーマが歴史的人物や事件の場合は、直接ストーリーと関係なくとも、ゆかりの地やその人物や事件にまつわる資料がある施設を訪れるケースも増えるだろう。これまで述べた観光客の増やし方が、「元々興味がある人を尾道市に呼ぶ」方法だったのに対し、この方法は「ドラマや映画の舞台（あるいは登場する）尾道市に興味を持たせる」ことが目的である。この方法の重要な点は、ターゲットとする層が根本的に違うため、大量の観光客の獲得が望めることである。

以上が私の、尾道市を“神社仏閣の都市“だけではなく、“歴史文化都市”としても有力な都市に変化させるための指針である。

いずれの方向性も、ターゲットこそ異なるものの、「観光都市」という点においては同じベクトルを示す。その根拠は、尾道市のように、全国的にもそれなりの知名度を持つ都市は、全く無名な都市と比較して、遥かに優位な地点から観光都市としての立場を築くことができると考えられるためである。

以上が、私の尾道市を変える方向性と、その具体的な手法である。

私は、千光寺山ロープウェイでアルバイトをした経験を生かし、ロープウェイの視点から、尾道市をどう変えるか考える。

繁忙期のピーク時は、一日の乗客数が4千人を越えるが、繁忙期以外はお客さんが少ない。乗客数を増やすためには、繁忙期の乗客数を増やすより、シーズンオフの乗客数を増やすほうが、効率的であると考えます。

なぜなら、1日4千人を超えるピーク時には、時間内に全ての乗客を運ぶために、6時間以上ピストン運行をしたり、特に上りの便は、毎回の運行の際に定員まで詰め込んだりするため、ガイドも疲れるし、効率的とは言えない。

シーズンオフの乗客数を増やすためには、リピーターを増やすことが考えられる。そのためには、繁忙期に来てくださったお客さんに、良い印象を持ってもらうことが効果的ではないだろうか。

ピーク時の現状

- ・ ピーク時は、高架下まで並ぶ（最後尾の人は1時間以上待つ）
- ・ エレベーターに10人乗せる
- ・ ホームも混み合う
- ・ 搬器へ定員（30人+ガイド1人）まで詰め込む
理由：来られたお客さんを全員運ぶことが出来るように
- ・ 窓の外が見られない
- ・ 定員まで詰めるため、暑い
- ・ 待つところに屋根が無い（雨のとき、日差しが強いとき困る）
- ・ 乗客を一気に乗せなければ、来られたお客様全員に乗っていただけないため、定員まで詰め込む（苦しい・景色が見えない）
- ・ ホームに、座って待つスペースが無い
- ・ 階段が多く、車椅子・歩行器のお客様が大変
- ・ 長いときは、1時間以上待たされる（予定が狂う）

長江口の山麓駅から乗る場合が多いが、その場合は、

①観光案内所の切符売り場で乗車券を買うために並ぶ



②乗車券を買う



③ホームへ上がる為に乗るエレベーターを並んで待つ（屋根が無い）



④エレベーターに乗る（満員）



⑤ホームで待つ（椅子が無い）



⑥ロープウェイに乗る（満員）

対策

- ・屋根付き待合室を作る
- ・搬器をもっと大きくするか、定員まで詰め込まない
- ・お客さんが並ぶスペースには、布の屋根を付ける（こんぴらさんの参道のように）
- ・スロープを付ける（階段が多い）

待たずに乗れることが理想だが、並ぶなら、快適に待って頂きたい。

搬器に詰め込みたくない（ガイドも疲れる）



参照 ロープウェイの係りの人にインタビュー（尾道の観光について）

- イベントがあると、乗客数が増える。
- 年間約24万人の乗客が乗っている。
- 現在、ETC休日1000円の効果で、乗客が少し増えているが、NHK朝の連続テレビ小説「てっぱん」が始まれば、さらに増える可能性がある。
- 昼に観光して夜泊まらない観光客が多い為、素通りの町と言われている。

○ 12月の一番観光客が少ない。

主な出来事・イベント

年	主な出来事
1990	
91	生口橋開通・映画「ふたり」
92	
93	新広島空港・山陽自動車道完成
94	広島アジア大会開催・夏季渇水
95	阪神淡路大震災・映画「あした」
96	広島国体開催・山陽本線東尾道駅開業
97	尾道ウォーターフロントビル完成
98	尾道市制施行百周年
99	瀬戸内しまなみ海道開通、映画「あの、夏の日」
2000	国民文化祭開催
2001	ねんりんピック広島開催
2002	スポレク広島開催
2003	日本のまつり2003ひろしま開催
2004	広島県大型観光キャンペーン
2005	映画「男たちの大和/YAMATO」ロケセット公開
2006	映画「男たちの大和/YAMATO」ロケセット公開

出典

地域経済レポート

http://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr07/pdf/chr07_3-5-6.pdf

中国新聞 地域ニュース「尾道観光客、7・9%の増加」'10/5/2

<http://www.chugoku-np.co.jp/News/Tn201005020190.html>

まず始めに、“歴女”という言葉を知っているだろうか？歴女とは、歴史上の人物(主に戦国時代の武将や幕末の志士)を好きな女性を指す造語である。2009年のユーキャン新語・流行語大賞にトップ10入りもした。

尾道にも歴女が好きそうなお祭りがある。それは、因島水軍まつりです。

因島水軍まつりは、島まつり・火まつり・海まつりの3部構成です。



●島まつり

3部構成の第1弾。オープニングと位置付け、水軍まつりの成功と先人に感謝するまつり。水軍城で出陣式、村上水軍の菩提寺である金蓮寺で先人感謝祭を行った後、土生港周辺で、パレードや跳楽舞を踊ります。

毎年同じ日に、宮島さん協賛いんのしま水軍花火大会が開催されています。

日時	2010/7/31(土) (毎年、8月第一週土曜)
場所	因島水軍城周辺(因島中庄町)、 因島土生港周辺(因島土生町)
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・村上水軍出陣式 ・先人感謝祭 ・島まつりパレード ・跳楽舞 ・水軍陣太鼓 ほか



●火まつり

3部構成の第2弾。武者・跳楽舞をはじめとする、見て参加して感動するまつり。

火に照らされた夜の海辺砂浜に、水軍跳楽舞、鎧武者が集結。大松明の練りまわしがあり、クライマックスに花火が打ち上がります。

日時	2010/8/28(土) (毎年、8月最後の週の土曜)
場所	因島アメニティ公園 しまなみビーチ
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・跳楽舞はねくらべ(コンテスト) ・水軍武者入陣 ・大松明 ・大筒花火披露(打上花火) ・水軍陣太鼓 ほか



●海まつり

3部構成の第3弾。小早レースを中心に汗を流し、競い合うまつり。

村上水軍が伝令船として使用した木造船「小早」による競争レースが行われます。

海上で体験小早もできます。

日時	2010/8/29(日) (毎年、最後の週の日曜日)
場所	因島アメニティ公園 しまなみビーチ
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・小早レース ・優勝チーム当てクイズ ・無料体験小早 ・バザール ほか



私は、この中で火まつりに注目しました。火まつりでは、火に照らされた夜の砂浜に約 100 名の水軍武者が集結し、幻想的な水軍絵巻が繰り広げられます。今年は 20 回記念事業として、全国から武者行列に参加する武者を 10 名程度、募集しています。

参加条件は、「甲冑や歴史に興味がある方で、自前の甲冑を持っている方。ただし、甲冑は村上水軍や水軍をイメージするもの」となっています。

歴女の興味をひく内容となっているのではないのでしょうか。

しかし、興味をひく内容であるとしても、このお祭り自体を知らなければ歴女の人を訪れることはありません。

そこで、もう少し手を加えて、アピールポイントを増やせばより多くの歴女が尾道因島を訪れるのではないかと考えます。

まず、武者募集の件で言えば、今年は、第 20 回記念事業として全国から武者を募集していますが、今年だけじゃなく、毎年、募集します。そうすることで、毎年全国から戦国時代の歴史が好きな人がより集まるようになります。

次に、甲冑の試着体験をできるようにします。戦国時代が好きで、甲冑に興味がある人は多くいると思います。しかし、実際に自分用の甲冑を作る人は、よほど好きな人に限られていると思います。そこで、試着体験を行うことで、甲冑に興味はあるんだけど、金銭的に難しい、という人を呼びこむことができます。

また、村上水軍検定を実施します。内容は、因島水軍城に入れば、答えがわかるようなものにします。そうすれば、因島水軍城に入場して、適当に見学するのではなく、真剣に城内の資料を見るようになる上、入城者数も増えることになります。



参考 HP

広島県因島商工会議所：<http://cci.in-no-shima.jp/index.htm>

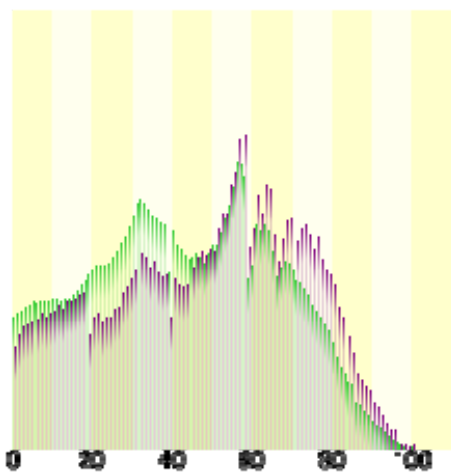
尾道市：<http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/>

社団法人 因島観光協会：<http://innoshima.no-blog.jp/>

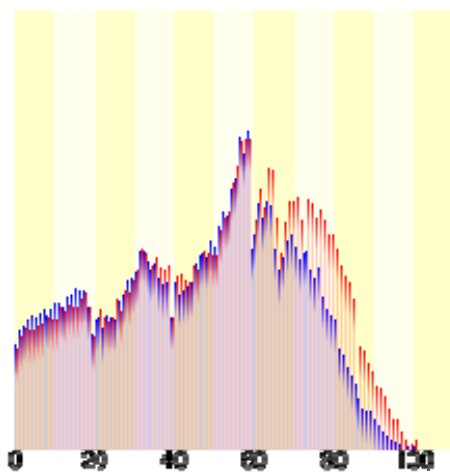
まず尾道がどういう所なのかということ把握しておく必要があるのここから始めていきたい。

尾道市は瀬戸内海（対岸の向島との間はその狭さから尾道水道と呼ばれる）に面し、古くから海運による物流の集散地として繁栄していた。海運業で栄えた商工都市ということだ。それゆえ現在でも海岸通り沿いや尾道商店街内では新鮮な魚などを取り扱うお店が多くあり、それに伴い美味しい食べ物がたくさんある。

人口の推移をグラフで見てみる。



尾道市と全国の年齢別人口分布



尾道市の年齢・男女別人口分布

■ 紫色 — 尾道市
■ 緑色 — 日本全国

■ 青色 — 男性
■ 赤色 — 女性

1980年	180,901 人
1985年	177,532 人
1990年	166,930 人
1995年	159,890 人
2000年	155,200 人
2005年	150,225 人

[総務省統計局 / 国勢調査 \(2005年\)](#)

Wikipedia 参照

このグラフをみると人口自体は減少傾向にあり近年は割と緩やかに減少している。60歳前後

の方の割合が男女ともに一番多く、少子高齢化社会と言われている現在の日本の傾向をそのまま継承しているようなグラフになっている。男性よりも女性の高齢者の割合が多いようだ。

尾道は“坂の街”といわれるほど坂が多い。内海国立公園の中央に位置し、温暖な気候に包まれた天与の自然景観と文化の香り高い歴史的遺産に恵まれた観光・文化都市である。また、平成の大合併により、平成17年3月28日に御調町、向島町と、平成18年1月10日に因島市、瀬戸田町と合併し、市域は拡大し、多くの観光資源を持つまちとなった。代表的な観光地として千光寺公園が一番著名だろう。千光寺山の山頂から中腹にかけて広がる公園で。「さくら名所100選」にも選ばれ、春には多くの花見客が訪れるような場所である。千光寺のような古寺めぐりや広島県立びんご運動公園、おのみち歴史博物館などその街並みや風情に多くの観光客がにぎわっている。

ここで尾道市の歴史を振り返ってみよう。

- 1898年（明治31年）4月1日 - 御調郡尾道町が広島県下2番目に市制施行し、尾道市が誕生。
- 1937年（昭和12年）4月1日 - 御調郡栗原町、吉和村を合併。
- 1939年（昭和14年）7月1日 - 沼隈郡山波村を合併。
- 1945年（昭和20年）7月27日 - 日立造船向島工場が空襲にあう。
- 1951年（昭和26年）4月1日 - 御調郡深田村大字久山田を合併。
- 1954年（昭和29年）3月1日 - 御調郡美ノ郷村、木ノ庄村、原田村を合併。
- 1955年（昭和30年）2月1日 - 沼隈郡高須村、西村を合併。
- 1955年（昭和30年）4月1日 - 沼隈郡百島村を合併。
- 1955年（昭和30年）7月15日 - 尾道市高須町・西藤町の一部を松永市（現福山市）に分離。
- 1957年（昭和32年）1月1日 - 沼隈郡浦崎村を合併。
- 1968年（昭和43年）3月3日 - 尾道大橋開通。
- 1970年（昭和45年）4月1日 - 御調郡向東町を合併。
- 1988年（昭和63年）3月13日 - 山陽新幹線新尾道駅開業。
- 1993年（平成5年）10月26日 - 山陽自動車道福山西IC - 河内IC間開通。尾道IC供用開始。
- 1999年（平成11年）5月1日 - しまなみ海道（西瀬戸尾道IC - 今治IC間）全通。
- 2005年（平成17年）3月28日 - 御調郡御調町、向島町を編入。
- 2006年（平成18年）1月10日 - 因島市、豊田郡瀬戸田町を編入。

Wikipedia 参照

このように最初は造船業で街が栄えていてそれをきっかけに尾道大橋の完成や山陽新幹線の新

尾道駅の完成、尾道 IC、しまなみ海道の誕生などいろいろなところへの交通の便も良くなり、以前より尾道が全国に向けて開放的になっている。

ではこの尾道がもっと活性化するにはどのような対策を打てばよいのだろうか。一番尾道に足りないのは自分のいいところをアピールする力だ。尾道大学を例に挙げると、なぜ尾道大学とだけ書き、もっと尾道市立という良さを出さないのか。小さいながらも生徒と教授の親密さも上がりいい仲間と出会えるということなどをなぜもっとアピールしないのか。これと同じように、尾道市も上記したように千光寺公園などの名所や尾道ラーメンなどのグルメもあるのにあまりにもアピールが少なくないだろうか。もっと尾道についての CM を流してみたり、尾道市長が積極的に尾道の良さについてたとえばインターネットを使って発信していくような姿勢が私にはあまりにも感じられない。活性化については観光客が多く来てお金をたくさん使ってもらうのが一番手っ取り早い方法というのが前提である。

そして上記しているデータのように尾道市の人口をみると高齢者の方が多い。これだけ風情ある町なので退職してこの街に移り住もうという方は全国的にも多いのではないだろうか。そのような人たちにとって尾道の特に海岸沿いではあるが坂が多く非常に入り組んでいる状況は非常に暮らしにくいのではないだろうか。現在尾道の昔からあるような住宅の腐敗や居住者がいないことが問題となっている。このようなことに対応できるような環境づくりをボランティア単位ではなく尾道市全体で取り組んでいくべきだと思う。今の街並みを崩さずに住みやすい街というのを実現するというのは非常に難しい問題だとは思いますが。高齢者が多いという事実から飲食のお店や観光客がよく訪れるお寺などをバリアフリーにするべきだと思う。これにより積極的にお年寄りの方も買い物や博物館などの名所巡りをすることができ活性化につながると思う。

次も高齢者がらみのことであるが、若者の尾道離れが進んでいる。遊ぶところがなく歴史的な街なのでなかなか住みつかない。尾道大学の生徒やほかの学校の学生などの若い世代の人たちはもっと高齢者の方と交流を図って家に閉じこもりがちの方と親交を深めてそれぞれの世代の意見を言い合ってみるのも面白いと思う。尾道在住の高齢者の方はもちろん私たち若者より尾道のことについてたくさんを知っておられるので、その良さを若者に伝えて、その若者からのコネクションを通じて多くの人に尾道のことについて知ってもらうのもいいことだと思うし、高齢者の方は若者から元気をもらいそれを糧にいろいろな場面で尾道のために活躍してもらいたいと思う。

思い切った案としては尾道に動物園や水族館を造るなどのことをすれば話題になり観光客が増えるのではないだろうか。私としては水族館が有力な案である。今日の日本では不景気による多忙や過労でストレスの発散というのが非常に大きな問題となっている。そこに目を付け動物やお魚たちを使い目を癒して帰ってもらうのは得策ではないだろうか。

現在は日本全体が不況で尾道市もそのあおりを多く受けておりなかなか消費が増えないのが現実だろう。なのに、なぜ尾道市はもっと大学と提携して経済的な実証分析などをもっと積極的にやらないのか。尾道は前述で述べたように観光名所やグルメなど非常に全国的に売り込む

ようなことが多くあるのになぜ売り込まない。これは尾道市の非常に消極的で受け身な姿勢にほかならないと思う。人間は思い込んだりすることが実際に体に作用することがある。尾道市全体としても自信を持って良さを積極的にアピールすることが経済的にも市民の精神的にも活発になるような一番の要因ではないだろうか。

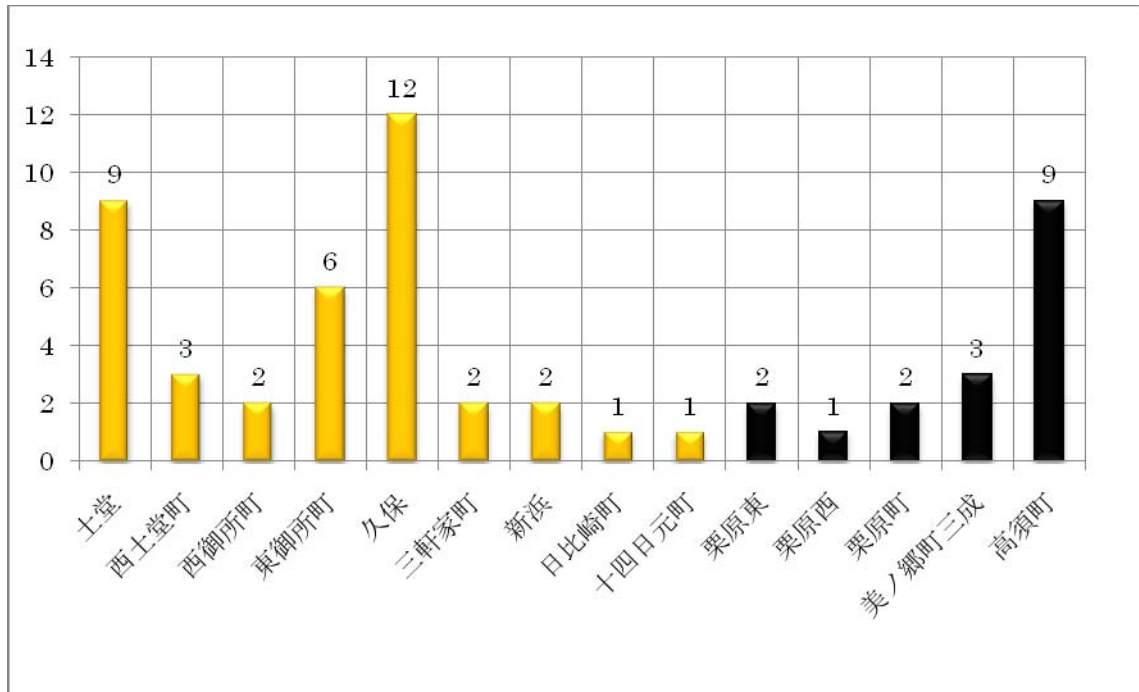
尾道の居酒屋事情

羽立 寛太

いきなりだが、私はお酒が好きだ。お店で出される、家では味わうことのできない生ビールが好きだ。お店によって個性があるのでいろいろな所へ行って飲み比べてみたいと思っている。しかし尾道市内、特に多くの尾道大学生が住んでいる栗原町付近に居酒屋は数える程度しかない。実際、友人と飲みに行く時は専らバイパス入り口近くの○吉である。○吉は焼鳥もおいしく、雰囲気もいいので大好きなのだが、一緒に行くには5人が限界で少々しんどい。かといって尾道駅前まで飲むとなると帰りの移動手段はタクシーぐらいに限られ、学生にはつらい。誰かが車を出すこともあるが、それでは全員が飲むことができず、少し申し訳ない気分になり気持ちよく飲めない。

こんなことになる原因は近場に居酒屋がないからだ。しかし、もしかしたら自分が知らないだけでお店はもっとあるのかもしれない。なので、このレポートでは栗原町を起点に徒歩圏内に居酒屋は何店舗あるのか調べ、多い場合はいかに知名度を上げるか、少ない場合はどうして少ないのかどうしたら増えるのかということについて考察してみようと思う。なお、徒歩圏内というのは歩いて15分以内の距離として考える。

まず始めに居酒屋は尾道市内のどこに集中しているのかを調べた。用いたのは「Yahoo!グルメ」で向島、因島、木の庄、御調にあると出た居酒屋は除いた。



表の明るい部分は尾道駅から徒歩圏内にあるお店で暗い部分はそれ以外を表している。こうしてみると居酒屋は駅前に集中していることが目に見えてわかる。栗原町に至っては2軒のみだった。

まずなぜ駅前に集中するのかを考えてみる。

- ・交通の便が良い
- ・個人経営のお店が多い
- ・街灯などの整備が行き届いている

交通の便がいいというのは理由の多くを占めているのはすぐわかる。

もう一つの大きな理由としては個人経営の店が多いことではないかと思う。調べた中でチェーン店は3軒しかなく、あとは全部個人経営だった。駅前にある居酒屋は昔からの町並みでその頃から店を構えていて、比較的最近に開発された栗原地区にはそういう方が少ない。つまり駅前にお店が集中しているというのは結果論でそれ以上に栗原地区での新たな出店が少ないということが分かる。

街灯などは安全や防犯とともに雰囲気を良くすることにつながる。184号線沿いに街灯はないことはないが間隔が広く足元が見えないところも多い。ただでさえお酒を飲んだ後で酔っているのが暗いというのは危険だ。街灯の充実が防犯にも繋がり、メリットは多いはずだ。駅前の街灯はオレンジで統一されており雰囲気も良く綺麗で歩道も整備されていて歩きやすい。駅前からバイパスまでの歩道はひびも多くでこぼこで歩きにくい。歩道の整備は市民の満足度の充実にもつながる。

新たな出店が増えないのはこれらの理由のひっくり返しで、交通の便が悪く、立地条件が悪いから出店しないということになる。

しかしこれらの整備が充実していても集客が見込めなければ出店はしない。金曜日など週末の利用が多い社会人より、曜日を問わず利用する学生をターゲットにしたサービスが充実した居酒屋ならば集客は見込めるのではないか。

たとえば

- ・安価なメニューが多い
- ・雰囲気が良い
- ・女性同士で気軽に行ける
 - ↳ ・レディースデーを決める
 - ・スイーツメニューの充実
 - ・トイレがきれい
 - ・分煙がされている など
- ・尾道市内の加盟店で使えるポイント制の導入
- ・団体割引

思いつく範囲内だがこれらのようなサービスはどうだろうか。こういうような居酒屋が近場にあるとなると学生も足を運ぶようになるはずだ。居酒屋と一緒に小さな雑貨屋も兼ねたりするのもいいかもしれない。

また、近くで貯めたポイントを使ってときどき駅前の居酒屋に行くということもあるだろう。しかし先に述べたように交通手段が限られる。ちなみに尾道駅発尾道大学行きのバスの最後の2本は以下のようになっている。

平日	休日（土曜・日曜・祝祭日）
21:00	21:00
22:00	22:00

学生が22時までに飲み会を切り上げるということは、飲み足りなかったり話し足りないということがほとんどになるだろう。だったら帰りはタクシーでというのはときどきで毎回できることではない。ではこれらの交通機関を充実させるのはどうだろうか。

たとえば

- ・週末限定で0時ごろにバスを1本増便
- ・加盟店で〇〇千円以上の支払いをしたらタクシーの割引券を発行

などはどうか。現在は電車の最終で尾道駅に着くと、バスの最終はとうに終わっている。深夜のバス運行は学生だけでなく尾道市民にとっても重宝されるものになるはずだ。

これらの実現には地元企業や市との協力は必要不可欠である。しかし実現し、タクシーやバスを利用する人が増えるということは交通業界の発展、ひいては尾道市の発展にもつながらないだろうか。

◆ これからの課題

さきほど提案したポイント制は実現しても浸透するまで時間がかかるかもしれない。またそのポイント制の存在を知ってもらう宣伝もしていかなければならない。企業との協力もだが、市や住民もつまり街丸丸となつての協力が必要である。今回は居酒屋を切り口にしたがこれは観光など他の分野にも共通した話ではないかと思う。何をやるにしてもまず住民にこれからやろうとしていることに関心をもってもらえるかどうか大きな課題になるだろう。

◆ まとめ

気軽に立ち寄れる居酒屋が近くにないのかというところから始まり、結果的には少なかったのだが、居酒屋だけでなく飲食店というくくりでみると意外に近場にもあるということが分かった。しかし学生の間での知名度は低いところがほとんどだった。若い年齢層の定住者が少ない尾道市では4年といえども尾道市に居を構える尾道大学生をターゲットにしないのはもったいないと思った。スーパーは充実しており生活には困らない。しかし外で長く飲める場所はない。勉強をほったらかしにしてまで遊べとまでは思わないが、たまには羽目を外すことができる場があってもいいと思う。羽目を外す場所を松永や福山などの尾道市外にさせないということが尾道市を変える第一歩になるのではないかと考える。

尾道市の発展

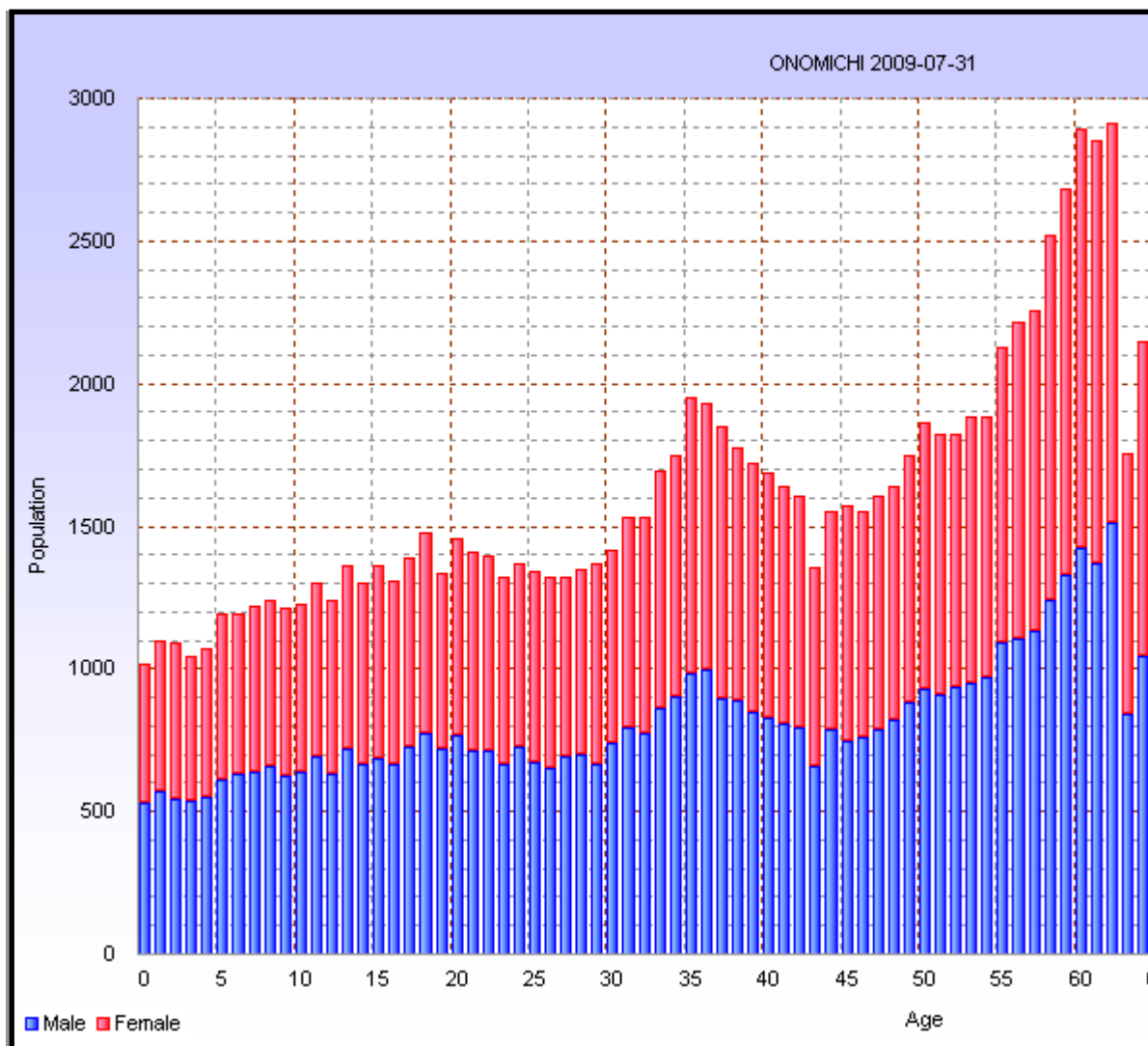
羽瀨 章

今の尾道市を発展させるには、いま何が必要か。私は、原台にアミューズメント施設を作ることを勧めたい。

尾道市の久山田町には、尾道大学がある。大学の学生の多くは、久山田町の寮に住んでいたり、栗原町や門田町、平原台などの大学周辺に住んでいる。また、それらの地域には中高生も多くおり、若者(15歳から25歳まで)が多い。

高齢者と比較すると、若者の数は少ないが、それでも13500人程いることになる。(下図参照)

尾道市



これから人数が減っていくであろう老人より、数が一定の学生の方がこの先の経済の発展を考える上では、対象としやすいのではないかと私は考えた。

私たち若者が好きなことと言えば、カラオケ、ボーリング、ビリヤード、ダーツなど様々な遊びである。

そこで、若者をターゲットとしたアミューズメント施設を作ってはどうか。

今の尾道市には、大学周辺の学生が多く住む地域にはこれといった施設はない。尾道市の隣の市、福山市には、コロナワールド(下写真) やラウンドワンといった施設が存在する。尾道大学の学生もそういったところに行く人が多い。

しかし、中高生や一部の大学生はそこまで行くのに、電車やバスを使用しなければならず、お金も時間もそれなりにかかってしまう。

それならば、大学近辺にそういった施設があればいい。平原台にあれば、中高生は自転車や徒歩で、大学生はバイクや車で簡単に来ることができる。わざわざ遠い所に行かなくてもいいとなれば、近くの同じような施設に行くのが多くの人々がもつ考え方だろう。

また、尾道市初の総合アミューズメント施設となれば、注目度も高まる。それならば、来場者の確保もたやすくなると思う。



それならばなぜ、平原台なのか。

それは、尾道市の中で、今一番開発が進められており、新築の民家やアパートが続々と建ち始めているからである。

また、先にも述べたが平原台なら周りの地区との交通の便もいいのである。

しかし、問題は尾道市がそのような施設の建造を許可するのか？といったことにある。尾道市は平原台にそのような施設を建てられない規制をかけていると聞いた。それが本当ならばこのようなことはできなくなってしまう。

古くから歴史のある尾道市ではあるが、どれだけ来るか、いつ来るかわからない観光客を取り込もうとするより、大学が存在する限り、一定の数を保ったままでいられる若者をターゲッ

トにこれからの尾道市の発展を考えていけばよいのではないだろうか。

尾道を代表する有名なものといえば、何だろう。と考えたときに私が一番に思い浮かべたのは、「尾道ラーメン」です。尾道ラーメンの店は主に海岸沿いに集中していて、週末や長期休暇になると店の前に長い行列をよく見かけます。観光マップには尾道ラーメンのお店の紹介や位置が詳しく載っているので、観光客の人たちも観光マップを片手に列に並んでいます。しかし、ラーメン屋さんの前や近くの歩道沿いに路上駐車している光景も見かけます。私が海岸通りを原付に乗って通ることが多いからかもしれませんが、曲がり角に車が止まっているとびっくりするし少し迷惑だと感じました。

私が知っているラーメン屋さんには駐車場がないところがほとんどです。あっても、1台か2台置けるくらいのスペースしかありません。これが路上駐車の原因ではないかと思いました。この改善策はないかと尾道市に関するホームページを調べていくと次のような駐車場マップを見つけました。



(尾道観光協会公式サイト「おのなび」より)
詳しい名称や収容台数は省略。

このマップを見れば、駐車場がどこにあるか調べることができます。ただ、このような地図はホームページには載っていますがパンフレットとしてはまだあまり配られていないようで、市役所のホームページにいくつか意見が書き込まれていました。また、地図はこまかく描かれていますが、尾道に住んでいる私でも分かりにくいような場所もいくつかあります。ラーメン屋さんと協力して、「この店に行くならこの駐車場を利用すれば近い」など情報があればいいのではないかと思います。

もうひとつの原因として私が考えたのは、駐車料金です。上の“市内主要駐車場マップ”に載っている駐車場の料金を見ていくと、1時間平均300円くらいです。しかしこの300円というのは初めの1時間で、1時間以上たつと次からは30分ごとに200円や20分ごと200円などになってしまいます。もしお店が大繁盛で順番待ちするなら、初めの1時間をオーバーしてしまうことも考えられます。観光客の人たちだけでなく、地元の人でも車で食べにくるがあります。「ちょっとだけだからいいか。」という気持ちだとみんながそうしてしまうので、車で来たお客さんへのサービスが必要です。たとえば、お店と駐車場の運営者で提携して、車で来たお客さんへ駐車場のチケットを配ることや、最寄りの駐車場を紹介するなど。まだ対策はあると思います。

このことはラーメン屋さんに限ってのことではありません。海岸沿いや商店街にあるお店のほとんどは狭いスペースに建てられているため駐車場がないように感じます。地域ぐるみで協力して解決して行ってほしいです。

次に、尾道といえばラーメン!!!というイメージはありますが、もうひとつ素敵なものがあります。それはお寺や神社です。調べてみると、尾道には30以上の古いお寺・神社があります。高校生のとき、部活で外周をよくしていた私でも、こんなにたくさんあるんだと驚きました。そこで、「ぶらり尾道てくてくスタンプラリー」といって、尾道のお寺や文化財をめぐるイベントがあることを知りました。チェックポイントは尾道駅周辺を始め、しまなみ海道を渡って瀬戸田エリアにもあり、全33カ所。体力や体調に合わせて5カ所・10カ所・20カ所・全カ所が選べ、回る順番は自由ということで幅広い年齢の方々が参加していました。千光寺、浄土寺、西国寺など有名どころも見物できます。手軽に数時間、散歩がてら参加したり2～3日かけてじっくり計画を立てて探索する人など様々です。

一番新しいものが第5回で、そのときの様子が「おのなび」に掲載されていました。MAPの下には各チェックポイントの名称や簡単な説明が書かれており、初めて聞くお寺や場所がたくさんありました。「ぶらり尾道てくてくスタンプラリー」に参加した方の感想や意見のなかにも、“知らない寺が沢山あり、知ることができて良かった。”という言葉もありました。



(尾道観光協会公式サイト「おのび」より)
各チェックポイントの名称や紹介は省略

～第5回スタンプラリー感想より抜粋～

- ・たくさんのお寺が効率よく見られた。
- ・初めての尾道だったが、スタンプのある場所を目標にして楽しく回れた。
- ・寺めぐりが楽しかった。いろんな桜も見れた。
- ・3回目のスタンプラリー。何度来ても素敵な尾道を楽しませてもらった。
- ・来年も来たい。全部回ってみたい。
- ・道に迷っていると地元の方々が声をかけてくれ、とても暖かい街だった。
- ・尾道の千光寺に行ったことはあったが、古くからのお寺がたくさんあり、由来なども分かり楽しかった。

など、初めて参加した人もリピーターの人も楽しめる企画だと分かりました。

また、

- ・スタンプにクイズがあったらさらに楽しめると思った。

- ・次回は寺以外のスタンプラリー企画をお願いしたい。
- ・近くに来る機会があり、手軽なラリーとして利用した。次はゆっくりとしまなみ海道を巡ってみたい。

といった改善点が投稿されていたり、尾道のいいところを発見してこれをきっかけに尾道に興味を持ってくれるということもわかるのでもっともっと **PR** していけば活気づいていくのではないかと考えました。まだまだ知られていない尾道のいい部分を **HP** で紹介してほしいです。

1. はじめに

尾道市は、南部では広島県のほぼ中央に位置し、交通のアクセスも、国道2号線、しまなみ海道、山陽自動車道、JR山陽本線、新幹線と比較的充実しており、立地条件は悪くない。普通に生活するうえでは、何の不自由もなく生活ができるが、ただ、“羽を伸ばそう”と考えれば福山市まで行かないと何もできない。若い人をターゲットにしている場所はないに等しい。どちらかといえば、年配の方がお金を落とす場所のほうが数はあるが、それほど多いわけではない。どの市町村も財力が低下している中、どのようにして、財源を確保するかは大きな課題である。そこで、尾道市にお金を落とす方法をこのレポートで考えたい。



2. 尾道市の現状

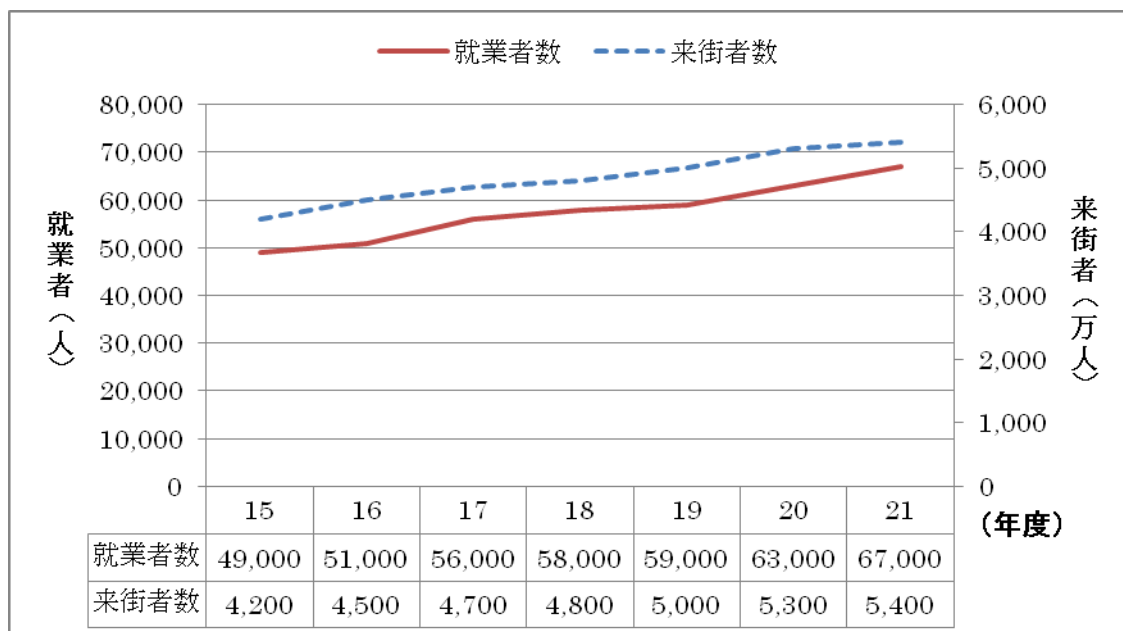
尾道市の現状を把握する上で独自に、旧尾道市、その中でも東尾道地区、御調地区、因島・瀬戸田地区の4つのブロックに分類した。(図1) このレポートでは特に、平成の大合併前の尾道市(尾道駅周辺から東尾道まで)に注目したい。尾道駅周辺は、千光寺公園や大林監督の映画のロケ地めぐり、文学のこみちの散策等の観光スポットとしての役割を担い、東尾道は、田園地帯から区画整備事業を経て、新興住宅地としての役割を担うようになってからは、店舗の出店が目立つ。また、土地の利用の面でも尾道駅周辺には問題がある。広い空き地が存在しない、そして昔からある個人住宅や商店が多く移動がむずかしいため、大規模出店型店舗等入る余地がない。そういった店舗は東尾道～福山方面に流れているのが現状だ。ただし、新浜～吉和までの2号線沿いでは、新しくマンションやスーパーが建設されており、住みやすい(図1:ブロック詳細)

環境が整いつつあるが、“遊び”に関しては、ゲームセンター程度しかなく、私達世代が遊べる場所はない。観光地としてアピールする尾道市だが、実態は過去の栄光にしがみついたものであり、ターゲット層の高年齢化が進んでいる。

3. みなとみらい21をお手本にしたウォーターフロント計画

尾道市と同じ港町の神奈川県横浜市にある、みなとみらい21(以下MM21)は、年々来街者数と、就業者数が増加しており、横浜市のブランド力向上に成果を挙げている。(図

2) そこで、私はこれをお手本にした尾道市ウォーターフロント計画を提案する。尾道市の自立性を強化して、みんなが来たい街を目指す。尾道水道に埋立地を作り、その部分に話題性に富む商業施設や企業を誘致する。誘致が促進するように、開発地区特別条例を打ち出し、税金面で優遇処置をとる。国道2号線と尾道駅が目と鼻の先になることで、利便性はかなり高くなる。また、MM21のように、景観を考慮した“オシャレ感”（イルミネーション等の演出、赤レンガ倉庫など）を出すことで、現在運行している本土～向島の渡船も、開発地区への交通手段としての利用のほかに、クルージングの需要が発生することも考えられる。向島までの渡船は、しまなみ海道の開通等によって利用者が減少しており、「渡船復権」に繋がる好材料となりうる。そして、日産自動車が本社機能を移転したように、大企業の誘致が成功すれば、尾道で働く人が増加するので、他企業のビジネスチャンスも広がる。これらを実現するには、MM21のように土地利用についての基本方針を策定して、開発地区における土地の利用条件、環境への配慮、屋外広告物の禁止等、事細かくガイドラインを作る必要がある。これにより、企業とアミューズメント施設が共存していても、違和感のない街づくりが可能になる。尾道水道はその名前の由来どおり対岸と向島の間が狭く、効率的なスペースの創出が要求される。したがって、住宅地としての機能は、キャパシティの広い東尾道地区や、旧尾道市側に任せることにする。また、旧尾道市側は、街並み保存地区とすることで、現在の観光スポットを残し、古きよき町並みと、新しい街並みが共存する独特の雰囲気を作り出す。この利便性と尾道市のコンパクトさを活かす、ワクワクするようなウォーターフロント計画で、市民の理解を得る。

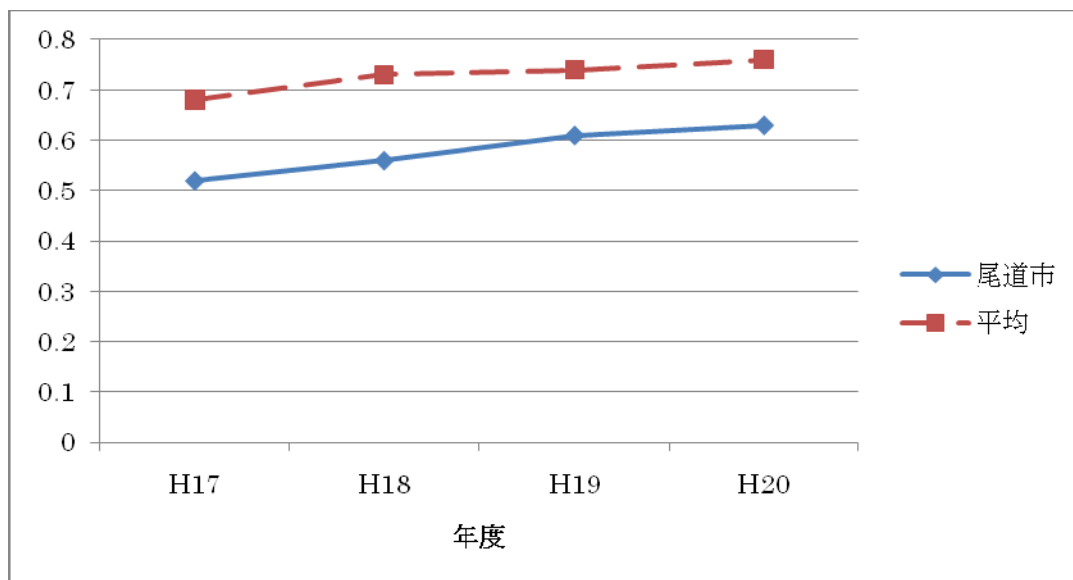


(図2：MM21の来街者数と就業者数の推移)

4. 問題点

計画を実行するに当たっての財源が必要である。市債の発行等考えられるが、財政力指数が、尾道市と類似する市平均よりも低くなっており、決して財政力が高いとはいえない。

(図3) そのような状況下で莫大な地方債を発行するとなると、受け入れられるかはわからない。また、尾道市は、旧2市3町の合併に伴い策定した「新市建設計画」を見直し、合併後10年間で実施予定だった事業のうち30事業を凍結・執行停止する方針を明らかにした。総事業費約1,069億円の事業が執行できないのに、それよりも大規模になる可能性が高いこの計画には無理がある。横浜の成功事例があるにせよ、無理に行って失敗した際のリスクが大きすぎる点も問題だ。保守的な思想を持つ市民が多い尾道市で、革新的な行動が受け入れられるのかという点も考慮しなければならない。



(図3：財政力指数の推移)

5. まとめ

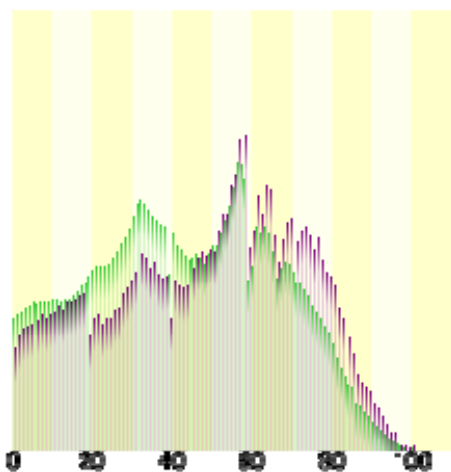
解決するのが難しい問題点も多く、長期的な目で見ると必要があるこの計画は受け入れられるのは難しいかもしれない。どれだけ市民に「変革」アピールができるか、期待感を抱かせることができるかがカギである。現状では、尾道市の位置する場所や交通の便等を有効活用できていないと考える。これではもったいないし、合理的ではない。ウォーターフロント計画は、今ある資源を有効的に利用でき、かつ尾道のブランド力向上に一役買える力がある。どうにか財源の捻出をして、是非とも実現したいプランである。

はじめに

はじめて尾道市を訪れたときの印象は、若者が少なく、高齢者層向けの街並みだと感じた。実際にこの二年程度過ごしてきて、生活必需品以外は尾道市では手軽にほぼ満足のいくものは購入できず、若者の消費意欲を十分に満たすことができていないと思う。尾道市の現状の問題を考え、若者を惹きつける街、高齢者層の需要だけに偏らず、もっと若者の需要に応え、また、尾道での若者の消費活動を活発にしていくためにはどのような方法があるのか、若者をターゲットにして考えていきたいと思う。

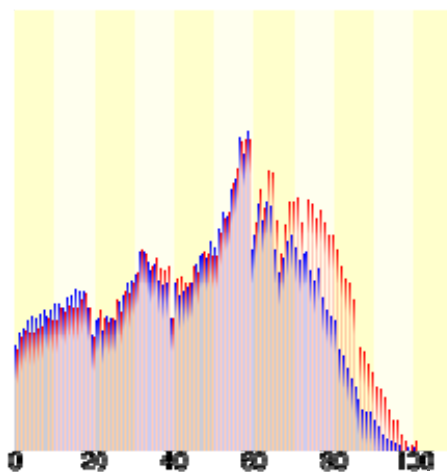
① 人口分布から読み取れる問題点を考える

2005年度の調査結果とはなるが、下図からわかるように高齢者層の割合が非常に高いことは一目瞭然とわかるだろう。しかし、ここに注目してもらいたい。20代までは全国水準と同レベルなのに対して、20～40代間は全国水準との差が目立つ。この差からこの年齢層の尾道での居住者数が少ないという問題が垣間見えてくるのではないだろうか。



尾道市と全国の年齢別人口分布

■ 紫色 — 尾道市
■ 緑色 — 日本全国



尾道市の年齢・男女別人口分布

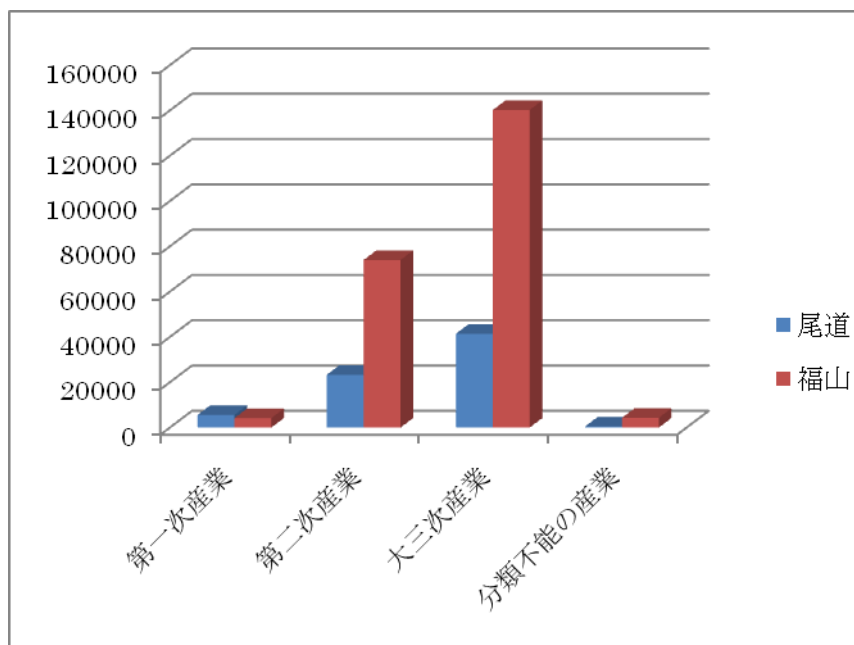
■ 青色 — 男性
■ 赤色 — 女性

総務省統計局/ 国勢調査 (2005年)

また、居住者数が少ないということは尾道での就業者数も少ないということが考えられるだろう。そこで、尾道と福山の15歳以上産業別就業者数の比較をしてみた。下図からわかるよう

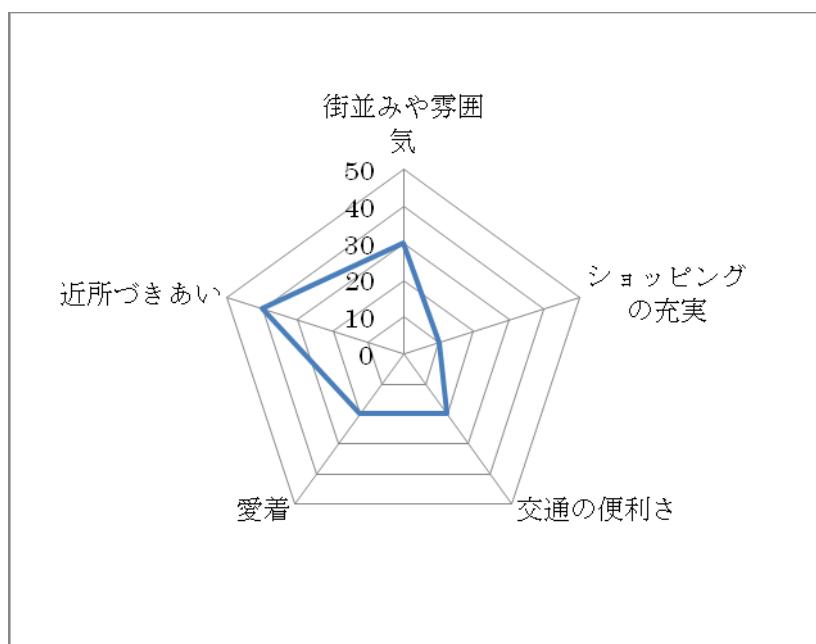
に尾道の就業者数の少なさは明らかである。尾道での就業者数を伸ばすにはどうすればよいのか検討する余地がある。

15歳以上産業別就業者数(2005年国勢調査より)



② 尾道に住んでいる若者(ここでは尾道大学生)に答えてもらったアンケートから具体的な問題点を考える

尾道大学生(20名)に聞いた尾道の満足度

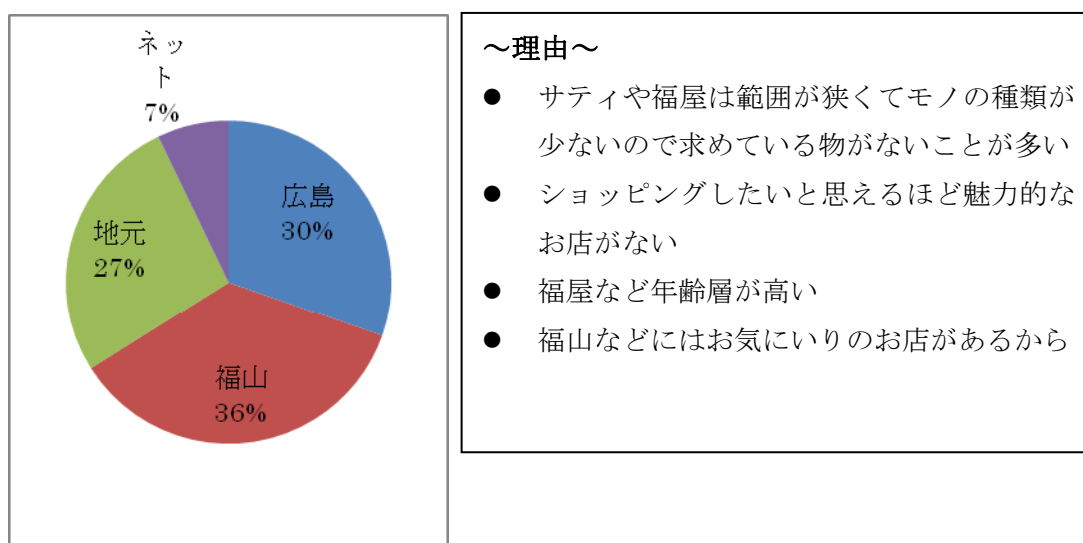


※なお、愛着と近所づきあいとは具体的に下記の内容である。

愛着：尾道への居住願望

近所づきあい：イベントなどの充実

グラフから、利便性の悪さが若者を尾道に惹きつけない原因と読み取ることができる。尾道自体の評価は良いといえるのだが、愛着が湧くほどの魅力がない。愛着が湧くにはどうすればよいのか。また、尾道にはサティや福屋などのお店があるにも関わらずなぜショッピングの充実の項目の割合が一番低かったのか、理由及び普段どこでショッピングをしているのかも応えてもらった。



上記の結果から尾道には若者の購買意欲をひき出す店舗の不足、企業自体が若者をターゲットとした戦略をとっていないのかと考えられる。

③ ①、②からわかった問題点をふまえ、若者が集まり尾道の活性化を目指すために何ができるのかを考える

尾道市は一番お金の消費を促せる20～40代の人口が少ない、かつその年代のニーズに十分に答える環境が整っていない。しかし、尾道の立地条件は新幹線、JRの駅もあり、本州と四国を結ぶしまなみ海道の出入口であるからアクセスを集めやすいと考えられるので後は戦略次第で多くの若者を惹きつけることができると思う。

まずは、尾道大学生などの学生をターゲットにし、例えば、高齢化によってにぎわいが低下している商店街や、福屋などの年齢層の高い商店に若者向けの雑誌に掲載されているブランドの服等のファッション系の店舗を取り入れるだけでも、そこに足を向ける人が増えるはずである。また、飲食店などで、学生割引などの特典をつける店舗や娯楽施設を増やすことで魅力を感じさせるということも有効的であると思う。足を向ける人を増やすことができれば、その周

辺にあるお店にも足が向かい、この連鎖を起こさせることができれば中心市街地の活性化、尾道市全体の活性化につながると考える。街全体が活性化されるということは愛着の湧く若者や、進出してくる企業も増えると考ええる。

最後に

現在、尾道市に対する若者の愛着が低い街ではある。しかし、大規模な改善をしなくても、まずは若者の欲求を満たせるような工夫をすることで活発な印象のある街にチェンジすることが可能であり、各地から若者が訪れるようになり、愛着が高まるのではないかと思う。

○私は今回のレポートで尾道市の他県・他市と比べて際立って見える「少子高齢化」について、子ども手当てに焦点を当てながら考えてみる。

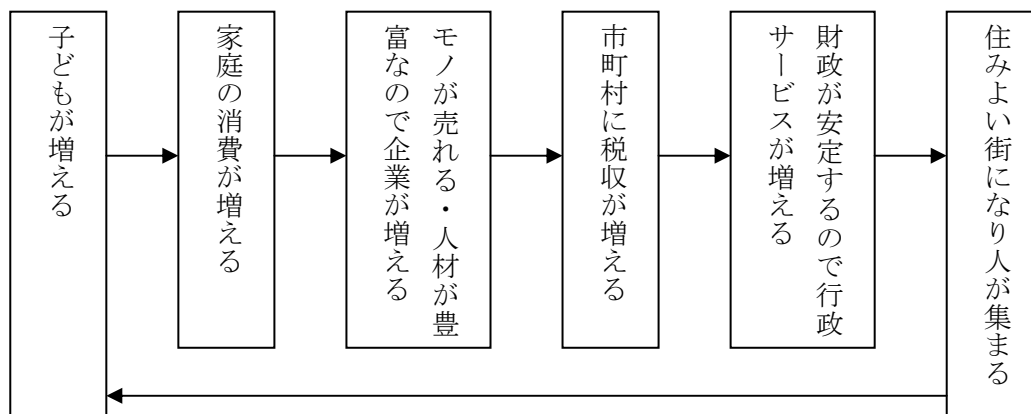
子ども手当てとは

…15歳以下の子どもの保護者に毎月2万6千円を支給する制度。

目的

…日本政府が家庭の子育てを支援するためにかけている予算は、GDPで比較すると先進国の中では少ないので、これを増やして子育てを個人の問題ではなく社会全体の問題として考えて支えていくことで、「子どもを安心して生み育てることができる社会の構築」を目指している。

では、子ども手当ての目的である「子どもが増えること」のメリットとは何だろうか。



以上のように、子どもが増えることでのメリットは広範囲にあると考えられる。

しかし、子ども手当て支給により、「子どもを増やす」ことができるのであろうか。私は各家庭の経済的理由のみで、若者が子どもを産み育てていないとは言い切れないと思う。何か他に原因があるのであれば、その解決を子ども手当ての財源とするべきではなかろうかと考える。

○そこで、具体的な数字を見ながら検討していこう。

<p>・尾道市の子ども手当で支給対象 約 18,000 人</p> <p>対象人数 18,000 人 × 子ども手当で月 26,000 円 × 12ヶ月 =5,616,000,000 円</p>

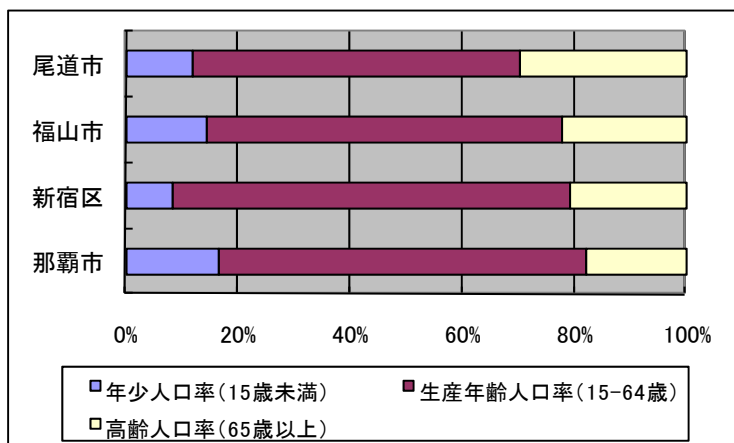
なんと、約 56 億 1600 万円にもなるのである。

尾道市の歳入総額（約 570 億円）の 10 分の 1 に当たるではないか。

これは、少子化対策として有効な使い道が他にあるのではないだろうか。

○では次に、尾道市の現状を把握していこう。比較するのは尾道市の隣に位置する福山市、若者の集まる東京の新宿区、出生率が高いことで有名な沖縄県那覇市である。

	尾道市	福山市	新宿区	那覇市
人口総数	149,335 人	463,817 人	281,783 人	314,031 人
年少人口率（15 歳未満）	11.9%	14.5%	8.4%	16.6%
生産年齢人口率（15-64 歳）	58.6%	63.5%	71.1%	65.6%
高齢人口率（65 歳以上）	29.4%	22%	20.5%	17.8%
出生率（人口 1000 人当たり）	7.06%	9.62%	7.34%	10.84%



上図は人口分布をわかりやすくグラフにしたものである。出生率が高い那覇市・福山市は年少人口率が高く、尾道市は少子化というよりも高齢化がひどいことが読み取れる。また、新宿区は尾道市よりも年少人口が少なく、労働者の多いオフィス街であることが見て取れる。

尾道市は他県・他市に比べると、高齢者をサポートするサービスも充実させる必要があると

思われる。

○では、本題の少子化の原因であろうとされる、産婦人科医の数と待機児童について見てみよう。

	尾道市	福山市	新宿区	那覇市
出生率（人口 1,000 人当たり）	7.06%	9.62%	7.34%	10.84%
産婦人科医師 15-49 歳女性人口 10,000 人当たり	5.25 人	3.51 人	20.49 人	4.04 人
保育所 定員数	約 2,000 人	約 11,000 人	約 3,300 人	約 6,700 人
待機児童数	0 人	0 人	70 人	203 人

この結果から見てとれることは、まず福山市に比べ尾道市のほうが産婦人科医は多く、さらに新宿区は尾道市の約 4 倍の医師がいるということより、出生率と産婦人科医の関係は実際は薄いのではないかと思わせられる結果であったということである。交通が便利な場所なので、病院を経営する立地条件が良いからなのだろうか。さらに、出生率の高い那覇市は新宿区よりも待機児童が多い。待機児童の対策をうったならば、より高い出生率は他県にない魅力のひとつにできると思われる。

○さらに、少子化の原因として調べていく中で、特に驚きだったのが下水道の普及率である。

	尾道市	福山市	新宿区	那覇市
下水道普及率	9.9%	65%	100%	88.8%

尾道は他市・他県と比べ、驚くべき低さである。これでは、清潔な環境で育ってきた現代の若者が、自分の子どもを下水道の整備されていない地で（もちろん、近年は下水道が無くとも溜め込み式の水洗式トイレがほとんどで、表面的には気にならないと思うが）、産み育てようとするであろうか。

また下水道普及が低い地は、同様に道路や交通機関などのインフラ整備も進んでいないのではないかと思われる。

○若年層を集めるために、次のような対策が有効であると考える。

福山市と比べると産業では及ばない尾道市が、企業の多い福山市のベッドタウンになることはできないだろうか。アクセスは20分という短時間であることから、尾道市に家を建てようかと思えるような対策をとってみるのである。

- | | |
|-------------|-----------------|
| ・バイパス近くの開拓 | ・住宅購入のための補助金支給 |
| ・道路・上下水道の整備 | ・バスの増便などのインフラ整備 |

また、尾道市には表立った場所に公園がないことなど、子どもを安心して育てられるために以下のことも有効であろう。

- | | |
|--------|----------------|
| ・公園の整備 | ・バス通りにある通学路の整備 |
|--------|----------------|

子どもが安心して通学し、遊べる環境は、親にとっても安心で高齢者にとってもすごしやすい環境であるといえるだろう。また、現在尾道市に住んでいる市民を他市・他県に移さないことも重要であろう。

○結論として

実際に上記の対策をとるための財源をどうするかが重大な問題である。前ページで計算した56億円もの「子ども手当」を財源に当てるのはどうだろうかと思っていたが、残念ながら今日の政治状態では期待できそうにない。

では、尾道市の税収アップとなる対策を先に立てなくてはならない。税収アップ対策としては、人をいかに集めるかであろう。

- ・観光客 …千光寺と、今年はNHKドラマ「てっぺん」のロケ地であることを売る。
ちょうど私もこのドラマのロケにエキストラで行ったのだが、会場では老若男女問わず本当に楽しそうに参加しており、ミーハーでお祭り好きな市民も含め、ドラマのイベントを開けば経済効果は高いのではないだろうか。
- ・大学生 …尾道大学のE棟建設が決定したことから、経済情報学部の定員を倍にする。
- ・市民 …すぐ打てる対策として、外国人労働者や単身赴任者など短期間のみ居住する人を集めるために、居住初年度は住民税を1割引きする。
一人当たりの住民税は減るが人数が増えるので、総額的にはアップするのではないだろうか。

以上のことが私の考える税収アップの対策である。

○最後に

私なら尾道市をこう変えると題してレポートを書いてきたが、尾道市についてほとんど意識せず過ごしていたことを自覚した。町並みや商店街を改めて見て、尾道市の現状を自分の目で再認識することで、また良い改善点を見つけられるのではないかと思う。

私のバイトしているオートボックスは、カー用品の販売や車のメンテナンスを行う企業である。店舗では、車のメンテナンスを行うピットという部分が駐車場に面しており、ご来店いただいたお客様に作業を間近で見えていただくことができ、自分の車が今どのような状態になっているので確認して貰えるので安心してもらえる。同様に店内からも見るようになる空間もあります(人工物)。社員全員がお客様により良いサービスを提供できるようにという意識で作業をこなしている。社訓の中にもあるが、笑顔。そして、他とは違う、オートボックスにいったら安心してくるまにこれからも乗れる、不安なことは親切に判りやすく教えてくれる店をめざしてはたらいっている。(価値観)。良いサービスを提供するために社員同士はしっかり意見交換をしている。みんなが対等な立場になって話をする機会を定期的に持っている。新しい車の知識は本社から送られてくるのでそれを全員で勉強会もおこなっている。そのようなことを定期的におこなって地域に根付き、お客様が気軽に立ち寄れる店になった(前提)接客業の店であるからお客様のことを考えた組織文化になっている。このように、オートボックスの組織文化はあるのである。

ユニクロは組織改革を行う前は、全ての店舗に本社から同じだけ物が送られるシステムをとっていたが、組織改革を行うことによって各店舗に権限を持たせて、店舗と本社の間にはエリアマネージャーをおいた。古い垂直分業から新しい垂直分業に改革をおこなった。各店舗が今まで以上に権限を持ったことで、店長から店舗の社員まで実際に現場に居る人間が必要なもの判断できるので在庫が大量に余るのを防ぐことが出来る。店長にもランクをつけて一番上の全店舗でも1人しかいないスーパー店長になると本社の役員なみの権限を与えられるので、店の売り場をチェックして気づいたことや改善してほしい点を本社におくって、それが本社や他の店舗の人に見てもらいユニクロ全体ですばやく改善する。気づいたことはすぐその場で修正するのである。現場の声を聞き、現場の意見を尊重することで、ユニクロを一つにまとめること成功した。

ユニクロの組織改革は「服を変え、常識を変え、世界を変えていく」を新しい理念にして今までの古い垂直分業からグローバルワン・全員経営の組織文化を浸透させようとしている。僕が思うにただユニクロで働くのではなく、働いている社員たちが自分でユニクロより良いユニクロに変える。と強く思いながら働く環境になりユニクロ全体が向上する改革だったと思う。それは業績をみたらわかる。つまり社員の価値観は、より「自分が働く会社」になったと思う。言われたことだけこなし、本社との距離がとおかった古い考えではなく、自分も経営に参加しているという新しい考えに変わった。本部はよりよいサービスを提供して、店長は考える人。ヒエラルキーではなくて一人一人が自立して考え、行動し、全員でユニクロを経営していくと

いう考えを浸透させようとしているのである。

最後にもはっきりと書くと、グローバルワン・全員経営の会社に変わりをとげ、全社員にその考えを浸透させている新しいユニクロに生まれ変わったのである。

尾道市をどう変えるかというテーマについて、今回、私は「尾道市をより過ごしやすくするにはどう変えるか」を論じたい。その中で生じる、財源の確保や土地の有無、建設等の費用などの問題については、今回は一部省略したい。

では、まず尾道市について詳しく見てみることにする。

図1 市区別推計人口・世帯数及び人口動態（平成22年4月現在、一部抜粋）

市区町	面積 (km ²)	推計人口総数 (人)	世帯数 (世帯)	人口増減数 (人)
広島県	8,478	2,858,002	1,187,890	△ 6,962
広島市	905	1,169,224	511,164	△ 2,510
福山市	518	461,893	179,684	△ 639
呉市	353	241,348	100,682	△ 773
東広島市	635	187,764	78,950	△ 447
尾道市	285	145,518	59,031	△ 259
三原市	471	101,152	40,601	△ 341
府中市	196	42,829	15,825	△ 90
世羅郡世羅町	278	17,589	6,486	△ 71

図2 広島県地図

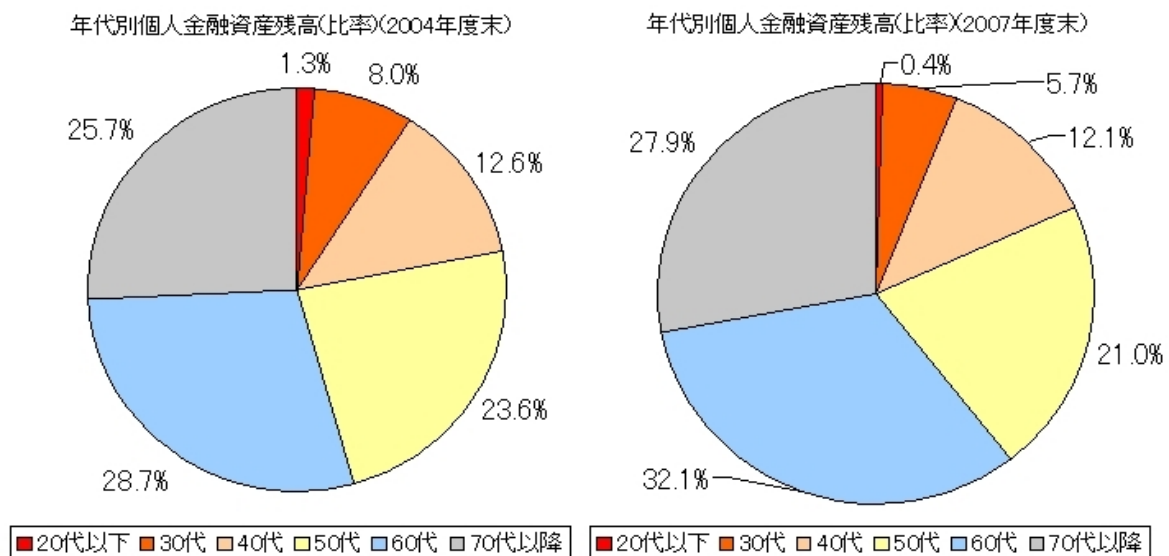


尾道市は広島県の東部に位置し、広島県で5番目に人口が多く、「[坂の街](#)」「[文学の街](#)」「[映画](#)

の街」と言われるように広島県の中でも全国的に有名である。瀬戸内海に面し、昔の町並みが残っているからか過ごしやすい雰囲気を持っているが、暮らしの面で考えると不便な部分が多い。隣接している福山市と比較をしてみると、面積の差を考えても人口、世帯数ともに福山市のほうが多い。スーパーやコンビニ、外食店などもやはり福山のほうが多く、市の発展が盛んなのも福山だ。尾道と福山のどちらが暮らしやすいかと聞かれると、多くの人が福山と答えるだろう。尾道は昔の町並みが残っていることをウリとする分、今の人たちにとっては暮らしにくいと言える。尾道の学生にとっては、尾道には遊ぶ場所や外食店のバリエーションが少ないため、どうしても福山市まで行くことになる。会社員の人たちにとっては、バス・電車の面で不便が多く、やはり外食店が少ないため飲みなどに行くにも偏ってしまう。高齢者にとっては、町並みが良くても、趣味を楽しむことや移動については不便だろう。この不便な点を、福山市ほどとはいかずとも、解消するためにはどうすれば良いのだろうか。

不便な点といっても、交通の面は本数を増やしたり終電までの時間を長くしたりと、少しずつ変えていくしかない。反面、娯楽や飲食の面では工夫のやりようがある。少し古いデータではあるが、以下の図3を見てみたい。

図3 年齢階層別の金融資産保有割合



これは内閣府/野村総合研究所が発表したデータをグラフ化したもので、これを見ると年齢別にどれくらいお金を抱えているかが分かる。グラフによると、半分以上の金融資産を60代、70代以降の人が持っており、20代や30代の若者はほとんど持っていないと見てとれる。そして、その傾向は年々著しくなっている。今の世の中、若者はお金をあまり出せず、逆に高齢者はお金をたくさん出せるということだ。尾道市を過ごしやすくするためには、若者向け、高齢者向けで違う工夫をする必要があるだろう。

まず、若者向けとして、飲食店や娯楽施設、服などの生活用品店の数を近辺に増やすのが良

いだろう。現在、尾道には安値で気軽に行ける飲食店が少なく、あってもすぐには行けない場所にある。食べ放題、ファーストフード店などの安値で気軽に入れる飲食店を増やすことで、わざわざ福山に出向くことも無くなる。娯楽施設は、市内にしっかりした大きなものをいくつか増やすだけで、満足度は大きく変わるだろう。そして、大人向けの服、雑貨の店ばかりでなく、若者向けの店も増やすことで暮らしやすさは増すだろう。若者にとっては、これだけで大きく尾道が暮らしやすくなる。若者のために限らず、このような店を増やすことで多くの人にとって尾道が過ごしやすくなるのではないか。

次に、高齢者向けとしては、多くお金を出せるという面に注目してみる。次の図4、図5を見てみたい。

図4 尾道市の人口ピラミッド (平成 21 年度)

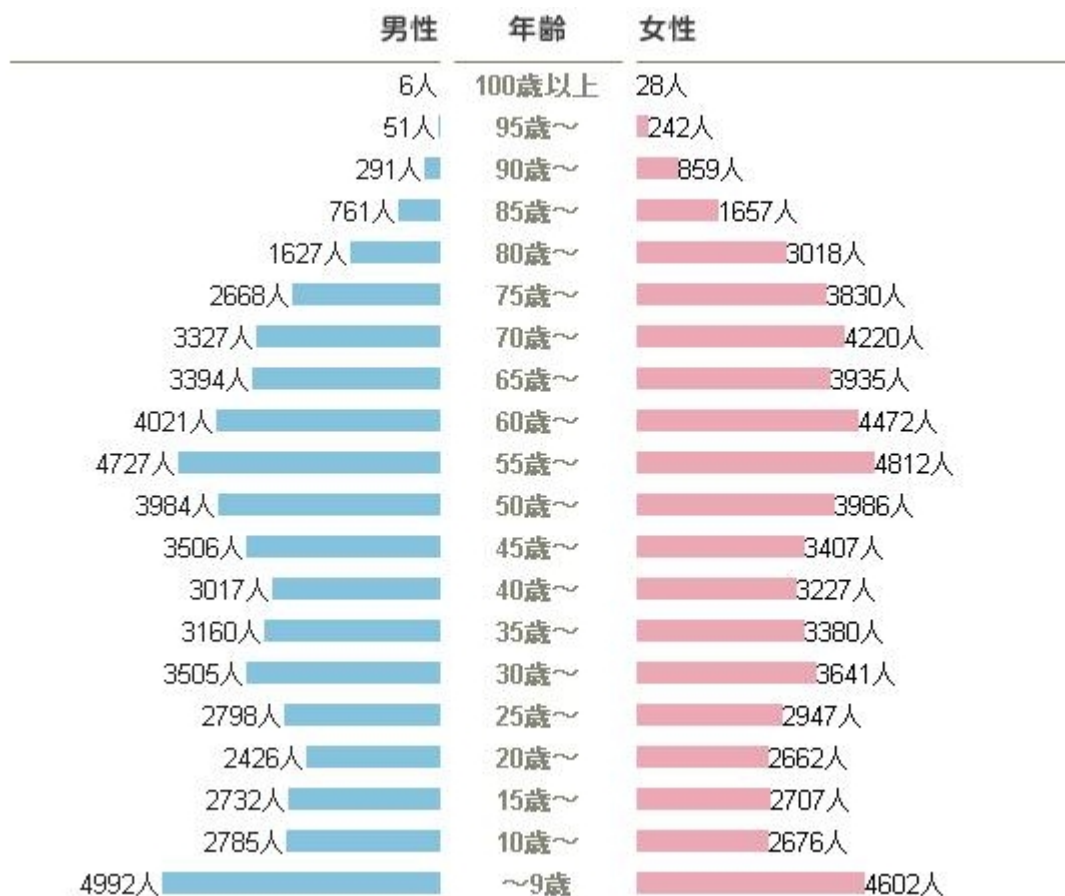


図5 内閣府「高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査」 (平成21年度)

Q4SQ あなたが生きがいを感じるのはどのような時ですか。

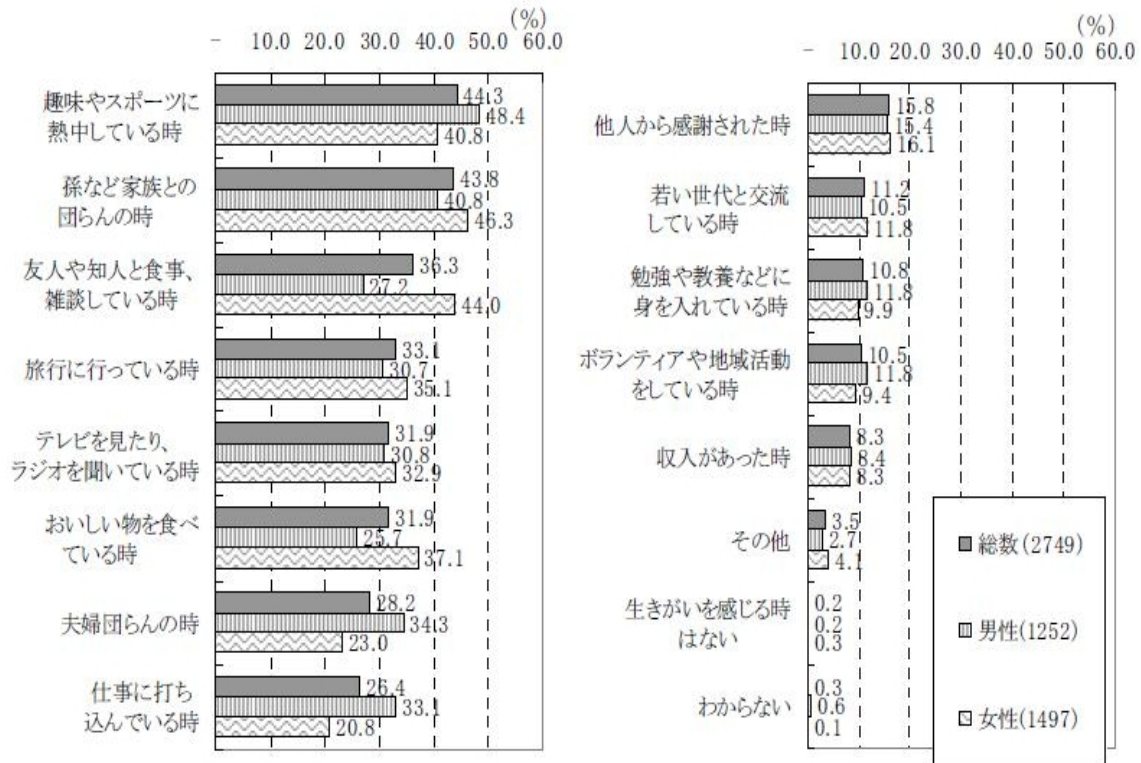


図4を見ると、尾道市の人口割合として高齢者も多いが、9歳以下の子供も多いことが分かる。つまり、孫を持つ高齢者が多い可能性が高い。また、図5によると、高齢者が生きがいを感じる時は、「趣味やスポーツに熱中している時」、「孫など家族との団らんの時」、「友人や知人と食事、雑談している時」が多い。これらから、高齢者向けとしては、多少値段が高くても満足できるサービスを増やすのが良いだろう。高齢者が孫のために利用することになるであろうベビー用品店やおもちゃ屋、高齢者向けの少し高級な飲食店や生活用品店、趣味やスポーツのための場を与えるなど、広範囲の人たちにニーズが少ない分、店舗や場所を少なめにし、その分少し高値でサービスの良い店を揃えとちょうど良くなるのではないかと。

以上のように、尾道市をより過ごしやすくするためにはどう変えるかということで、主にどんなサービスが必要かを述べてきた。尾道市は昔の町並みが残っているからこそ魅力があるのかもしれないが、暮らしを良くするためにはいくらかの改良も必要であろう。もちろん、その町並みを好む人が居たり、観光客にとってはそれが目当てということもあるのだから、一部は暮らしのため発展させ、その他の町並みは程よく残していくことになる。発展させる一部として、尾道駅の西側はまだ店舗などを増やす余地があるように思える。そして、これらの案に関しての財源などの問題だが、まずは高齢者向けのサービスを実施し、財源確保をするというのが理想である。また、企業を勧誘することについても努力が必要となるだろう。

尾道市は、暮らしのサービスが充実すればとても過ごしやすい市となる。尾道大学もあるのだから、若者向けの店舗ももう少しあっても良いはずだ。このままでは、2011年4月開学を目指している福山市立大学が完成した時には、福山のほうに多くの新大学生が流れる可能性もある。昔の町並みだけをウリにせず、暮らしの面も充実させることが必要になってきたと言えるだろう。そのため、私なら以上に述べてきたように尾道市を変えるであろう。

(出典)

- 図1 広島統計 <http://toukei.pref.hiroshima.lg.jp/index.html>
推計人口・統計表・第2表
- 図2 広島社会福祉協議会 <http://www.hiroshima-fukushi.net/index.html>
- 図3 参考 http://www.gamenews.ne.jp/archives/2009/01/post_4462.html
- 図4 HOME'S不動産投資 <http://toushi.homes.co.jp/>
- 図5 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）のホームページ
<http://www8.cao.go.jp/souki/index.html>
高齢社会対策・高齢社会対策に関する調査（平成21年度）

尾道市の財政及び環境

宗重 将俊

尾道市を変える意見を述べるにあたって現在の尾道市の財政状態や環境特性を織り込みながら述べたいと思います。

財政状態の改善

2007年時における尾道市の財政状態

- 財政力指数は0.61で、この値が1.0を上回れば地方交付税交付金の不交付団体となり、下回れば地方交付税交付金が交付団体となります。
- 経常収支比率は99.3%で、75～80%が妥当地であるため、人件費等が高い傾向にあることがこの数値から読み取ることができます。
- 実質公債費比率は交際費により財政負担の程度を示すもので、尾道市は13.3%で県内でも高い位置にランクインしています。
- 起債制限比率は地方債の許可制限に掛る指標として地方債許可方針に規定されたもので、尾道市は13.6%で要注意団体に位置している。因みにこの数値の制限枠は次のとおりです。

15～20%未満で要注意団体。

20～30%未満で一般単独事業・厚生福祉施設整備事業の制限。

30%以上で一般事業債の制限。

また、上記のデータ及び全国ランク・広島県内ランクは以下の表を参照。

財政項目	データ	全国ランク	広島県内ランク
財政力指数	0.61	647位	12位
経常収支比率	99.3[%]	1645位	20位
実質公債費比率	13.3[%]	711位	7位
起債制限比率	13.6[%]	1444位	15位

平成20年度普通会計決算のデータ

人口	149,335	人(H21.3.31現在)
面積	284.85	km ²
標準財政規模	34,498,117	千円
歳入総額	58,693,415	千円
歳出総額	57,639,664	千円

実質収支 538,480 千円

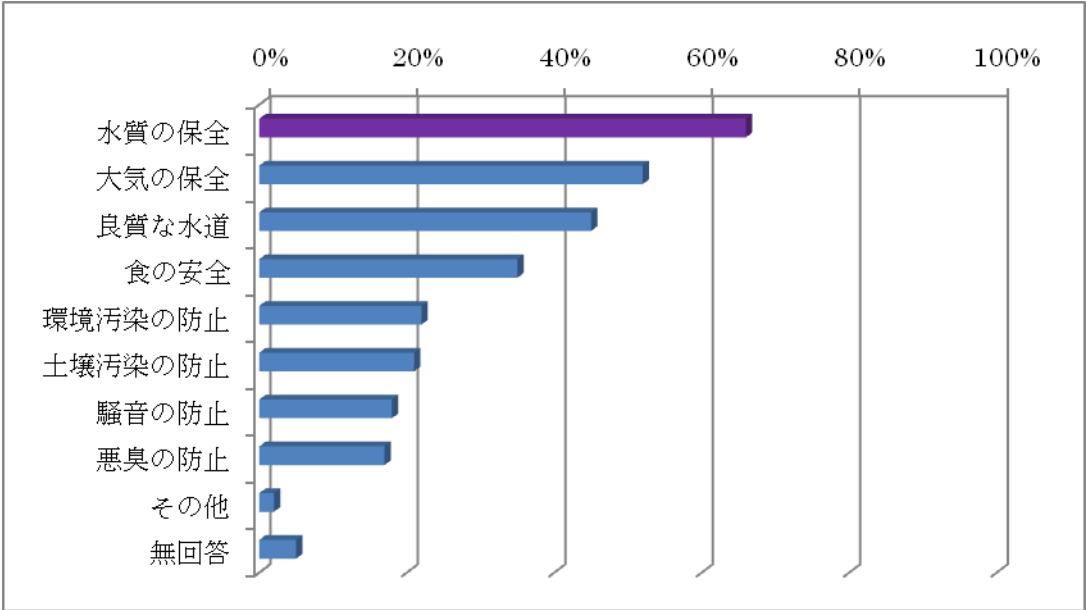
上記のことを踏まえた上で、尾道市の財政力指数をみると、元々税収が少なく財源に余裕がない財政基盤であったにもかかわらず因島市や瀬戸田町などの財政力の低い市長と合併した影響が表れ、低い数値になっていることが分かります。これを改善するためには、市の税金の確保や財産収入などの自主資源の確保が必要になってきます。

また経常収支比率が99.3%とかなり悪化しており、人件費や公債費の削減に努めることが必要です。ここでは全体での比率を示しているが、人口1人当たりの人件費や物件費なども高い傾向にあります。高い傾向にあるとはいえ、合併後には支出額自体は減少しており、物件費等も節減しています。しかし、ごみ処理や消防などの市が単独で行っている業務が多いため、一人当たりの人件費が依然高い状況にあります。これには、私たちの通う市立の尾道大学を尾道市が有していることも主要因として含まれています。

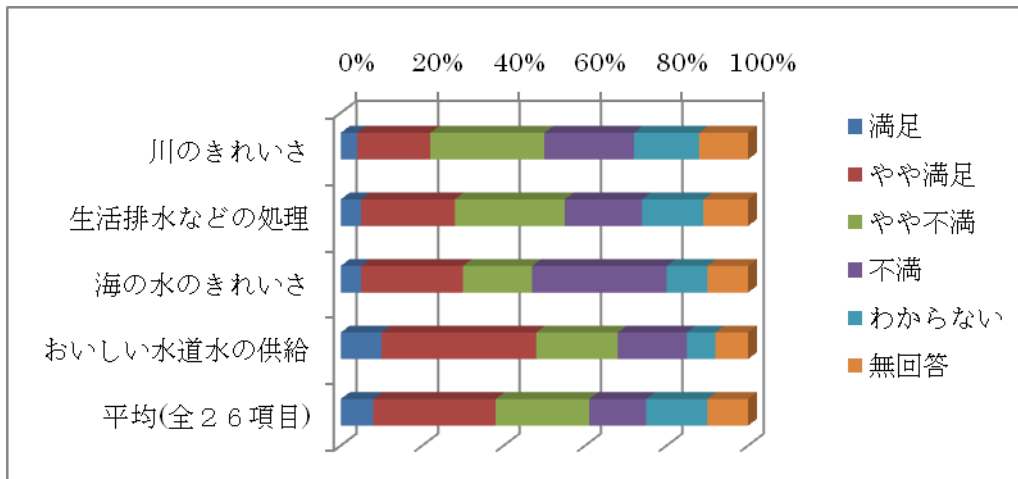
下水道の早期整備

- 尾道市の環境特性

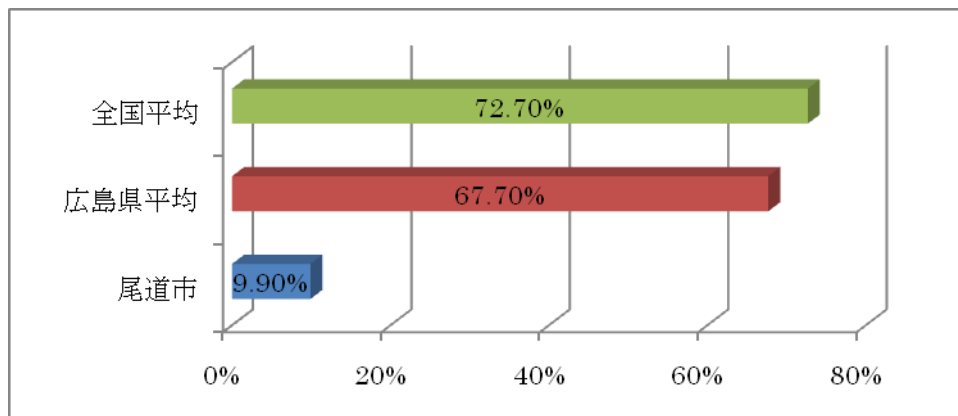
尾道市民の市民アンケートの結果から、生活環境の保全が最も重要であると考えられていることが読み取れます。また、その中でも水質の保全を6・7割の市民が望んでいます。



水質の保全が取り組むべき課題として、下水道の普及の遅れなどから生活排水の流入に伴う河川の水質汚濁や海域の水質悪化、川や海に様々な廃棄物が沈殿するなどがあります。市民の間でも海や川の水質の不満度と重要度が高くなっており改善が望まれています。(下図参照)



下の図は尾道市の現在の下水道普及率です。



この図を見る限り、いかに尾道市の下水道整備が遅れているのかが一目瞭然です。下水道の整備が遅れている物理的原因には、沿岸部の狭隘な地形等、施工条件が厳しいことが挙げられています。そのため、莫大な投資と時間を要することが予想されています。さらに、経済的要因として、尾道市の財政状況が悪化しているため、下水道事業への投資額が平成4年をピークとして低水準化しており、整備の遅れに拍車をかけています。

市の今後の方針として整備を現在より積極的に行うとありますが、今年度の尾道市の予算編成では公共下水道事業の予算は、前年度と比較して24.1%減、額にして597,809千円の減額になっています。これでは、市が提言していることと実際にやっていることとでは矛盾が生じているようには感じられてなりません。水は自然を育み、健全に生きていく上でかけがえのないものであり、市民の早急な対策を求める声を聞きながらこのような予算編成をしては尾道市の今後が懸念されかねません。予算の内の駐車場事業や尾道大学事業など、他の予算を削ってでも下水道事業への予算を増やし、私たちの生活環境の改善並びに向上を目指していくことが市の市民への配慮として必要なのではないかと考え、私の尾道市を変えたいという意見としたいと思います。

私が尾道市を変えようとしたらどうするかをまとめてみる。尾道市を変える方法はたくさんあると思われるが、まとめやすいように今回は収入増大に焦点を絞って考えてみる。

尾道市は有効利用できる土地がある半面、予算や人口の問題で発展が難しい環境にあることを前提に話をすすめてみる。そうした場合、尾道市の経済活動を活性化する必要がある。しかし、まず考えられる問題なのは人口である。以下の表を参照に考えてみる。

1980年	180,901人
1985年	177,532人
1990年	166,930人
1995年	159,890人
2000年	155,200人
2005年	150,225人

[総務省統計局](#) / [国勢調査\(2005年\)](#)

尾道市の現状は年々人口が減少している。現代日本の問題点である過疎化であるが尾道市の例外ではないようである。こういう状況のなか、尾道市を再建するために必要な産業は何だろうか。尾道という特色・文化を生かした、他との差別化を図る事業を検討しなければならない。

現在、尾道市で主要な産業としてあげられるのは造船業・農業・漁業および海産物加工業・観光業・製造業である。これらの事業の中で、尾道市の現状を考慮したうえで比較的數字を伸ばしやすく、なおかつその他事業に相乗効果をもたらす期待のできる事業はどれだろうか？

ここで本題に戻る。私が尾道市を変えるために必要だと思うものは「観光事業」であると考え。それも国内からの需要だけでなく外国人旅行者に対して主に向けたものである。

外国人旅行者を増加させた場合の期待できる経済効果は以下のとおりである。

- ・飲食店・名産品の需要拡大
- ・バス・タクシーの交通事業の需要拡大
- ・グリーンヒルホテル・尾道国際ホテルといった宿泊施設の利用者増加
- ・尾道商店街の活性化

尾道市が外国人旅行者を受け入れるための強みとしては、広島や宮島といったメジャー観光スポットからの観光客を引き入れやすい環境にあることである。広島は戦争の歴史、宮島は世界文化遺産を強みとして環境事業に取り組んでいる。尾道は戦火を免れたため、古寺や神社が多く残っているという強みがある。しまなみ海道といった瀬戸内海の風景を楽しむ有数の地域であることも尾道の誇れる観光スポットである。また広島や宮島と比べ物価が安い点（広島県オフィシャルサイト参照）も強みだと言える。

次に、そうした事業強化を実行しようとした場合の問題点と解決策を挙げていく。

まず、次の地図から想定できることを考えてみる。



4travelWeb サイト転載

地図から読み取れる問題点として、空港の位置と広島県の主要観光地域を考えると、尾道への観光客の引き入れが難しい点にある。よって何らかの目的がないと尾道市へ訪れることはないと想定される。

このことから尾道市内部だけの観光事業強化では、海外旅行者増加は伸び悩むことになる。空港・主要観光地での広告、宣伝が必須となると考えられる。さらにそれに沿って観光バスなどの交通手段の充実化も図る必要があり、経済的なリスクが少ないとは言い切れない。

次に、尾道市内部に目を向けた問題点を挙げていく。

現在、尾道市内には観光案内が設置されてはいるが、その数は多くはなく、さらに外国語表記の観光案内が少ないところをみると、観光事業のインフラが十分でないということが分かる。観光客の増加に伴い、観光案内の充実化が課題となる。

さらに、次の写真から考えられることを想定してみる。



Mapple 地図引用

四角で囲んでいる場所が駅、丸で囲んでいる場所が尾道の主要な観光場所である。ここで問題なのは、「新幹線」が停車する場所は北側の新尾道駅であるということである。広島市からの観光客引き入れが課題ならば、新幹線を交通手段として利用されることが十分に考えられる。つまり、新尾道駅からの観光案内・主要観光場所へ誘導するインフラを十分に整備する必要がある。

今回のレポートをまとめてみると、

- ・尾道市を変えるための一つの例として観光事業強化がある。
- ・広島県の主要観光地の強みとは違う方向性で観光事業の強化を図ることができ、そうすることで主要観光地から尾道市内への観光旅行客の引き入れが期待できる。
- ・そのため問題点として尾道市内の観光事業のインフラ整備、そして広島県内の主要観光都市での宣伝の充実化が課題である。

以上が「私なら尾道市をこう変える」という案である。

～尾道活性化計画～

山口 翔太郎

尾道大学が所在する、ここ広島県尾道市は、広島市と岡山市の中間地点であり、人口約15万人が暮らしている。1995年にはしまなみ海道が開通し、四国との玄関口として交通面はもちろん、物流面からも便利が良くなった。また、「坂の街」、「文学の街」として全国的にも有名であり、尾道ラーメンや千光寺などの名物・名所を求め、観光客もよく訪れ、人情豊かな港町ということ知られている。

尾道市は、旧来より北前船が寄港するなど港町・商都として栄え、戦前までは広島市に匹敵する程の経済力を持っていたと言われて、銀行の本店や企業の支店なども存在していた。また水運に恵まれている立地から古くから尾道・向島・因島に造船所が存在し商都のみならず工業都市の一面も持っており、特に因島は造船景気で栄えていた。しかし、近年は造船業の斜陽化により衰退の一途を辿りつつも新たに「瀬戸内の十字路」として交通条件の良さを利用し、工業団地の造成により他産業の誘致を進めている。- (Wikipediaより)



↑坂のある街並み



↑千光寺から見る尾道市

そんな尾道市であるが、実際に自分が住んでみて、より住みやすい環境にしようと考え、いくつか改善点が見えてきた。今の尾道市の状況を踏まえながら、自分なりの尾道活性化計画案を挙げていきたいと思う。

私が考える、尾道市をますます活気づける策は、「公共交通機関の増便」、「娯楽施設の増設」の2つである。この2つの具体的な改良策を、順を追って説明していきたいと思う。

公共交通機関の増便

まず第一に、公共交通機関の増便を決定すべきである。その理由として、

- ① 観光地として全国的にも有名であり、観光客がよく訪れるため
- ② 高齢者が多いので、移動手段としてほとんど公共交通機関が頼りという現状
- ③ 終電が早く、夜を長く楽しめない。

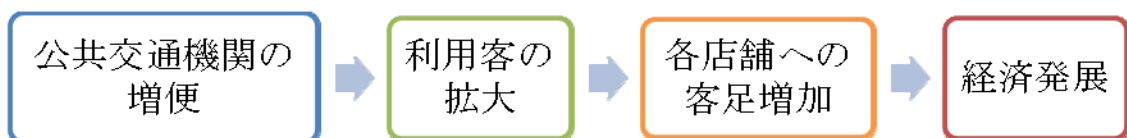
という3つがある。

尾道市を発展させるには、せっかく有名になった名物や名所を利用しない手は無い。観光客の方でわざわざ遠方からお越しくださる方も多数いるので、できるだけ多くの名物や名所を巡っていただきたい。そのためには、休日などは観光客の方に配慮したダイヤを組む、割引制度を設けるなどはどうだろうか。そうすれば、“安く”、“いろんなものが楽しめる”ということで、最初のうちは財政的に苦しいかもしれないが、結果的に「ますます観光客を呼び込むことができる」＝「尾道市の経済が発展する」と、私は考える。

さらに、尾道市は高齢者が多く、公共交通機関がすごく頼られている。実際に、駅前やサテェ、旧道沿いなどを通っていると、バスを待っている高齢者の方をよく見かける。少し買い物に出掛けるにしても、高齢者の方は足や腰が悪い人が多いため、バスは貴重な移動手段なのである。また、尾道大学生も久山田まで上がるのにバスを利用する学生が半数近くいる。特に雨の日などは混むため、本来乗ろうとしていた便に乗れずに、授業に遅刻せざるを得ない状況になったりしたことを、私自身が経験している。

そして、より若者志向、且つ現実的にきつい問題として、バスも電車も終電が早いというのがある。みんなで福山や広島に飲みや遊びに行ったとしても、11時頃までには切り上げないといけない、久山田在住の人は9時半頃にはもうバスの終電があるなど、とにかく夜を存分に楽しめないのである。せめて0時過ぎ頃までは、1時間に一本でもあれば、だいぶ違うのにと実感する今日この頃である。

このようなことから、今の尾道市にとって公共交通機関の増便は、第一に実施するべきであると、私は考える。

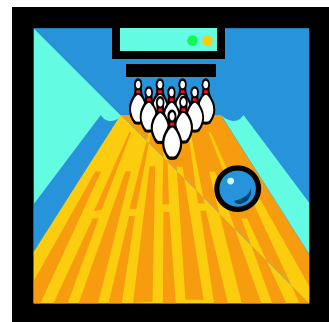
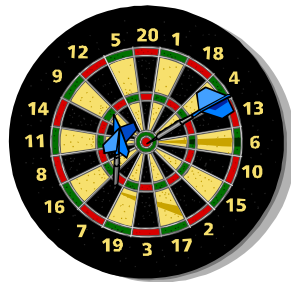


娯楽施設の増設

ここからは多少個人的な希望も絡んでくるが、尾道に住む学生などを中心に、この要望はよく耳にする。事実、東尾道や松永周辺はカラオケやインターネットカフェなど、夜遅くまで営業している店舗がよくあるが、肝心の尾道市中心街が、夜になると閑散としており、もの寂しいものである。地域住民との兼ね合いなどがあるのだろうが、防音やマナーの徹底を行えばいいのではないだろうか。ただの注意では強制力がないので、ルールが守れない人は、罰金や次回からの来店を禁止するなど罰則を強いものにすれば、地域住民に迷惑をかけることもなく、なおかつ学生や大人も最低限のルールを守りつつ楽しむことができる。

ここでひとつ懸念材料として、尾道商店街など、元からある商業施設の衰退が挙げられる。私自身もたまに商店街を通ったりするが、昔ながらの景観と店の人の温かさが滲み出ており、すごく落ち着く空間である。しかし、現状はシャッターが閉まったままの店が多数あり、顧客の買い物志向としてもサティやフジグランなどを利用する傾向が強く、客足が少ないというのが正直なところだ。なので、どうかこういった商業施設を活用できればと思う。例えば、前述したシャッターが閉まった店舗や空き店舗を利用し、カラオケやダーツバーなどの娯楽施設をつくる。そうすればまず注目され、たくさんの人が訪れることによって、商店街の他の店にも寄ってみようかという気になる。私自身、大学1、2年の時はあまり商店街を利用していなかったが、友人に誘われて行ってみると、満足なボリュームを提供してくれる食堂や自分の趣味に合う服の店があったりと、意外に楽しめた。他にも、あまり若者志向のものがあまりないという先入観を持った人がたくさんいると思われる。そういった人たちを呼び込むためにも、この娯楽施設の増設はかなり役立つと考える。

また、ボーリング場やファーストフード店など、老若男女が楽しめる施設を空き土地などを利用して設置することができれば、その場所を中心に人が集まり、交流と商業がうまくミックスできるだろうとも考察している。



～まとめ～

以上のことから、私は尾道活性化計画として、「公共交通機関の増便」と「娯楽施設の増設」を提案する。その実現のためには、やはり地元住民の理解と協力はもとより、業者との提携など様々な要素が必要不可欠である。

今回このレポートを作成するにあたって、改めて自分の住んでいるところを見直すと、いろいろ改善点が見えてきて、知らず知らずに街のことをよく知ろうとしていたことに気づいた。なので、その土地に住む人がその土地について真剣に向かい合い、よりよい街にしようと取り組むことが、一番街の活性化に繋がる条件だろう。

尾道市は北側の山と南側の海に挟まれているため、平地が少なく山肌に住宅や寺が密集している。このため、道路も狭隘で傾斜するものが多く、「坂の町」と言われる所となっている。このような独特の景観から映画のロケ地として多く使われた。

まだ尾道地区は戦火を免れたため、西の小京都と呼ばれるほど多くの大小の寺が今もなお点在している。

北部の田園地域から南部の島地域まで南北に細長い尾道市は、多くの芸術、文化資源や交流資源、さらに尾道の歴史地区（旧市街地）や瀬戸内しまなみ海道の造形美、多島美に代表される優れた景観資源を有しています。また、古くから、海上交通の要衝として発展してきた歴史があり、海と港はまちを特徴づける重要な財産となっています。これらの資源、財産が尾道の個性を形づくっています。

尾道市は、陸、海、空の交通条件に恵まれており、こうした優位性を活かした、広域的、国際的な交流を進めていくことが重要だと思います。観光町であるため、様々な方法通じて観光客を招くのも重要だと思います。また尾道ブランドの地域資源と産業文化の強化と有効活用も必要だと思います。

旧来より北前船が寄港するなど港町・商都として栄え、戦前までは広島市に匹敵する程の経済力を持っていたと言われて、銀行の本店や企業の支店なども存在していた。また水運に恵まれている立地から古くから尾道・向島・因島に造船所が存在し商都のみならず工業都市の一面も持っており、特に因島は造船景気で栄えていた。しかし、近年は造船業の斜陽化により衰退の一方である。そのため、新たに「瀬戸内の十字路」として交通条件の良さを利用し、工業団地の造成により他産業の誘致を進める方がいいと思います。

また、尾道市は、わけぎやいちじく、ぶどう、八朔、レモンなどが県内でも有数の産地ですが、農家の多くは、小規模な個人経営となっています。生産者の減少や高齢化が進み、後継者の不足も深刻な状況となっており、これに伴って、農業生産額の減少、農地の遊休化が進み、農村の活力低下は、地域の集落環境の荒廃にもつながっています。

このため、農業が事業として成り立つよう生産性の向上や経営体制の改善を図り、加えて、農村集落の環境を保全していくことが必要だと思います。

また、安全で効率的な漁業活動のため、漁港施設など生産基盤の整備を行うのが必要である。漁場環境の整備とともに、資源管理型漁業や栽培漁業を推進し、経営基盤の安定化を図ります。漁港と海域の水質保全と集落の改善を一体的に行うのが大切だと思います。

[著者一覧・五十音順]

明石 成弘
浅田 知美
市場 隆介
猪原 遥香
岩下 真吾
岩見 真実
宇佐美 翔馬
岡本 雄太
馬屋原 彩
尾西 はるか
鬼村 茉莉
檜山 麻由美
門田 楓
川合 亨知
小松原 那奈
木村 千尋
近藤 匡晃
城 めぐみ
高見 祐輔
告 日菜実
都築 亮平
徳山 亘
土井 強平
中本 昌宏
橋本 郁美
橋本 美里
橋本 竜
羽立 寛太
羽 渕 章
肥田 友理恵
兵頭 佑紀
福島 淳
福島 由紀
益田 辰徳
三島 知彬
宗重 将俊
八木 喜徳
山口 翔太郎
楊 美芝

私なら尾道市をこう変える

～〔市立〕尾道大学経済情報学部3・4年生からの提言～

平成22年6月22日 発行

定価 1,500円(本体 1,429円+税)

発行：安達巧研究室 〒722-8506 広島県尾道市久山田町1600番地 尾道大学内

ISBN978-4-904210-03-1 C0033